
死神に愛された少年

璃玖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神に愛された少年

【Nコード】

N4087E

【作者名】

璃玖

【あらすじ】

死神の愛は、深く——おそろしい。

母親を幼くして失い、父と二人きりでありながらも幸せに暮らしていた夕璃^{ゆうり}。しかし謎の爆破事故によって、最愛の父をも失ってしまう。

枯れ果てた感情を抱えたまま十年以上が過ぎたころ、父の死の真相を知るといふ青年アレンに出会い、彼とともに都市へとおもむき国家学校へ進学することを決めたのだった。

都市への移動途中に宿泊したホテルにて夕璃は、姿無き声をもった謎の少年の襲撃にあう。夕璃の父が握っていたという情報をめぐり、社会の闇を、夕璃の周囲を、謎の組織がうごめき始めるのであった。

——死神ノ存在意義ヲ、君ハ知ッテイルカ。

序章†The boy who exists in flame. (前書き)

第一幕

序章†The boy who exists in flame.

The boy who exists in flame.

ビ——…

ビ——…

ビ——…

耳障りな音が室内に響き渡る。

隣に座っていたはずの父親はいつの間にか、通信機を片手に険しい表情でモニターを見つめていた。そのモニターは等間隔で様々な場所を映し出すもので、長い時間眺めていても飽きることがなく、夕璃のお気に入りだった。

しかし今、モニターに映し出された映像は替わらないまま、しかもその映像というのは幼い夕璃でさえも理解できるほどに“普通ではなかった”。

『…特別実験室にて侵入者、実験体……組織の者によると思われ…犠牲者が四名…』

父親の持っている通信機から途切れ途切れに声が聞こえてくる。

小さな爆発音が聞こえたかと思えば、モニターの中では真っ黒な煙が立ちこめていて、人の形をしたモノが無造作に床に転がっている。

そこまで見たところで、夕璃の視界は父親の広い胸によってふさがれた。抱き上げられたのだとわかったのは数秒後で、父親の肩越しにモニターを見たときには、すでに何の映像も映し出されてはいなかった。

父親に抱き上げられたまま、夕璃は、研究所の通路に出た。

「櫻木！」

名前を呼んだ声の主が誰であるか、夕璃にはすぐにわかった。研究所で退屈にしている夕璃をいつも気に掛けてくれた、大好きなおじさんの声。

「浩、無事か」

「ここも危ない。お前は夕璃ちゃんを連れて早く出るんだ」

「何馬鹿なことを言ってるんだ、私はこの実験執行の責任者だ。一人逃げるわけには」

「一人なんかじゃないだろう、夕璃ちゃんに何かあったらどうするつもりだ！…正気になって考えろ、冬也」

いつも優しい浩おじさんが怒鳴り声をあげているなんて、と夕璃は内心驚いた。夕璃はそのただならない雰囲気にならずながらも不安を覚え、思わずその不安を声に出してしまう。

「コウおじさん、ユーリといっしょにいかないの？」

浩おじさんは少し身を屈めて夕璃の目を真っすぐに見つめた。陰しかった表情をふっと緩めて、夕璃に優しく微笑み掛けた。

「だいじょうぶ、夕璃ちゃんと君のパパが行ったら、おじさんもすぐに行くから」

そう言って浩おじさんは優しく夕璃の頭を撫でた。

「…さあ、行くんだ」

「……わかった。夕璃を外へ連れていったら、すぐに戻る」

言い終わるか終えないかのうちに父親が急に向きを変えたため、夕璃はガクンと首を振られる格好になった。父親に抱え直されて、肩越しに見えたのは夕璃達とは反対の方向に走っていく浩おじさんの姿。

「コウおじさ…」

浩おじさんどこに行くの？夕璃たちが行くのはそっちじゃないのに。夕璃が叫ぶ前に、おじさんの姿は見えなくなってしまった。

浩おじさんと別れてから何分も経たない頃。爆発音が夕璃達のすぐ近くから聞こえてきた。

「くそ…来たか…」

父親の低く囁く声を耳元で聞きながら、夕璃は父親の首に回していた腕の力をほんの少しだけ弛め、辺りを見回した。薄い煙が立ちこめているその場所は、いつもの見慣れた研究室の廊下。この廊下のつきあたりにある階段を昇ってしばらく歩けば、外に出られる。

「――夕璃、掴まれ！」

鋭い叫び声に反射的に父親の首にしがみつけば、夕璃は父親の身体ごと横殴りに吹き飛ばされ、すぐ近くで鈍い打撃音がした。

「大丈夫か、夕璃…？」

「ばば、ち…！」

壁と夕璃との間に挟まれるような格好になった父親は手や顔に掠り傷を作っていて、さらに額からは真っ赤な血が流れだしていた。

「パパは大丈夫。ちょっと遠回りになるけど、我慢できるな？」

夕璃は何も答えることができず、流れだしそうになる涙を堪えて父親の首にしがみついた。

「よし、良い子だ」

父親に頭を一撫でされて、それだけで幾分か落ち着きを取り戻す

ことができた。

爆破されて通ることができなくなった道を少し戻ったところに、夕璃が未だかつて入ったことのない部屋への入り口があった。ほんどの場所への出入りを許されていた夕璃が唯一、入ることを堅く禁じられていた場所——“特別実験室”と書かれた扉を開き、父親と夕璃はむせ返るような煙から逃れるように部屋の中へと入った。

「——！」

灰色一色だった視界が、一瞬にして赤色にかわった。燃えあがる炎が眼下に迫っていて、見ているだけで目を焼かれてしまいそうなほどだった。

「ここを抜ければ、非常階段から下に降りられる……もう少し頑張れ、夕璃」

立ち上る炎が、夕璃の鼻先を掠めた。少しでも気を緩めれば飲み込まれてしまいそうだった。まるで赤くて大きな生きものが大きな口を開けて夕璃を待ち構えているようで、夕璃はしがみつく力をより一層強めた。

炎の中に、人の気配を感じた。

「……？」

引き寄せられるように下方にある実験室に目を下ろせばそこには、夕璃と幾つも変わらないであろう年頃の少年がひとり——炎に囲まれ

たまま微動だにせず、佇んでいた。

「ばば、人がいるの、あそこ…」

助けてあげなくちゃ、と少年を指で指し示しながら父親に向かって必死に呼び掛ける。

——炎の中から、鋭い眼光を放つ少年の瞳が夕璃を捕らえた。

「——っ」

ブシュ——…

夕璃が息を飲んだのとほぼ同時に、何かガスが抜けるような空気が室内に響いた。それから何秒もしないうちに、緑色の煙が夕璃と父親の身体をすっぽりと覆ってしまった。

「…！毒ガスかもしれない…夕璃、少しでも息を止めるんだ」

父親が言うが早いかツンとした臭いが鼻を突き、夕璃は慌てて息を止めた。少しでも吸い込んでしまったせいか、夕璃は激しい嘔吐感に襲われたが、口と鼻を小さな手のひらで覆って必死に堪えた。

「あと少しだ我慢してくれ…」

苦しそうな父親を見て、夕璃は必死に苦しさを堪えた。ぽぽだつて苦しいのに、夕璃を助けようとしてくれてるのだから。泣いちゃダメだ。絶対。

「夕璃、外だ」

ぼやけていた視界が開けた。失いかけていた意識が戻ってきて、急に息苦しさから解放されて咳き込んだ。

「けほっ…けほ……」

「よく我慢したな、良い子だ夕璃。怪我はないか？ 苦しいか？」

「…………へいき。ユーリ平気だよぽぽ」

心配かけまいと微笑んでみせれば、それを見た父親は至極安心したようにゆっくりと息をはいた。夕璃の髪を指で梳くようにして撫でると、そのまま頭を引き寄せて夕璃を抱き締めた。

気のせいかな、と夕璃は思った。この時の父親はなぜか、とても泣きそうに見えた。

「いいか夕璃、よく聞くんだ。パパは今から中に戻って、みんなを助けてくる。夕璃はこの階段を一番下まで下りて、できるだけここから離れるんだ。出来るな？」

「うん、できる」

「お守り、ちゃんと持ってるな？」

「うん、ある」

肌身離さず身につけているネックレスを服の下から取り出して、父親に見せる。

「ママの、ゆびわ」

「夕璃。パパの指輪も、預かっててくれるか？」

「うん、わかった」

夕璃が頷いてみせると、父親は夕璃の首からネックレスを外して自分の指輪をチェーンに通した。それを再び、夕璃の首にかける。

「よし、良い子だ。さあ、行くんだ」

「ばば、ばばはユーリを、おむかえに来てくれる？」

——ばばの言ったことをきちんと守れたら、良い子だねって頭をなでてくれる？

「ああ、迎えに行くよ。絶対だ」

「ユーリ、いい子で待ってるね」

灼熱地獄の研究所へ走り去っていく父親の背中に向かって叫んだ

が、その声が果たして届いていたのか。
夕璃が答えを知ることにはなかった。

研究所へと戻ったきり、父親が夕璃を迎えにくることはなかった。

序章†The boy who exists in flame. (後書き)

【訳】 炎の中に佇む少年

一章†T e d i o u s d a i l y l i f e o f g i r l .

T e d i o u s d a i l y l i f e o f g i r l .

今朝は、目覚めが良かった。

夢を見たはずなのだけれど、それがどんな夢であったかは覚えていなかった。

「…パパ、おはよう」

父親は写真の中からいつもと変わらない笑みをこちらに向けていて。もうほとんど覚えていない父親との思い出。忙しかった父親だったが、毎日必ず話す時間を作ってくれた。その場所がたとえ父親の仕事場である研究室であっても、父親一緒に過ごすことができればそれだけで満足だった。

「…パパ」

——ユーリ、もう11年も待ってるんだよ。

あの日から11年たった現在、夕璃は自分が遭遇したあの事故について様々なことを知った。父親が研究所で行われていた実験の責任者であったということ、研究所が何らかの組織によって襲われたということ、その組織の正体は未だ不明であるということ——そして、研究所内にいた人間は敵味方問わず全て殺されていたということ

と。

ノックの音が部屋に響いて、夕璃はとっさに父親の写真を伏せた。

「…誰？」

「櫻木さん、起きていらっしゃる？ 私です、院長です」

「院長先生？」

夕璃は内心驚きながら鍵を開けると、少しだけ開いたドアの隙間から訪問者の姿を見つめた。

「起こしてしまったかしら。日曜日なのにごめんなさいね」

「いえ、大丈夫です。あの、何か御用でしょうか」

「ええ、あなたにとっても大切なお話があるのよ。支度が出来次第、院長室まで来ていただきたいの」

「…はい、わかりました」

「お願いね。ではまた、後ほど」

「はい」

院長が去っていくのを確認してから扉を閉めて、ため息を一つ。夢から目覚めてしまえば、始まるのはつまらない日常。

——パパ、早く迎えにきて。

+

「失礼します」

院長室に入って最初に目に入っただのは、この国ではあまり見慣れない金色の髪 of 男性だった。異国の人を、夕璃は初めて見た。

思わぬ先客に入るのをためらっていると、金髪の客人が振り返って夕璃を見つめた。しばらく見つめあった後、客人は表情を和らげた。

「初めまして。君が、サクラキさん？」

碧く澄んだ瞳に見つめられて、少しどぎまぎしながら夕璃は小さく頷いた。

「櫻木夕璃です」

「ユーリさん、ですか。可愛らしい名前ですね。立ち話もなんですか、掛けてください」

客人に促されて、夕璃は戸惑い混じりに院長先生を見つめた。院長先生が隣の椅子を指し示したため、夕璃は小さくお辞儀をして院長先生の隣の席に腰を下ろした。斜め向かいに座る客人に目をやると、両の碧眼がこちらをじっと見つめていた。

「：あの、話というのは」

何となく居心地が悪くて、夕璃は視線を逸らした。真っすぐ見据えてくるその瞳から逃れたくて、思わずそんなことばが口を突いて出てきてしまった。

「ああ、そうでした。私の名前はアレン・フォード、以後お見知り置きを」

差し出された手を遠慮がちに握り返すと、彼は優しく微笑んだ。

「さて、本題に入らせていただきます。単刀直入に申し上げますと、貴女を我が国の全寮制国家学校へお招きしたいのです」

「私を、国家学校へ？」

「素敵なお話でしょう。隣国の方が直々にお申し入れしてくださるなんて滅多に無いこと。身寄りが無いとお伝えしたら、それならば是非にと言って下さったのよ」

院長先生は喜びに満ちているといった状態で、いつもの数百倍饒舌であるように感じられた。国家学校は、選りすぐられた数少ない人間だけが入学を許可される、いわゆるエリートたちの学校だった。毎年、何千人・何万人という夕璃にはとうてい想像もつかないような数の人々が、狭き門をくぐるために必死に勉強をし、入学試験を受けるのだと聞いていた。

「なぜ、私なんですか？」

「我々は、貴女にはその才能があると判断したのです」

「才能って：私、試験も受けていないのに」

「世間では、色々な噂があるようですね。しかし、噂がすべて真実であるとは限りません。我々は日々、世界中から有望な人材を探し、とめては、国家学校に招待しているのです。試験を受けた後に入学を許可される方々ももちろんいますが、国家学校で学ぶ生徒のほとんどが、我々によって招待された方々なのです。入学者すべてが試験を受けるという決まりなんて、もともと存在しないのですよ」

たとえば、そうだとしても。夕璃は自分が“特別”だとか“才能がある”だとか、そんなふうに考えたことは一度だってなかった。今も、思っていない。

「あなたはどう思いますの？：いえ、聞くなんて馬鹿馬鹿しいかしれませんわね。こんな素敵なお話をお断わりするなんて」

「でも、私は」

「わかってるわ。あなたも驚いてしまって、どうしたら良いのかわからないのでしょうか？そうですとも、突然こんなにも素敵なお話が舞い込んでくるなんて、誰が予想しましょうか。信じられなくて当然だわ」

「でも、私」

「不安がることなんてないのよ。このアレンさんには私たちも絶対的な信頼を置いていますから」

「私、だめなんです」

「ええ、ええ。彼女も是非にと言っておりますわ…」

にこやかに何度も何度も頷いていた院長は、一瞬何かを考えるように眉をしかめた後、目玉が取れてしまうのではないかというほど見開かれた目を夕璃に向けた。

「申し訳ありませんが、お断わりさせていただきます」

「まっ、まさかそんな冗談を…」

あまりの驚きにひっくりかえった声を上げる院長先生の前に、それを制止するようにフォードさんの手のひらが差し出された。

「お待ちください。彼女が断りたいと言う、その理由を聞いてみたい…聞かせてもらえますか？」

彼の碧い瞳が、夕璃はどうも苦手だった。何かを探るような視線であるように思えて、落ち着かなかった——特別、後ろめたいことがあるわけではないけれど。

「小さい頃から、私はここに住んでいました。ここから離れたくないんです」

ここから離れてしまったら、父親との思い出も何もかも、繋がりが全て断ち切られてしまうような気がして恐かった。

もしかしたら、パパがひょっこりと現れて、夕璃を迎えにきてくれるかもしれない。長い間待たせてすまなかった、良い子だね夕璃。そう言っ、頭を撫でってくれるかも——。

「…辛い事でしょうけど、あなたのお父様は11年前に既にお亡くなりになっているのよ。認めたくないのはわかるけれど、いつまでもそのことに縛られていてはお父様も悲しむだけだわ」

淡い期待を抱いてしまっていた自分に気づき、夕璃は胸中で自分を蔑んだ。

何のためらいもなく期待を打ち壊してくれた院長先生に感謝しつつ、現実というものはこんな風に残酷なものでしかないのだと、自らに言い聞かせた。

「もしかして貴女のお父上は、この街で亡くなられたのですか？」

「…そうですけど」

「サクラキ、という名字…どこかで耳にしたことのある名だと思っていたのですが…貴女はあのトーヤ・サクラキの？」

櫻木冬也、確かに父親の名だった。

夕璃が頷くと、フォードさんは微笑んだ表情をわずかに曇らせた。

「そうですか、やはり…貴女のお父上のことは、私も存じ上げています」

聞き流してしまいそうになってから、夕璃は一瞬固まった。パパを、知っている？

「それは、一体どういう…っ」

急ぎ込んだように尋ねるとフォードさんは少し驚いたように目を

丸くした。

フォードさんの表情で夕璃は我に返り、無意識に乗り出してしまった体を椅子に落ち着かせた。

「ごめんなさい、私……」

「構いません、気になさらないで下さい。もし、よろしければ……貴女のお父上のことについて色々とお話をさせていただきませんか？もちろん、時間の許す限りで構いません」

「フォードさんは、あの日の事故のこと、ご存じなんですか？」

「はい。あの事故の日、私自身も研究所に居合わせていました」

「……あの日、あの場に……」

この人はもしかしたら、父親について知るための最後の頼みの綱なのかもしれない。

この糸を手繰り寄せたその先に夕璃の望んだ未来が、存在し得るのかもしれない。

——わずかな希望に、全てを賭けてみようか。

十

準備が終わり次第、夕璃は学院を離れることになった。今着ている制服以外の着替えや、学校で使っていた本などを整理し、カバンに詰めていく。校外学習旅行に行くためにと学院から与えられた、それほど大きくはないボストンバッグだった。全て入りきらないこ

とを考慮して、必要なものから順にカバンに押し込んだ。

「聞いたわよ。あなたここを出るんですって？」

ツンとすましたような声が聞こえて、夕璃は首だけを動かして声の主を振り返った。通った鼻筋と切れ長の目をした少女、芽衣だった。二年間、夕璃と同室だった少女であった。その背後に、二人の少女を引きつれている。

「何とか言いなさいよ。外国に親戚でもいたの？それとも、身売りでもした？」

芽衣の後ろに立った少女たちが、お決まりのようにくすぐすと笑い声をあげた。

「そうだわ、もしかして、パパが迎えに来てくれたのかしら」

笑い声が、一層高くなる。夕璃は、何も言わなかった。

「何よ。文句でもあるわけ？生意気」

何か言えと言ったり、文句があれば生意気だと言ったり、矛盾だらけだ。言っていて、おかしいとは思わないのだろうか。

そんなふうにも思っている、夕璃はそれを口に出すことは決まらなかった。それもまた、矛盾であることに違いはない。

「やだやだ、不気味な子よね。こんな子と関わってたら、こっちまで頭がおかしくなっちゃいそう」

「やめて！ユウ姉にひどいこと、言わないでよ！」

悲鳴に近い細い声が聞こえた。姿を見なくてもそれが誰の声なのか、夕璃にはすぐにわかった。小さな少女が、彼女達を押し退けて部屋へと入ってきた。

「何よ茉莉、うるさいわね。騒がないでよ」

「ユウ姉は、不気味なんかじゃない。メイやナナやカンナよりも、ずっとずっと優しいんだから」

芽衣たちの表情が、ますます歪んだ。うっとうしそうに茉莉を睨む。

「優しいですって？ マリ、あんたこの子が何にも言わないものだから、勘違いしてるんじゃない？」

「何も知らないくせに、ユウ姉のこと悪く言うなんて、最低。最低だよ！」

「マリ」

目に涙を浮かべて叫ぶ茉莉の肩に、夕璃はそっと手を添えた。それ以上、言っては駄目。彼女達は今後、茉莉にだって何をするかわからない。今まで夕璃に向けられていた嫌悪が、夕璃がいなくなってしまうことで、標的を変えて茉莉を苦しめることだって――。

「マリ、いいの。私は何も困ってないし、悲しんでもない。だから大丈夫」

「本当に？」

「本当に」

茉莉は真っ赤に充血した瞳を俯かせて、わかった、と呟いた。

「…ふん。行きましょ」

不機嫌に眉をよせ、夕璃と茉莉をそれぞれ一瞥し、芽衣たちは部屋を出ていった。

芽衣達の去った部屋には夕璃と茉莉と、静けさだけが残った。茉莉は唇を引き結んだまま、何も言おうとはしなかった。

「マリ」

呼び掛けても、茉莉は返事をしなかった。茉莉の小さな肩に触れようと、手をのばす。パシン、という乾いた音がして、夕璃の手は振り払われた。

「マリ…」

「なんで？」

「え？」

「なんでユウ姉は、なにも言い返さないの。なんで、遠くへ行っちゃうのお…」

小さい身体を震わせて、茉莉は泣いていた。

「マリ、ごめんね…本当にごめんなさい」

学院を離れるということ、パパとの思い出の地を離れることであり、パパとの繋がりを得る旅にもなるだろう。同時にそれは、茉莉との別れを意味する——おそらく、永遠に。

茉莉は今からちょうど一年ほど前に、この学院にやってきた。初めのうちは学院に馴染めず泣いてばかりいた茉莉だったが、いつしか夕璃をユウ姉と呼び慕ってくれるようになっていた。

そんな茉莉を一人、孤独とともにこの街に残していこうとしている。

「ごめんね…」

罪悪感。

それは重く暗く、夕璃の身体にまとわりついた。

「マリ、聞いて」

茉莉の返事は、やはりなかった。しかし夕璃は話し続けた。

「これを、マリにあげる」

「え…?」

「大切な、私のお守り。命と同じくらい、大事なもの。もう一つ、大きさは違うけど、同じものがあるの。それは、私が持っているね」

「なんで、これをマリに…」

「マリに持ってたほしいって、そう思ったから」

「…でも…」

「じゃあ、こうしよう。何年かたって、私もマリも大人になったら、私はまたこの街に戻ってくる。だからそれまで私の大切なお守り、預かっていてくれる？」

茉莉は瞳にあふれんばかりの涙をためて、夕璃を見上げた。震える手で、夕璃の“お守り”を握りこむ。

「マリが良い子にして、大人になったら、ユウ姉はマリに会いに来てくれる？」

「うん」

「ぜったいの約束？」

「うん、絶対」

「…わかった。マリ、ユウ姉のお守り、たいせつにする。ユウ姉に会えるまで、ずっとずっと待ってるよ」

「ありがとう、マリ」

夕璃は握り締められたマリの手を取り、両手で包み込むように握った。マリの手は熱をもっていて温かく、とても小さかった。

Tedious daily life of girl. [2]

+

「ありがとうございます、決心して下さって」

「いえ」

「不安もあることでしょう、当たり前です。けれど、どうか心配なさらないで下さい。貴女のこととは、私が責任を持って国家学校へとお連れします」

「…ありがとうございます」

大方の荷物をまとめて夕璃が学院を後にするまで、さほど時間は掛からなかった。孤児院暮しであるうえに夕璃の他の人と比べて極端に荷物が少なかったため、当然といえば当然である。

明日の朝一番に飛び立つ飛行機の搭乗手続きをするため、フォードさんは荷物と夕璃を残して窓口へと歩いていった。

飛行機に乗るなんて、何年ぶりだろうか。確か最後に飛行機に乗ったのは、夕璃が四歳になったばかりの頃。父親の仕事と、夕璃の誕生日祝いを兼ねた短い海外旅行の時だった。どこへ行ったのかということなどは覚えていなかったのに、飛行機に関しては不思議なくらいに強く記憶に残っていた。

初めて見る飛行機に夕璃は一人はしゃいで、飛行機の飛び立つ姿を見て感動した。どんなに長い時間見ても決して飽きることはなくて、ガラス窓にべったりと張りついて離れなかったことを覚え

ている。

その一年後に、パパは夕璃の前からいなくなってしまった。

「良かったら、どうぞ」

声とともに視界が何かにさえぎられ心持ち驚いて顔を上げると、缶ジュース片手に微笑むフォードさんがいた。夕璃の反応に小さく笑いながら、缶ジュースを差し出してきた。

「ありがとうございます、いただきます」

「考え事ですか？」

「いえ、あの…」

返答にならない曖昧な返事をしてしまい、気恥ずかしくなって俯いた。隣に腰掛けたフォードさんも柔らかに笑みを浮かべていて、夕璃は気恥ずかしさに肩をすぼめた。

「お父上も、よく外の景色を眺めていました。貴女を見ていると、色々と思います。貴女は本当に、お父上によく似ていますよ」

言いながら遠くを見つめるフォードさんはどこか懐かしそうに目を細めていて。夕璃の知らない父親と彼との時間があったのだと、改めて感じさせられた。

「あの、聞いても良いですか？父のこと」

「構いませんよ。私に答えられることならば、答えましょう」

11年間胸の中に抱き続けてきた、様々な感情が流れだしてくる感覚。知りたかったことは、数えられないほどあった。その中でも、最も知りたいと望んでいたこと。

「研究所のみんなを死に追いやったのは、一体何ですか？」

研究所を襲った者達の手にかかって命を落としたのであろうということは理解していた。しかしその組織とは一体何か、何のために沢山の人々が殺されなければならなかったのか。

夕璃は知りたかった。

「貴女はもしかしたら、信じないかもしれませんが」

伏せていた碧い瞳と視線がぶつかり、まるで吸い込まれるような感覚に夕璃は目を逸らすことができなかった。

「お父上を含め研究所にいた人間全員を殺したのは、一人の少年でした」

一瞬にして蘇る、忌まわしい記憶。フラッシュバックする悪夢。炎の中でも揺るがない、鋭い刃のような眼をした少年。夕璃の脳裏には、真っ赤な炎の中に一人佇む少年の姿が鮮明に浮かび上がっていた。

十

空港近くのホテルに部屋を取り、フォードさんが用事を済ませて

いる間に夕璃は一足先に部屋へと案内され、部屋に辿り着いた頃にはすっかり疲れ切ってしまった。

決して多くはない荷物だけれど、長い間持つて歩き回れば体を疲れさせるには充分だった。荷物をベッドの上に放り投げ、夕璃は半ば倒れこむようにベッドに横たわった。

「サクラキさん、いますか？」

うとうとと微睡みはじめた頃、軽いノックの音とともに声が聞こえて夕璃は反射的にベッドから起き上がった。

「フォードさん？」

「はい、私です」

ドアの覗き穴から外にいる人物がフォードさんであることを確認し、夕璃はドアを開いて彼を部屋に招き入れた。

「どうぞ、入ってください」

「…失礼します。長旅で疲れましたか？」

「いえ、大丈夫です」

「そうですか？」

どこか見透かしたように言いながら、フォードさんは小さく笑った。

「…はい、少し」

「やはり、そうでしょうね」

ぽつりと本音をこぼせば彼は小さく吹き出した。

「元気がないのは、私があの街から貴女を連れだしてしまったから、という理由もあるのでしょうね」

「そんなこと、ないです」

あの街を出ていくことを最終的に決めたのは夕璃自身であり、誰に強制されたわけでもない。

「何もかも、私自身の意志です」

そんなにも自分は父親との思い出に縛られているのか、と。夕璃の心は言い様の無い感情に満ちていた。

「：気を遣わせてしまいましたね」

「いえ、そんなこと」

「そうですか。：サクラキさん、お腹は空きませんか？食事にでも行きましょう」

フォードさんの碧い瞳に見つめられて、やはり夕璃は思った。彼の瞳には、どうしても慣れることができない。

「…あの、聞いても良いですか？」

食事を終えて一息つきながら、夕璃は向かい側に座っているフォードさんに遠慮がちに声をかけた。彼の瞳を見ないように、視線はテーブルに固定したまま。

「何でしょう？」

「さっきの話のことです。父達を殺した、犯人のこと」

「…その少年について、ですね」

「はい。…なぜ父は、一人の少年に殺されなければならなかったのでしょうか？」

——なぜ、少年は研究所にいたすべての人間を、殺さなければならなかったのか。

「貴女のお父上が何の研究をしていたのか、サクラキさんはご存知ですか？」

夕璃が首を振ってみせると、フォードさんは少しだけ驚いたように目を見開いた。

「そうですか。確かに、あれは外部に情報が漏れないように厳重管理されていた実験ですが…」

「研究所内のことは、父に連れられて歩き回っていたので大方知っていました。…でも一ヶ所だけ、入ることを許されなかった場所がありました」

「…“特別実験室”ですね」

「はい」

夕璃が禁じられた扉の向こうを見たのはあの事故の日、一度きり。炎の中で見たあの少年こそが、おそらくフォードさんの言う“少年”なのだろう。

「研究所で行われていた研究とあの事故と、何か関係があるんですか？」

「あの実験室では、人体実験が行われていました」

「人体実験？」

「そうです、人体を使った研究実験です。特別研究室では、ある一人の人間を被験体として実験が行われていました。その人間こそが11年前にあの事件を引き起こした犯人…つまり、一人の少年だったのです」

「あの子が、実験体に…」

人間を——年端もいかない少年を捕えて、研究をしていた。フォードさんは確かに、そう言った。

「……思い出したことがあるんです。昔、父に尋ねたことがあります。どうして他の部屋は入ることができるのに、“とくべつじっけんしつ”という部屋には入ってはいけないのか」

炎の中で見た少年の双眸が脳裏に浮かびあがる。あの瞳の中に、夕璃は深い闇を見た。それが、研究所の人々が行ってきた実験の結果なのだとしたら？

「結局、答えてはくれませんでした。あるいは幼かったせいで、覚えてなかったかもしれません。でも、信じていました。パパは：パパや他の人たちは、きつとたくさんの人たちが幸せになるような仕事をしているんだって」

父親に連れられて色々な部屋に出入りし、また父親が忙しいときには広い研究所内を一人で探険した。そのたびに、一人で出歩いたら危ないからと父親から注意を受けたりもした。

それでも、夕璃が来るたびに笑顔で出迎えてくれる研究所の人達が大好きで、みんなが自分のことを知っていて気に掛けてくれることが嬉しくて。

——夕璃、

夕璃ちゃん。

今でもあの時と変わらない声が、聞こえてくるようで——。

「…サクラキさん？」

声をかけられて顔を上げれば、いつの間にか椅子を立ったフォードさんが膝について夕璃の顔をのぞき込んでいた。心配したようなその表情に、夕璃はどうしたのだろうと首を傾げた。

「すごく、泣きそうです」

そう言われてみれば視界がぼやけているように思えて、夕璃は慌てて涙を拭おうとした。しかし拭おうとしたその手を突然掴まれて、夕璃はそのままフォードさんを見つめあう格好になった。

「あの…フォードさん？」

手を握られた格好のまま、夕璃はどうしていいかわからず声をかけた。すると急に手が伸びてきて夕璃は反射的に目を閉じ、それと同時に頬に冷たい感触を覚えた。頬に、指先が触れたのだと気づいた。

ゆっくり目を開くとすぐ近くにフォードさんの顔があって、夕璃は一瞬心臓が止まりそうになった。

「大丈夫、今は一人などではありません。私がそばにいて、貴女を守ります」

ささやくように言って、フォードさんは夕璃の手をとった。握りしめられていた手のひらの力が解かれ、夕璃の小指にフォードさんの小指が絡められる。

「貴女の国では、このように契りを結ぶのだと聞きました。私と貴女の“約束”です」

フォードさんはそう言って柔らかく微笑んで、夕璃の目元をハンカチで軽く拭った。

「落ち着きましたか？」

「大丈夫、です」

「そうですか」

「ありがとうございます」

「……貴女は、自分自身の運命を恨んだことがありますか？」

「え？」

唐突な質問に、夕璃は考えるよりも先に声を上げてしまっていた。

「運命に翻弄されて、押しつぶされそうになったことがありますか？」

「無いと言ったら、嘘になります……でも」

夕璃はそこで一旦言葉を切り、視線を落とした。何もなかった自分の中に、自分自身でもわからない“何か”が芽生えたような気がして。

「運命はただ当たり前そこにあるわけではない、って思うんです」

「……定められたものではない、と？」

「はい。フォードさんと一緒に行こうと決めてたのも私自身です。フォードさんと出会えて良かったと、私は思ってます」

ひとりぼっちになってしまったあの日から、無意識のうちに閉ざしていた心の扉。誰が訪れても決して開こうとは思わなかったし、開こうとした人間に出会うこともなかった。かたくなに閉ざされていた扉の前に真正面から向かい合った人間は、今までに彼ただ一人。フォードさんは、父親との思い出にすがりついたまま離れることが出来ない私を、有りのままの“私”として受け止めてくれた。

「フォードさんというと、私は今ちゃんと此処にいるんだって思えるんです」

「本当に：不思議な人ですね、貴女は」

ふっと和らげた表情に含まれていた、私には読み取れない感情。瞬きをした次の瞬間には、それは消えてしまっていた。

「そろそろ部屋に戻りましょうか。疲れているでしょうし、ゆっくり休んで下さい」

「はい、ありがとうございます」

フォードさんはホテルマンに声をかけ、夕璃を部屋まで送るようにとチップを差し出した。チップを受け取ったホテルマンは恭しく頭を下げると、こちらへ、と先導をはじめた。

「ユーリさん」

促されるままに出口へと向かった夕璃の背中に声がかけて、夕璃は立ち止まって後ろを振り返った。

「いい夢を」

「…おやすみなさい」

そう返した夕璃に向かって、フォードさんは柔らかな微笑んだ。

Tedious daily life of girl. [3]

+

レストランを出て部屋へと到着するまで、夕璃は未だかつて受けたことの無い扱いを受けた。ドアの開閉はもちろん足元の段差にまで気を配るホテルマンに夕璃は戸惑いを隠せなかったが、部屋に着くまでこれといって会話もなかったことに夕璃は内心安堵の息をついた。

「それではお嬢様、ごゆっくりお休みください」

ホテルマンはそう言いながら丁寧に頭を下げ、品の良い音とともに扉は閉まった。お嬢様なんてガラじゃないのに、と思いながらもむず痒い気分になる。倒れこむようにベッドに体を預ければ、たちまち眠気が襲ってきた。

おやすみ、夕璃。

——ほらまた。パパの声は、ちゃんと夕璃に届いている。
手を伸ばせば届きそうなほどに、パパは夕璃の近くに居る。

「パ…パ」

おやすみ。

おやすみ夕璃ちゃん。
夕璃ちゃん、おやすみ。

「…パパ…？」

そこに居るはずの父親の表情が、渦のなかに飲まれていくように消えていく。

「パパ、やだっ」

必死に手を伸ばした——けれど、届かない。
父親を飲み込んだはずの渦が、逆方向に回りはじめた。形を取り戻すかのように渦の中に人の姿が現れてきて、夕璃は安堵で胸を撫で下ろした。戻ってきてくれたんだね、パパ。

夕璃、夕璃ちゃん。

ユーリさん。

おやすみ、良い夢を。

「だれ…？」

さらさらと風に揺れる金髪、透き通るような瞳は海と同じ。
知らない、いや知っている？この人は一体？

逃げろ、逃げろ。

何かを追いついてるような、低く不気味な声が頭の中に鳴り響く。警鐘のような音から何かを強く叩くような鈍く重苦しい響きに変わり、次第にそれは夕璃自身の頭を殴られているような感覚に変わっていく。

——いや……いやだいやだ！

「——っ！」

飛び起きた。気が付けば淡い光を放つベッドランプが目の前にあって、異常な速さで波打つ心臓を何とか落ち着かせようと夕璃は何回も深呼吸をした。

「なに、いまの夢……」

夢、そう全てがただの夢。けれど、頭に残る鈍痛。

目が冴えてしまった。

シャワーを浴びて再びベッドに戻ってから一時間近く経とうとしているが、一行に眠くならない。時計の秒針が時を刻む音だけが部屋に響き渡り、それに合わせて脈打つ心臓の音に夕璃は耳を傾けて

いた。

チクタク、チクタク

ドク、ドクン

チクタク、チクタク

「……どうだ？中は…」

長い時間一定の音だけを聞き取っていた夕璃の聴覚に、人の話し声が入ってきた。

「…はい、特に問題はありませんが…」

時計は深夜零時を回っていて、普通ならば人が出歩くような時間帯ではない。その上声の聞こえかたから予想すると話している人間はそう遠くに居るわけではない、むしろすぐ近くから聞こえてきている。声からしておそらく一人は、夕璃を部屋まで送ってくれたホテルマンに間違いない。

「しかし、何で我々がこんな物騒なことを？」

「そんなこと、俺やお前が気にすることなんかじゃないんだ。俺たちはただ黙って、従ってればいいんだよ」

「どこへ行ったんでしょかね、こんな夜中に」

「お前なあ。そんなんじゃ、いくつ命があっても足りねえぞ」

「仕方ないじゃないですか、気になるものは気になるんですから」

ホテルマンには必要不可欠であるはずの丁寧な口調はどこへやら、すっかり粗末な話し方になってしまっていて滑稽だった。

「どんな理由があるにしろ…いや。理由なんかなくても、俺たちはただ命令に従うだけだ。わかってるだろ？逆らえばどうなるか」

上司と思しき男の声が、脅すような色を含んだ低い声でささやいた。部下と思しき男はそれに対して、引きつった悲鳴のような声を上げた。

「万が一、居なくなったりでもしてみろ。間違いなく俺たちの首が飛ぶ」

「で、でも何で見張りなんて…さっき部屋まで送っていったときだって、見た感じ普通のお嬢さんでしたし…。居なくなるなんてことないんじゃ…」

「そんなの知ったことか。この部屋の娘を見張る、それが俺たちに与えられた仕事。それだけだ」

——見張るって、一体どういうこと？

喉元まで出かけた言葉を直前で飲み込んだ。

「お嬢さんも、気の毒ですね…」

「同情なんか出来る身か、俺たちだって危ないんだ。相手が相手だ、少しでも長生きしたいなら逆らわないこったな」

会話に出てきたお嬢さんもしくは娘とはつまり、今ここに居る夕璃のこと。彼らは誰かに命令されて、今夕璃の居る部屋の前で見張りをしている。

何のために？——逃げないように。誰が？——私が？

遠ざかっていた心臓の音が再び聴覚に戻ってきた。それは先程の倍の速さで脈打っていて、耳が痛くなるほど。

——逃げなければ。

足は音を立てないまま、無意識に動き始めていた。

幸い、夕璃の部屋は二階にあった。音を立てないようにゆっくりと窓を開けると、夜風がふわりと前髪を揺らした。窓から身を乗り出して他の宿泊客の部屋の様子を見てみても、明かりの付いている部屋はわずかだった。これならば気付かれる事無く外に出られるだろう。

大丈夫だと自分自身に言い聞かせながら、夕璃は窓枠によじ登った。下方を眺めやる。意外に高い。緊張からか恐怖からか、心臓は相変わらず早鐘のよう。

「……………」

追われる恐怖のほうが、最終的には勝っていた。壁に伝う細い配管が一本だけあり、そこに足を掛ければあとは飛び降りることが出来そうだった。夕璃は乾いた上唇を舐めて、窓枠から壁伝いに配管に足を伸ばした。

強い風が吹いた。同時に着ていた薄手のワンピースが風になびき、片足が空中に浮くような感覚。思わず声を上げかけたが飲み込み、窓枠にしがみついて何とか体勢を整えた。

カーテンが風に揺られてふわりふわりと舞い踊る。窓のすぐ傍にある棚のうえには、上品なデザインの花瓶、生けられているのは赤い薔薇。

「…あ…！」

今度ばかりは、声を飲み込むことはできなかった。次の瞬間には夕璃の声の何倍も大きな音、陶器の割れる音が部屋中に響いた。カーテンは相変わらず風に揺られていて、心地よかったはずの夜風を夕璃は恨まずにはいられなかった。

「どうかされましたか、お嬢様！…って、あれ？」

ドアが勢い良く開かれた音がして、すぐあとに先程の会話をしていた部下と思われる人間の声が聞こえてきた。

「何だ？ どうした」

「いや、それが…」

「ん？何で花瓶がこんなところに」

「たっ、田中さん！」

「ああ？何だよ鈴木、変な声出すなよ」

裏返った声で叫んだ鈴木に対し、て田中は呆れ果てたような面倒臭そうな声で返事をした。

「お嬢さんがいませんっ！」

心臓が息が、とまった。

「くそ、逃げやがったか！」

「窓が開いていますっ」

「窓？そうか、窓だ。窓から逃げたに違いない！田中、探しに行くぞ」

緊迫した声とともに、バタバタという足音が近づいてきたのがわかった。

「いた、居ました田中さん！ああ、お嬢さん、なんて危険な真似を…」

…危険？これが？

夕璃は心中で苦々しく呟いた。
夕璃からしてみれば今この状況で一番危険なのは二階から飛び降

りることよりも、明らかに不審な二人の男に捕まることだ。

「ほら、手を伸ばすんだ、引き上げるから…」

不安定な足場に立って窓にしがみついている夕璃本人よりも手を差し伸べて助けよう（捕まえよう？）としている男の人のほうがよっぽど恐怖心を感じているようで、顎をガタガタと震えさせながらそれでも尚その手を伸ばしてくる男はひどく滑稽だった。

「何してんだ、早く捕まえろ！」

怒声と共に上司の男、田中といっただろうか。部下の鈴木という男よりも度胸があり行動力もあるようで、夕璃に手を伸ばすようにと促すことはせず、勢い良く夕璃の腕を掴みにかかってきた。

「よし、捕まえたぞ！」

「つやだ、放して…！」

腕を掴んでいる男の手を振りほどこうと暴れるが、男は動じる事無くそのまま夕璃を部屋の中に引き上げようとする。

「いやだ、いや！放してよ！」

「おいこら危ない暴れんなっ」

渾身の力で暴れまくり、度胆をぬかれた男が夕璃の腕を解放した。そして窓枠を掴もうとした夕璃の手のひらはそのまま空を搔き――。

星一つ無い漆黒の夜空と、夜の闇の中で見てもわかるくらいに青ざめた表情をした部下の男とを、夕璃は反転する景色の先に見た。

Tedious daily life of girl. [4]

「痛…」

よかった、生きている。

背中をやや強く打ち付けたものの、意識を失うこともなく打ち身と掠り傷程度で済んだようだった。

「だ、大丈夫ですかお嬢さん！」

顔面蒼白の鈴木が、弱々しい声で呼び掛けてきた。対する田中は気遣う様子も見せずに怒鳴り散らす。

「ばかやろう、捕まえろよ早く！」

「そんな、怪我の心配くらいしますよ普通」

「この腰抜け、たかが二階から落ちたくらいじゃ死にやしねえよ！」

「そんな、あんまりですよ！」

一体何を思って田中はホテルマンという職に就いたのだろう、サービス精神の欠けらもない彼には全くと言っていいほど向いていないし、窮屈な仕事にしか感じられないのではないか。

夕璃は腹立たしい気分になり、心の底からの怒りと敵意を含めて田中を睨み付けた。

「ほら、今すぐここから降りて追いかける」

「そんな、無茶言わないでくださいよ！うわっ、押さないで下さい
ってば！高い所苦手なんです」

「はっ、正真正銘の腰抜けだなお前は。あの子どもにだって出来た
んだ、男のお前が出来なくてどうするんだよ」

「意味がわかりませんから！だったら田中さんが行けば良いのに…
…あーっ！お嬢さん！」

くだらない喧嘩を黙って聞いているほど呑気な性格ではないし、
捕まえようとしている人間を待っているほど愚かでもない。夕璃は
体の痛みに堪えながら、ホテルの中庭を脇目も振らずに走った。

闇に包まれた空から無数の水滴が落ちてきて、頬に当たった。小
雨が降り始めたのだと気づき、それまではただ夢中に逃げていた夕
璃だったが、次第に不安ばかりが心を侵食していった。

逃げ出した方がいいが、荷物を何もかも置いてきてしまった。荷物
を持っていくという考えが浮かぶほど余裕があったわけではない
が、一文無しではこの先どうしようもない。唯一頼れる人がいると
すればフォードさんだが、あのホテルマン達が居る場所にはもう戻
れない。そもそもフォードさんは、夕璃が今追われていることさえ
も知らない。

「どうしよう…」

籠の中で育った小鳥は、籠から出てしまっでは生きていくことはできない。興味本意から何も知らないまま籠を出て、それが過ちであつたと気付いたときにはもう遅い。待っているのは底知れない恐怖と、もはやどうすることも出来ないという絶望のみ。雨はそんな夕璃の心情などお構いなしに容赦なく降りしきり、やがて夕璃の髪や体を濡らした。

「……誰？」

話し掛けられたわけでも、人の姿を見つけたわけでもなかった。ただ、不規則に脈打つ心臓。

人の話し声でもなく、物音でもない。自分の中の何かが、何かをとらえた。

奇妙な感覚だった。

——…珍しい人間だな……——

「…え…」

遠くの方から近づいてくる、木の葉のこすれる音。大地を走り抜ける風は中庭の木々の葉の間を通り、夕璃のもとまで届いてワンプイスや髪を揺らした。

「誰…、どこに…？」

辺りを見回してみても、夕璃以外の人間はいない。

——聞こえるのか、私の声が？……

「……！」

すぐ近くから声が聞こえたような気がして勢い良く後ろにふり向いたが、誰もいない。

——……おもしろい……

——聞こえるのだろう、私の声が……

——…耳を傾けるがいい、私の声……

四方八方から囁くような声が聞こえてきて、夕璃はいくつもの声を追うように周囲に視線をめぐらせた。誰もいない。

姿の無い声。一瞬にして恐怖心が襲い掛かってきた。

「や……！」

夕璃は必死に耳を塞いでいた。身を庇うように濡れた芝生の上にしやがみこみ、皮膚につめが食い込むほど強く手で耳を覆いながら、

下唇を噛み締めた。

——…無駄だよ……

どんなに強く耳に手を当てようとも、声が聞こえなくなることはなかった。まるで自らの身体の芯から、響いてくるような声。

——…決して、逃れることはできないのだから……

耳元に、吐息がかかった。

「やだ……いやあぁっ！」

「——ユーリさん！」

夕璃の絶叫とほぼ同時に、誰かが夕璃の名前を呼んだ。恐怖に足が竦んで身体は言うことを聞かず、名前を呼ばれたと気付いたときには誰かの腕の中に抱き抱えられていた。雨に打たれて冷え切った体が、きつく抱きしめられる。

「…いやっ、放し…」

「大丈夫、もう大丈夫です」

両肩を抱く手のひらの温もりが伝わってきた。ひたすらに拒んでいた音を受け入れようと、手のひらをゆっくりと耳から放す。

「どうか落ち着いてください」

聞き覚えのある声だった。目を開いてその人物が誰なのか確認するよりも先に、夕璃は呟いていた。

「フォード、さん…私…」

「大丈夫ですよ、傍にいます」

耳元で聞こえたフォードさんの声が、夕璃の心に染み入るように響いた。不安や恐怖が、すっと消え去っていく。夕璃は、ゆっくりと目を開いた。碧い双眸が、安堵したようにやんわりと細められた。

——…また会おう、お嬢さん……

「……！」

再び聞こえた“声”に、夕璃は肩を揺らした。縋るようにフォードさんの服を握る。

「フォードさん今の、声…！」

迫りくる恐怖からすっかり混乱してしまい、吐き気すらも感じら

れた。

耳鳴りがする。

目が回りそうだった。まわりの音が聞こえなくなり、次第に頭の中がぼやけていく。

「あっ！た、田中さんいました！」

少しばかり間の抜けた声が聞こえて、夕璃は意識を持ち直した。

「…誰です？」

すぐ近くから聞こえるフォードさんの声が、低く囁いた。一瞬驚いて、抱き締められた格好のままフォードさんの顔を見上げる。フォードさんの碧い瞳からは先程の優しい雰囲気は消え去っていて、警戒の色が浮かんでいた。心臓が、音を立てる。

「…へ？誰って、お嬢さんを捜しに」

走って追ってきたのだろう。鈴木は息苦しそうに肩を上下させていて、夕璃とフォードさんとを交互に見やった後、眉をひそめた。あとから息を荒げた田中が大股で近づいてきて、夕璃の姿を見つけるなり、意地の悪い笑みを浮かべた。

「でかした鈴木！さっそくこの縄で縛って…」

「た、田中さん」

「あ？」

細いロープ片手に物騒なことを言う田中に、鈴木は慌ててそれをやめさせようとする。鈴木は動揺丸出しといった様子で夕璃とフォードさんを見やると、田中に助けを求めるように視線を送った。

「…えーと、お客様、いかがなさいましたか、こんなところで？」

田中はいかにも営業スマイルだと言わんばかりの上品な笑顔を浮かべ、夕璃とフォードさんに歩み寄ってきた。夕璃の体が強ばる。

「あなた方こそ、一体何を？ 見つけたとか、ロープで縛るだとか：物騒な言葉を使っていらっしやいますか」

「ああ、これですか？ いやあお恥ずかしい。実はこいつには脱走癖がありましたね」

抗議のつもりだったのか、小さく声を上げかけた鈴木 of 鳩尾あたりに田中の肘打が打ち込まれているのを、夕璃は見逃さなかった。

「脱走癖、ですか」

「そうなんです。全くハタ迷惑な部下でして。あんまり続くものですから、ロープでも使わないと更正が難しいんですよ。いやあ、お恥ずかしい」

つらつらとそんなことを言いながら田中は鈴木をロープで縛り上げていく。

「ほら、行くぞ」

「イタッ！ 痛いですって田中さん！」

「うるさい、おとなしくしてろ！」

縛られたまま暴れる鈴木を叱り付ける様子は、八つ当りにも見える。

何だろう、よく判らないことになってしまった。

しかし唯一理解できたことがあるとすれば、あの男たちから無事に逃げ切ることができたという事実。安堵すると同時に、強ばっていた全身の力が抜けた。

「…ユーリさん」

そんな夕璃の様子に気付いたフォードさんが、気遣うように夕璃の顔を覗き込んできた。

「大丈夫、です。ごめんなさい…」

答えながらも、夕璃はほとんど上の空だった。

一体彼らは何のために、夕璃を見張っていたのか。夕璃を見張ることが、何の利益になるというのだろう。

いくら考えど夕璃には、さっぱりわからなかった。

Tedious daily life of girl. [4] (後書き)

〈訳〉少女の憂鬱な日々

Tedious daily life of boy.

Tedious daily life of boy.

小さな街の裏通り、誰も近づかないような古びたビル。その地下に、それはあった。

正面の入り口ではなく、裏口へと回る。鍵も壊れているのではないかと思えるくらいに、立て付けが悪く錆付いたドア。ノブを回せば、金属音とともに簡単に開いた。

目の前には地下へと続く階段がある。明かりがないため昼間でも薄暗く、先が見えないために、降りてしまったら二度と戻れなくなるのではないかという不気味さを漂わせていた。

無月は何のためらいもなく、その階段を一番下まで降りた。

「あら、ミナヅキじゃない」

階段を降り終えて明かりの下へと出たところで、声をかけられた。

「…理音」

「久しぶりね、水無月。あなたも呼ばれたの？」

「だから、ここにいる」

「そうね、その通りだわ」

理音はそう言って、悪戯っぽく笑った。切れ長の薄水色の瞳が、やんわりと細められた。そこには普段見せている陰しさも鋭さもな

く。短く切られた瞳と同色の髪の毛さえも、女性的で艶っぽく見えた。

「暗証番号は私が入力するわ」

理音の言葉に、無月は無言のまま一步後ろに下がる。それを了解の意だととらえたのか、理音もまた何も言わずに扉に向かい合った。重々しいその扉は、銃弾はおろか大砲の玉さえも通さないと聞く。それが本当なのかどうかは、定かではないが。

理音がパスワード入力画面に指を走らせる。何秒もしないうちに、ロックは解除された。

「さあ、行きましょう」

理音が中へと入り、無月もまたその後を追う。

「コードネーム理音、ナンバー6。ゼロ、お久しぶりです」

理音の快活な声が、広い部屋の中に響いた。部屋の隅で人影が動いて、こちらに近づいてきた。

「理音か」

「はい。水無月も一緒です」

「…そうか」

男はどこか品のあるゆったりとした動作で、無月を見つめた。

「…任務は？」

無月はその男の視線を真っ正面から受けとめたまま、そらすことなく言った。理音は眉をひそめ、わずかにトーンを落とした声で言う。

「呆れた。挨拶もなしに第一声がそれだなんて…あなたくらいよ、水無月」

「まあ、いい。いつものことだ」

男は、特に気にする素振りも見せなかった。理音は水無月に向かってわずかに肩をすくめ、しかしすぐに男に向き直った。

「失礼いたしました。ゼロ、任務内容を」

「理音、今回は君がわざわざ出向かなくとも、情報の提供だけで事足りる」

「…現地での下調べはの必要は無いと？」

「充分な下調べになるだろう。君の、よく知っている場所だ」

理音の表情に、一瞬だけ影が差したような気がした。

「施設…ですか」

「セキュリティの方面は、他の者にやらせる。できるな、理音」

「もちろんです」

「期待している。時間はまだある、急がせはしない。君への連絡事項は以上だ」

理音は唇を引き結んだまま、会釈をした。部屋を出ていくまで、一言も言葉を発しなかった。

「一体、何の任務を理音に？」

彼女の後ろ姿が消えたドアに視線を向けたまま、無月はそう問いかけていた。

彼女のあんな表情を、無月は今だかつて見たことがなかった。何かに怯え、恐れたような表情。任務に対してはいかなるときも強気でいた彼女からは、想像ができなかった。

「理音も人間だ。色々な表情を見せる」

「…そうですか」

彼はそう言っただけで、無月の質問には答えなかった。無月もまたそれ以上は何も言わなかった。いずれ、自分が知るときは必ず来るだろう。

「…無月、お前には別件で頼みたい仕事がある」

彼はどこからか封筒を取り出すと、自分のデスクの上にそれを置いた。無月は封筒を手にとり、中身を無造作にデスクの上に広げる。

「…この少女から、情報を聞きだしてきてほしい」

「……」

「やつらが動きだした」

「今は？」

「情報は入っている。少女は今——」

彼の言葉は、どこか遠いところから聞こえてくるかのようによろしく不明だ。それはきっと無月が、何か別のことに意識を向けていたということ。

——いつか、再び会う日が来るであろうことはわかっていた。それが今である……ただ、それだけのことだ。

+

あれは何年前のことだっただろうか。それすらもはっきりと思いつけなくらいなのに、記憶の中には鮮やかな映像として残されている。

炎の赤、血の紅——赤、紅、あか。脳裏に焼き付いて、離れない。

「零時56分……」

首から下げた小さな懐中時計は、真夜中をとうに回っていた。ホテルの様子を見るかぎり、明かりがついている部屋はほとんどなかった。しかし、油断はできない。

——…一体いつまで、ここに潜んでなければならぬ？……

耳に響いた声は若干トーンが低く、不機嫌であるようにも聞こえた。不機嫌であるというよりも、飽きてしまつて興味が失せたと言ふべきだろうか。

いつだってそうだ。快樂主義に近いのかもしれない——狂つてゐるのだ。

「任務中だ。無駄口をたたくな」

——…偉くなったものだな……—

「文句があるなら、身体から出ていけばいい。簡単だろ」

——…それは、できない……—

——…居心地の良い暮らしを、捨てる気はないさ……—

「なら、黙つてろ」

共存か、はたまた支配か。

夜の闇にまぎれて、何か固いものが割れたような音が耳に届いた。

——…ナツキ……

「…わかってる」

無月は茂みから立ち上がると、音を立てないように建物に近づいた。人の声が聞こえた。

「…?」

窓枠にしがみつく少女と、少女を引き上げようとする男の姿があった。声は聞こえなかった。落下しそうな少女を男が助け上げようとしているようにも見えるが、少女はどこかあらがっているようにも見えた。

「……」

落ちた。少女の身体が宙に舞い、そのまま重力に従って地面に落下した。

気を失ったかと思いきや少女はゆっくりと起き上がり、男たちに背を向けて走りだした。

——…頑丈な娘だなあ……

死神は感心と驚きの入り交じった声を上げると、おかしそうに喉の奥で笑った。無月は舌打ちをした。走ってくる少女の姿が、次第にはっきりと見えてくる。

「……………」

間違いなく、あの少女だった。面影が残っている——幼い頃の少女の面影を見たのか、はたまた少女の姿に“彼”を重ねてしまったのか。無月自身にもわからなかった。

——…あの男を思い出すか？ ナツキ……—

なだめるような猫なで声、何もかもを見透かしたような言葉。無月が拳を握りしめ、反論をしかけたときだった。

「…………誰？」

思わぬところから声が聞こえた。か細く、高い声。声をも届いてしまうほど、すぐ近く。目の前の少女は、見えない何かにその表情を強張らせていた。

無月の心臓が、嫌な音を立てた。まさか、まさか——何故、どうして。

——…珍しい人間だな……—

「…え…」

少女は死神の“声”に翻弄され、右へ左へと視線をめぐるせた。少女の表情が、次第に不安に染まっていく。

「誰…、どこに…？」

——聞こえるのか、私の声が？……

無月の身体の中で、死神が目を見開いたのがわかった。
全身が、金縛りにあったかのように動かなくなった。

「……！」

来た。

ドクンドクンと音を立てて、死神と同調していく身体。嬉々とした高ぶりが全身を駆け巡る。

何故、どうして。その場にうずくまり、金縛りにあらがいながら、シャツの上から胸をかきむしるように押さえた。苦しい。目眩^{メマイ}がした。

死神の“支配”が、始まった——。

——…おもしろい……

——…聞こえるのだろう、私の声が……

——…耳を傾けるがいい、私の声……

「や…！」

死神に支配された身体は、指一本たりとも動かせなかった。少女と死神の奇妙な会話を、ただ意識の端で聞いていることしかできなかった。

——…無駄だよ……—

少女の反応を楽しむかのように、死神は言う。

——…決して、逃れることはできないのだから……—

風を揺らし、少女の髪をなびかせた。それはまるで、吐息を思わせるかのように。

「やだ……いやあぁっ！」

絶叫。耳をつんざくような、悲鳴。恐怖の淵に立たされた、少女の声。

——ああ、どうして。

「…き……な、い…！」

…聞きたくない。

聞きたくなかった。

少女のこんな声を、無月は聞きたくなどなかった。

こんなことを考えている理由さえ、無月にはわからなかった。

「…くそ…」

忌々しい、何もかも。

いつの間に呪縛が解けたのか、無月は自分自身の意思で体を動かせるようになっていた。ふらつく体を引きずるようにして、無月は逃げるようにその場を後にした。

Tedious daily life of boy. (後書き)

〈訳〉少年の憂鬱な日々

二章†Girl's misfortune.

Girl's misfortune.

「あの、すみません。気を遣わせてしまって」

遠慮がちに声をかけた夕璃に、フォードさんは柔らかな笑みを浮かべた。

「気にしないで下さい」

ホテルマン達との一件が解決した頃にはすでに、夜中の二時を回ってしまっていた。

全身びしょぬれになり、掠り傷だらけになってしまった夕璃にフォードさんは目を丸くして驚き、心配し、ホテルマンに頼んでバスタブに温かなお湯を張ってくれた。身体が十分に温まったのを確認するとフォードさんは安心したように顔をほころばせ、丁寧に傷の手当てまでしてくれた。夕璃の身を案じてか、今晚はそのままフォードさんの部屋に留まるようにと言ってくれたのだった。

「落ち着きませんか？しばらく外に出ていきましょうか」

「いえ、大丈夫です。フォードさんも眠ってください。…ベッド借りてしまっている私が言うのも変ですけど」

気まずくなっ言葉が尻すばみになる。

「私は大丈夫ですよ。安心して休んでください」

フォードさんの声は、耳に心地よく響く。いつからそこに居たのか、フォードさんは夕璃が横たわっているベッドのすぐ傍に居て、フォードさんの手のひらが夕璃の額に掛かる髪をすいた。

「おやすみなさい、ユーリさん」

フォードさんが感じさせる絶大な安心感は、夕璃をいとも簡単に眠りへと導いていく。

フォードさんは、夕璃を助けに来てくれた。夕璃の身を案じ、夕璃の無事を喜んでくれた。優しさが身に染みて、夕璃は満たされる思いだった。この暖かく柔らかなものに、何もかもを委ねてしまえればどんなに楽だろうか。

前にもこんなことがあったような気がする。もしかしたらそれは父親との思い出の中にあるのではないかと、夕璃は思った。どんな時であろうと脳裏に思い浮かぶのは、優しく微笑む父親の姿だった。夕璃の危機が、なぜフォードさんにはわかったのだろうか。考えても、わからなかった。考える気力も、夕璃の疲れ果てた身体には残されていなかった。ぼやけていく視界。身体の力が抜けていき、意識は深い眠りへと導かれていった。

十

遠慮がちなノックの音が、静かな部屋に響いた。

(…うるさい)

胸中で吐き捨て、今しがた眠りについたばかりの少女を見下ろす。目蓋は閉ざされ、一定に上下を繰り返す胸は少女が眠っているということを知らせてくれた。

短く息をつく。無意識のことだった。不可解な自分自身の行動に、小さく嘆息した。

扉の向こうから、再びノックの音。けだるい体を立ち上がらせてドアに歩み寄り、音を立てないようにドアの外に出た。

ドアの前には、男が二人。

「…何の用でしょうか」

感情を含まない声色でそう問えば、怯えた小動物のように縮こまっていた男が小さく息を飲むように呻いた。

「いえ、用事というほどのことではないんですがね」

情けない声を上げた部下を乱暴に肘で打ちながら、もう一人の男が話し始める。

「先程の失態、どうかお許してください」

深々と頭を下げる男達を眺めながら、心中で嘲笑った。形だけの詫び。所詮こいつらは権力のある人間の足元に縋りつくことでしか生きていけない非権力者、社会の“ゴミ”。

「…別に、始めからあなた方に期待などしていませんよ」

そう答えれば、男は眉をぴくりと痙攣させた。単純なやつ。

「……あのう」

上司の男の背後に隠れるようにしながら目線だけをこちらに向けて、蚊の鳴くような声で呟く男。

「一体あのお嬢さんを、どうするおつもりで…？」

何となく気に障ったため一瞥をくれてやれば、男は悲鳴こそ上げなかったものの息を呑む音がはっきりと聞き取れた。

「ばかやろう、そんなこたあ俺達が立ち入ることじゃねえんだ」

「でも…」

「ひとつだけ、良い事を教えて差し上げましょうか」

感情のなかった表情に、やんわりとした笑みを乗せる。次第に男たちの顔色は青白く変化していく。もちろん問い掛けの返事など待つことはせず、すっかり血の気の失せてしまった男達に向かって言い放った。

「自分が今誰に口をきいているのか、考えた方がよろしいかと」

これはせめてもの忠告。“プロジェクト”に関わった時点で、その人間は命を奪われたも同然なのだから。

先延ばしにするか、早めてしまうのか——残りの人生をどう生きていくべきなのか。彼らに与えられた選択肢は、二つ。

目蓋の向こう側に強い光を感じて、眩しさに身じろぎする。それが太陽の光であると気付いてゆっくりと目を開ければ、碧い瞳が夕璃をじっと見つめていた。

「おはようございます。よく眠れましたか？」

フォードさんの明るい声が、すぐ近くで聞こえた。寝呆けていた頭が次第に目を覚まし始めて、状況を飲み込むと同時に恥ずかしくなって顔半分を布団に埋めた。

「すみません。あんまり気持ち良さそうに眠っていたものですから、つい」

小さく笑いながらフォードさんは夕璃の髪の毛を撫で、ベッドを離れた。

「ユーリさんのカバンを、こちらに運んでおきました。私は部屋の外で待っていますから、用意ができたらいらしてくださいね」

夕璃の返事を待つことなく、フォードさんは部屋を出ていった。

夕璃は無意識のうちに止めていた息を、小さく吐きだした。

開け放たれたカーテンの向こう、窓を隔てて見える空は、昨晩の雨を思わせないほどに青々と広がっていた。その明るさに、夕璃はそっと目を細めた。

「…着替えなきゃ」

夕璃はもぞもぞと布団から出ると、ベッドの上にカバンの中身を

引っ繰り返してみた。入っているものといえば生活に最低限必要なものだけで、当然洒落た服や装飾品があるわけでもなく。ため息をつきながら、私服ではなく着慣れた制服を手を取った。

窓の外で、物音が聞こえたような気がした。目を向けてみても、そこには何の変哲もない窓があるだけ。人の姿は愚か物陰すらなかった。気のせいだったのだろうか。

——物音がしたからといって、それが何だというのだろうか。

ふと冷静になって考えてみてから、自分自身に呆れ返ってしまった。虫とか小鳥とか、姿が無くとも、それは単に飛び去ってしまったからなのだろう。以前の夕璃ならば、こんなにも些細なことに動揺するなど無い等しかったのに。

知らない間に、臆病になってしまったのだろうか。

「…臆病なんかじゃない」

着替えを再開しながら誰に対して言うでもなく、強いて言うならば自分自身に言い聞かせるように呟いた。

ブラウスに袖を通し終えたとき、首筋にひやりとした感触がした。何だろうと思いつながら自分の首筋に手を持っていけば、指先が何か冷たいものに触れた。その“何か”の形に沿うように、ゆっくりと指を這わせる。

「…っ！」

鋭い痛みを感じて指を見れば、赤い鮮血が滲んでいた。——血？

「やっ…」

声を上げかけたその口を、何かに塞がれた。

「…騒ぐな」

脅すような声色。ナイフが首筋に押しつけられたような気がして、夕璃は悲鳴を飲み込んだ。夕璃が抵抗しなくなると、口を塞いでいた手がゆっくりと離れた。

「櫻木夕璃」

「何で、名前を…」

「お前の知ってること、全部吐け」

「…何…言っ…」

——訳が分からない。

何で私がこんな目に遭わなければならないのだろうか。

「余計な口はきくな」

「放し、て…！」

首筋にあてられたナイフが強く押しつけられて、皮膚に食い込む感覚。

「……殺されたいのか？」

夕璃は、冷静さを失っていた。自分でもよく分からないような叫び声を上げて、夕璃は背後にい

る人間を突き飛ばした。反動で床の上に転んでしまい、両膝を打ち付ける。痛みと恐怖で動けなくなりそうな足を必死に奮い立たせて、ドアに向かって走った。廊下に出ればフォードさんがいる。

「ひゃ…！」

ドアノブに手が触れるか触れないかという所で、手首を掴まれて勢い良く引っ張られた。乱暴にベッドに投げ飛ばされる。

動きを封じるように夕璃の体を跨ぐようにして覆いかぶさる人物を、必然的に見上げる格好になる——夕璃は声の出し方も、息をすることさえも忘れてしまっていた。

G i r l ' s m i s f o r t u n e . [2]

喉元に突き付けられた凶器。少しでも動けば、それは死を意味する。

「…無駄な足掻きだな」

低い声で囁く——目の前の少年。脅すような声色は、幼さの残る顔つきに似合わない。

「何で…」

先ほどまでとは全く違う混乱の波に飲まれる。夕璃を押さえ付けているのは、夕璃よりも幼い面持ちの少年だった。年齢にそぐわない感情の無い表情、手に握られた銀色のナイフ。

「何…って、何？」

問いを問いで返される。

「何のために、こんなこと…」

「アンタには関係ない」

夕璃を見下ろす少年の瞳は完全に冷め切っていて、感情は愚か生氣すら感じられないほど。

「そんなの、矛盾してる…」

「……矛盾、か。そんなもの、この世の常だ。覚えておくといい」

普通の少年であれば、もっと豊かな感情があふれ出ていてもおかしくない。夕璃自身もそれほど感情というものを表に出す方ではないし、決して人のことを言える立場ではないけれど。強いて言うならば、それは“無”。

「吐くのか、吐かないのか」

有無を言わせない問いだった。それでも夕璃には、こんな目にあって理由も見当たらなければ、話すべきこともない。何一つとしてないのだ。

「私は、何も知らない。話すことなんて何もない…!」

恐怖に震える声で、そう答える他なかった。

「…あるはずなんだ」

「どうして…?」

ナイフの刃が、窓から差し込む太陽の光をきらりと反射させた。ベッドのスプリングが、音を立てて軋んだ。

「アンタの思い出の中に、あるはずなんだ」

そう言った少年の表情に一瞬、ほんの一瞬だけ、寂しさに似た感情がうごめいたように見えた。遠い場所にある何かを、切に想うか

のように。

——どうして？

どうして、そんな表情をしているの。

少年の顔が、緩慢な動作でふわりと近づいた。すぐ近くにある、漆黒の瞳。吸い込まれそうなほどに深い色をした瞳には、やはり感情が見えなかった。

「……忘れたの？」

唇に、吐息がかかった。

——…お嬢さん……—

「え…」

少年の声ではない。もっと遠くから聞こえているような、しかし耳元で聞こえているような、ぼんやりとした声。

「……黙れ」

少年が無表情のまま、低く囁いた。それまで感情の欠片もなかったはずの声に、今は激しい憎悪の念が含まれていた。

——…また会ったね……—

既視感。同時に、背中に走る戦慄。夕璃は確信せざるをえなかった。——あの時の“声”だ。

「いや…っ」

恐怖で全身が動かない。叫ぼうとしても、引きつった声にしかない。

こんなにも近くにいるというのに、少年にはこの姿なき声が聞こえないのだろうか？

——…私の声が聞こえる、お嬢さん……—

——…君の知りたいことを、私は与えることができる……—

嫌だ。いやだいやだ怖い。

——…大丈夫……—

——…私は君の味方、恐れることなどないのだから……—

「……………っ」

突然、少年が小さく呻くような声を上げた。

「…やめ、ろ…」

見上げれば、少年は苦しそうにその表情を歪めていて。噛み切れ
てしまいそうなほどに強く唇を噛みしめ、震える手で心臓の辺りを
押さえたかと思うと、少年は力を失ったように夕璃の上に倒れこん
だ。少年の手から離れたナイフは夕璃の首筋に鋭い痛みを与え、床
に落ちて乾いた金属音を響かせた。

「なに、一体…」

少年の体を支えつつ、夕璃はゆっくりと起き上がった。少年は夕
璃に体を預けてぐったりとしたまま動かない。

「ねえ、しっかり…」

呼び掛けてみても、意識が朦朧としているのか返事はない。呼吸
は弱々しく、顔も蒼白く見える。

「どうしよう、どうしたら…」

少年が迎えるのは——死？

「や…いや、そんなのっ!」

——…簡単なことだよ……

「…!」

——…君がしてあげられること、簡単なこと……

何かに縋りたかった。そうでなければ、不安に押し潰されてしま
いそうだった。聞こえてくる声に、夕璃は何のためらいもなく耳を
傾けていた。

——…さあ、今彼を助けてあげられるのは君一人だけ……

——…君にしか出来ないこと……

「…一体、どうすればいいの…？」

——…彼の苦しみを、君が引き受ければいい……

私が、苦しみを？
引き受ける。

痛みを、苦しみを

——すべてを。

「……く……な……っ」

低く掠れた声が聞こえて、夕璃は我に返った。夕璃に体を預けたままぐったりとしていた少年の手が、小さく痙攣した。

「聞く、な…！」

意識が無かったはずの少年の手が、床に転がったナイフへと伸びた。

「…っ！」

声を出す間もなく、夕璃が息をのんだ次の瞬間には、ナイフは再び少年の手に握られていた。

夕璃はその一瞬の内に起きた目の前の出来事に、さらに言葉を失った。少年はナイフの柄ではなく、刃の部分をきつく握り締めていた。血が腕を伝ってしたり落ち、床に赤い染みを作っていく。

「いっ…いやあああっ！」

思わず叫んでいた。胃の中のものがせり上がってくるような感覚。襲い掛かってきた吐き気に、夕璃は口に手を当てる。

「…声に、耳を貸すな」

手のひらから溢れる血を気に留めることなく、少年は低く囁いた。流れゆく血の量から見ると、傷の深さは相当のものだろう。それでもなおナイフを手のひらで握り締めたまま、肩で息をする少年。明らかにそれは、異質な光景だった。

「何、言っ…っ」

ベッドの上で後退りしようとする夕璃を、少年は凍り付くような眼差しで睨み付けてきた。

「…黙れ」

血に濡れたナイフの刃が、再び夕璃の喉元に当てられていた。真っ赤な血が、夕璃の首筋に伝う。

「次に口を開いてみる、俺は容赦なくお前を殺す」

吐き捨てるような言葉の後、瞬きをした次の瞬間には、少年の視線はドアへと向けられていた。

「ユーリさん」

開け放たれたドアの向こうに、フォードさんがいた。夕璃から少年へと視線を移すとフォードさんは観察するように少年を眺め、やがて口元に笑みを浮かべた。

「…一体、何しに？」

「関係ねえだろ」

「相変わらずですね」

まるで嘲るように笑うフォードさんに、夕璃は全身を硬直させた。フォードさんは、あんな風に笑う人だった？違う、そうじゃない。そうじゃないなんて、何故言える？私は一体、フォードさんの何を知っているというのだろうか。

「大丈夫ですか？彼は危険です、早くこちらへ」

「フオードさ…」

「甘いな。逃げられると思うなよ」

腕を首に回されて捕らえられた格好になり、耳元で低く囁かれた。ナイフがその存在を知らしめるかのように、首に強くあてがわれる。

「子供の分際で、よくもまあ暴れてくれますね」

「黙れ」

「昔から変わっていない。生意気な態度も、呪われたその体も」

何が起こったのか、すぐには理解が出来なかった。体がふわりと力を失って、少年の腕から解放されたことが理解できた。金属と金属が強くぶつかり合うような音が耳に響く。

「……ガキ」

「……死ね」

こすれ合って金属音をならすナイフとナイフ。どちらも、折り畳んでしまえば手のひらで握り隠せるほどの大きさしかないものだったが、今にも互いを刺し殺さんばかりに刃を光らせていた。

「一つだけ教えておきましょう。餞別です」

ナイフを押しつけながら、フォードさんは言った。

「この世に別れを告げるときが迫っています。残されたわずかな時間、せいぜい大事に過ごしてください」

「…その言葉、そのままアンタに返してやる」

言葉とともに、少年のナイフが光を反射させながらキラキラと舞い踊った。それに応戦するフォードさんの動きもまた素早く、目で追うことすら難しかった。

「お客さま、一体何が…えっ!？」

慌ただしい足音とともにホテルマンが現われた。目の前の光景を見るなり、ホテルマンは口を開いたままその場に立ち尽くしていた。

「…た、大変だ…!」

やがて思い出したようにそう呟いて、足をもつれさせながら大慌てで部屋を走り去っていった。

「…!」

弾けるような金属音が響き渡った。はっとしてフォードさんと少年に目を向けると、二人は再び互いのナイフの刃と刃をぶつかり合わせていた。二人とも疲れた様子をまったく見せていないことに、夕璃は驚かずにはいられなかった。

「…なぜ、使わないのですか？」

「アンタには関係ない」

「腑抜けたものです。あくまでも上からの命令が下ったときだけ、ということですか」

「…黙れ」

「大量殺人鬼の名が泣きますよ」

少年の手に握られたナイフの矛先は、何の迷いもなくフォードさんに向けられていた。少年が軽い音を立てて床を蹴った。

「こっちです…ここです!」

声が聞こえたかと思うと、複数の足音とともに何人ものホテルマン達が部屋へとやってきた。

「お客さま! 一体何があったのですか…ひっ、君、何を…」

フォードさんにむかって今にも襲い掛かろうとしている少年を見るなり、ホテルマンは真っ青になって叫んだ。少年は——夕璃の勘違いかもしれないが——鬱陶しそうに表情を歪めた。そしてナイフを畳んで拳で握り込み、その瞳が夕璃を捉えた。心臓が止まる。

「その男を信用していいのか…よく考えてみるんだな」

去りぎわに聞こえた少年の言葉。それは夕璃の心に、不穏な何か

を与えたのだった。

Girls' misfortune. [3]

少年が去っても尚、緊迫した雰囲気が消え去ることはなかった。何人かのホテルマンはホテル敷地内にて少年の姿をくまなく探し、また別の何人かは騒ぎを聞き付け野次馬と化した他の宿泊客の対応にあたっていた。

「おい！怪我人がいる！」

そう叫んだホテルマンが夕璃の方に駆け寄ってきて、首の辺りに顔を寄せた。

「出血の割に傷は浅いみたいだが…手当てしなければ」

夕璃は無意識に、フォードさんの姿を探していた。異国の雰囲気をまとう綺麗な金髪を捜し当てるのは簡単だった。部屋へやってきたホテルマンと何やら深刻な顔で話し込んでいたが、夕璃の視線に気付くと、フォードさんは話をやめて柔らかく微笑んだ。

「ユーリさん」

「フォードさ…」

まるで逃げるかのようにフォードさんの側から離れていくホテルマンと、ほんの一瞬だけ視線がぶつかった。こぼれかけた言葉が、喉に引っ掛かる。

そのホテルマンには、見覚えがあった。否が応にもよみがえる、

真夜中の逃走劇。昨晚、夕璃を捕まえようとした田中というホテルマンだった。

「…あ…」

夕璃の脳から血液が音をたてて引いていく。安堵感は消え去り、代わりに激しい混乱が夕璃の脳内で渦を巻く。忘れかけていた恐怖が押し寄せてきて、感情がコントロールできなかった。

——そうだ私は、何も知らない。

「…君、大丈夫かい？意識は…」

「……………て…」

「…？今、何て…」

「放して、いや！」

あらん限りの力を振り絞って、夕璃はホテルマンを突き飛ばした。押された拍子にホテルマンは壁に頭をぶつけたらしく、うめき声をあげて頭を抱え込んだ。

「おい、押さえろ！」

「お嬢さん、落ち着いて…」

あらゆる方向から手が伸びてきて、夕璃の手足を押さえ付ける。口を塞がれて声も出なくなる。夕璃は冷静さも、自分自身をも見失っていた。

そもそも、何故こんなことになったのだろうか。あのまま街の孤児院に留まっていれば、少なくともこんな目には遭わずにすんだはず。院を出るという選択が、すべての始まりだったのだ。こうなることが初めからわかっていたのなら、夕璃はきっと――。

ふと、幼い少女の顔が浮かんだ。孤児院で、夕璃が唯一親しくしていた少女。夕璃のことをユウ姉と呼び慕ってくれた、小さな友達。互いに心を許し、何でも話せる存在だった。

生まれて間もない頃に両親と生き別れたこと、両親の代わりに茉莉を育ててくれた大好きな祖母のこと、その祖母が眠るように息を引き取ったときのこと。茉莉自身も話すことが辛いだろうに、茉莉は、自分が孤児院へやってきた経緯を細かに話して聞かせてくれた。茉莉は今、どうしているのだろうか。泣いているのだろうか。

「…パパ…」

――パパ。夕璃はまだ、パパに会えないの？

問えども、声は聞こえない。

十

搭乗予定だった便をキャンセルし、夕璃は大事を取ってもう一日ホテルで休むことになった。医者から精神的な苦痛からショック状態にあるとの診断を受けて、安静にするようにと言いつ渡されたのだ。夕璃は処方された睡眠導入剤によって、夢を見ることなくぐっすりと眠った。

目を覚ましたとき、辺りはすでに薄暗かった。晩秋の夕刻は、日が暮れるのが驚くほど早い。

たくさん眠ったはずなのに、身体は鉛のように重たかった。不自由で、窮屈だった。このままベッドの上から動くことが出来ないのではないか、などと考えてしまう。

「…痛…」

首筋が鈍く痛んだ。頭も重い。起き上がるのは、まだ辛そうだった。

「気がつきましたか？」

夕璃の声に気付いたのか、フォードさんがベッドの傍までやってきて、夕璃の顔を覗き込んだ。それから、首の傷へと視線が移る。

「フォードさん…」

喉からこぼれ出た声は弱々しく掠れていて、フォードさんが心配そうに眉をひそめた。

「痛みますか？傷は、そこまで深くなかったようですが…怖い思いをさせてしまいましたね。私がつと、しっかり貴女を守れていれば」

「私は大丈夫です。ごめんなさい。取り乱したりして、迷惑をかけてしまっ」

「混乱して当然ですよ、一度に色々なことが起きたのですから」

本当に、その通りだった。昨日から今日にかけての短い時間のなかで、夕璃は一生分の経験をしたような気がする。

「ユーリさん？」

心配そうに覗き込んでくる、碧い瞳。フォードさんの指先が、夕璃の頬に触れた。ひやりと冷たくて、心地よかった。

「…フォードさんの瞳を見ると、不思議な気持ちになります」

「…え？」

夕璃の唐突な言葉に、フォードさんはわずかに目を見開いた。無意識に妙なことを口走ってしまって恥ずかしくなり、夕璃は慌てて弁解する。

「ごめんなさい。変な意味とかじゃなくて、何ていうか…気分を落ち着かせてくれるみたいで。気を悪くさせてしまったら、ごめんなさい」

初めは、苦手だったのだ。迷いもなくただ真っすぐに向けられる瞳は、不安や怯えといった情けない自分自身の姿を暴いてしまうように思えて、逃れたいとも思った。けれど本当は、そうでないのかもしれない——いつのまにかフォードさんの碧い瞳は、夕璃の心に溶け込んでしまっていた。

「ですから…あの、私はもう平気です」

「…そうですか。良かった」

少しの間のあと、フォードさんは小さな声で呟いた。
添えられているだけだったフォードさんの手が、ゆっくりと夕璃

の頬を包む。冷たい指先からは想像できないくらいに、フォードさんの手のひらは温かった。一つの街しか知らなかった、一人の友人しか知らなかった。たった一人の温もりしか知らなかった——知ろうともしなかった。

「本当に、良かった」

フォードさんの声は、これまでに聞いたどんな声よりも、優しくやわらかく夕璃の胸に響いた。

——その男を信用していいのか…よく考えてみるんだな。

夕璃の頭のなかに、少年の言葉が反芻した。

「今、食事を持ってこさせます」

頬を包んでいたぬくもりが離れ、無意識のうちに閉じていた目を、ゆっくりと開いた。

「いいです。食欲、ないみたいなので」

「少しでも食べたほうがいいですよ。食べて、またゆっくりと休んでください」

断るのも申し訳なく思えて、夕璃は小さく頷いたのだった。

十

フォードさんが部屋を出ていってから何分も経たないうちに、ノックの音が静かな部屋に響いた。

「失礼します…」

食事を運んできたのは、先程とはまた別のホテルマンだった。夕璃は反射的に身体を浮かせる。目眩がした。

「なんで…」

「待ってください、違うんです」

覇気のない声、申し訳なさそうに下がった眉尻。心が、ざわざわと嫌な音を立て始める。

「お、怯えないでください。何もありませんから。お願いだから…」

ホテルマンの鈴木はそれだけ言って、あとは無言のまま食事の支度を始めた。

遠慮がちに、食事のトレイが置かれる。雑炊に温野菜といった食べやすそうなメニューだった。

「あの、結構です。お腹すいてないので」

「食事だけは、しっかりと摂ったほうがいいです。薬だって、飲まなければなりませんから」

異常なほど、穏やかに流れゆく時間。命をも失いうる状況にあるにもかかわらず、夕璃は自分でも驚いてしまうくらいに落ち着いていた。

「…今なら」

「え？」

「あなたはここで、簡単に私を殺すことができる」

「お嬢さん…」

「あなたたちは、私の命を狙ってるの？それとも他に、何か目的があるの？」

頭のなかを、たくさんの記憶が駆け巡る。フォードさんの瞳、少年の瞳。真夜中の逃走劇、姿無き声。フォードさんの温もり、少年の言葉――。

「違う、違うんだお嬢さん…殺す気なんかない、君を傷つけるつもりだってなかった」

ほとんど聞き取れないような声で、鈴木は呻いた。真っ青になった顔を両の手で覆い、震える肩を抱くようにしながら、床に両膝をついてうなだれた。

「…僕だってこんなこと、したくない。関わりたくなかったんだ。でも、やつらに脅されて…」

「やつらって、一体」

そう問い掛けようとした夕璃の両肩に、重力が掛かった。男の手のひらが、夕璃の肩を掴んでいた。突然のことに声も出なかった。

男の手のひらから伝わる、かすかな震え。

「……逃げるんだ」

「え、何を」

「ここから出ないと、君は殺される。逃げないといけない」

男は夕璃の手を半ば無理矢理とると、立ち上がるように促す。

夕璃の返事を聞こうともしないまま、男は夕璃の手を引いて走りだした。

Girls' misfortune. [4]

手を引かれながら、夕璃とホテルマンは長い廊下をひたすら走った。あちこちで爆発がおこり、ごうごうと燃え盛る炎のせいで煙が立ちこめている。

「火事だ！逃げろ！」

「子供が…子供がいないわ！」

「早く、外に逃げるんだ！」

いたる部屋から人々が飛び出してきては、夕璃は何度もぶつかってよろめいた。

何が何だか、わからなかった。理解しがたかったということももちろんあったけれど、目の前で起きている出来事を飲み込むことができなかった。

それは今から数分ほど前、夕璃が部屋を出てから一分も経たないうちに起こった。

「…あ…！」

轟くような爆音とともに、身体がグラリと傾いた。夕璃が固い床に倒れこむのと、複数の爆発音が立て続けに鳴り響いたのは、ほんど同時だった。

「始まった…！」

建物がパラパラと崩れ始めるなかで男がそう口走ったのを、夕璃は聞き逃さなかった。立ちこめる砂埃、降り続ける瓦礫のくず。爆発音は止むことなく聞こえ続けていた。

低く重々しい爆発音、勢いを増す炎。崩壊の兆しを見せる建物の中を、走り続けた。恐怖に怯え絶望の表情を浮かべ、逃げ惑い泣き叫ぶ人々と、何度もすれ違った。それはまるで、地獄絵図のような光景。

——信じられない、信じたくない。

耳を塞ぎたい衝動を必死に抑えて、夕璃は走った。

「…一体、何が起こってるんですか」

声を発することすら辛い状況だった。息も上がって体力の限界も近かったし、爆発の煙と熱風のせいで呼吸をすることすら難しかった。けれど、問わずにはいられなかった。

「これが、やつらの“計画”なんだ…」

男もまた苦しそうに息を荒げていたが、走ることをやめようとはしなかった。走る速度を落とすこともしないまま、男は答えた。

「何のために？人々を、傷つけるため？こんな…こんなこと、あつていいはずがないのに」

脳裏によみがえってくる“あの日”の記憶。大好きだった人も場所も、幸せな時間も。全てが、不条理に奪われてしまった。悪寒がした。11年前と今の状況は、恐ろしいほどに酷似していた。

瓦礫の降りしきる廊下を一気に駆け抜け抜けると、目の前は行き止ま

りだった。ホテルマンはキーチェーンから小さな鍵を取り出すと、壁に取り付けられていた鍵穴にそれを差し込んだ。金属音を響かせて、壁が動いた。

「さあ早く」

「階段…」

「一番下まで、おりるんだ」

夕璃とホテルマンは地下へと続く階段を下った。階段を数段駆け降りるごとに、光は弱まり、闇が視界を支配していった。

「知らずにいれば、幸せだったんだ…僕も、君も」

せまい地下道は、ホテルマンの声を反響させる。まるで、言い聞かせるような口調だった。何かに怯えているようにも思える。

「…お嬢さんは、何も悪くない。そうだろう？だから、逃げなくちゃいけないんだ。関わっちゃいけないんだ」

昨晩は見張りまでして夕璃を逃がすまいとしていた彼が、今度は夕璃の手を引いてどこかへ導こうとしている。夕璃を逃がし、命を救おうとしている。

それは、なぜ？

「あなたたちは、私を監視するよう命じられていた。それは、私を助けるためなんかじゃないですよね？」

「あれは…仕方なかったんだ。従わなければ、僕達の命が危なかった」

た…」

話しながら移動をする間にも、何度か爆発音がして地面を揺らした。そこが地下であるにもかかわらず、鈍く響く崩壊の音。全てが崩れて地下道が瓦礫に埋もれるのも、時間の問題だろう。

「どうして私がこんな目に遭わなければならないのかと、何度も思いました。一体誰がこんな事をするのか、何のために人々を傷つけるのか…私には、わかりません」

「詳しいことは…僕も、わからない。ただ、国家組織が関与しているとだけ聞いた」

「国家？まさか、そんなこと…」

国家とは人々を守るために存在するのだと、漠然と思っていた。国があつて民がいて、その民の代表として国を収める王がいる。守るための民がいるからこそ、国家が存在する。そうではないのだろうか。

「国家の命令は絶対だ、逆らえば命はない…それでも僕は」

声に弱々しさこそあつたものの、男の言葉には少しの迷いも感じられなかった。

「…これが間違っているとは…僕は思わない。たとえそれが国家に背を向けていることになっても。君と話していて、確信が持てた」

ああそうかと、夕璃は思った。この男はずっと、自分の良心と葛藤を続けていたのだ。そして彼は自らの命を危険にさらしてでも、

自分自身の良心にのみ従おうと決めたのだ。

「お嬢さん、逃げるんだ。逃げて、何が何でも生き延びて…」

言い終わらないうちに、視界にわずかな光が届いた。階段の上から差し込んでくる、決して強くないけれど確かな光——月の光。

「もう、すぐだ。外に出る…」

視界が開けた。青白い月の光を浴びた男の顔は、疲れているのだろう、昨晚に見たときよりもずっとやつれて見えた。

立ち止まってしまった夕璃の手を、男が急かすように引っ張る。

「さあ早く、敷地内から出るんだ。この場所から…やつらから、少しでも遠くに逃げるんだ」

「遠くに…」

助かるために、夕璃が逃げるべき場所はどこか。そう考えたとき、頭に浮かんだのは孤児院だった。生まれてから一度だって離れたことのなかった街。夕璃には院に戻るほかに、生きていく方法も場所もなかった。

帰りたい。そう願う場所であり、そう思うことが許される唯一の場所。

今は、逃げなければならない。逃げて、生き延びなければ。大それた幸せは望まない、ほんの少しで良いのだ。パパとの思い出があって、隣には茉莉がいる。今までと変わらない、そんな生活に戻れたなら。

「私、行きたいところが……あっ！」

走りだそうとした瞬間に足がもつれて、手を突くよりも先に地面に膝をついてしまった。強い衝撃が走る。

「…っ…」

「お嬢さん、大丈夫……」

男の手が差し伸べられて、すぐにピタリと止まった。あまりにも機械的な動きに夕璃は首を傾げ、男の顔を見上げる。“あ”の形のまま開かれっぱなしの口、眼球が転げ落ちそうなほどに見開かれた目。たとえるならば、そう、何かを訴えかけるような叫びの表情。

「…え？」

糸を切り離された操り人形のように、男の体は地面に崩れた。

「…あ…」

倒れた男の背中が赤黒く染まっていく。それはやがて地面にまで広がり、水溜まりとなって月の光を反射させた。

「…探しましたよ、ユーリさん」

11年前のあの時も、夕璃は当たり前のように守られていた。夕璃よりもはるかに大きな体、大きな手。抱きかかえられていたときの温もりを、まだ覚えている。

パパがいたから、夕璃は助かった。パパがいたからこそ、夕璃は今ここに存在している。パパが、いたから。パパの命を犠牲にして、夕璃は今、生きているのだ。

そして、今も。

「あ…あああああ…!!」

絶叫、狂乱。

目を見開いたまま息絶えた男。それは、夕璃がまだここに立っているということの代償だった。

——まだ、生きていた。

また、生き残ってしまった。

夕璃のまわりにいた全ての人々の命を、犠牲にして。

Girls' misfortune. [5]

「傑作です、その表情」

くつくつと笑う、碧い瞳の青年。

「たかが人間が一人死んだ程度で、そんなに驚くことなどないでしょうに。死体なんて、11年前に飽きるほど見ているはずでしょう？」

血に濡れたナイフを片手に、心底おかしそうに笑う彼は、夕璃にとって狂気そのものだった。カラカラに渴いてしまった口の中で、彼の言葉を復唱する。

「11年前…」

「そう、11年前のあの事故。おぞましい光景だったのではないですか？研究所にいた人間は一人残らず始末されたのですから…貴女のお父上も含めてね」

何故、どうして。軽々しく言えるのは、どうして。

「ああ、そうでした。お父上が死んだ理由を、貴女にはまだ聞かせていませんでしたね」

笑みすら浮かべられるのは、どうしてなのだろう。人が一人、目

の前で息絶えているというのに。背後の建物の中では今この間にも、一人、また一人と、その命の燈を消してしまっているというのに。^{トモシビ}

「全ては、“プロジェクト”のため。“プロジェクト”が我々の全てなのです」

「“プロジェクト”に関わってしまったから、みんなは殺されてしまったって言うの…」

「まあ、そうなるのでしょうか。と言っても、研究所にいた人間はあくまでも、研究をさせるためだけに我々に雇われていたにすぎないのですが。我々が求めている研究データを集めるのが、彼らの役目。必要なデータさえ得られれば、彼らはもう用済みでした」

心臓が、ざわざわと音を立てて波打っていた。立ちすくんだままの夕璃から、フォードさんは視線をずらそうとしなかった。

「必要のないものは捨てる…それは当然のことですよ。人間だって同じこと。ただし、証拠が残らないようにしなければならぬ。書類や機械データの記録は、いくらでも改竄^{カイザン}することが出来ますが…人の記憶はそうはいかない、厄介なものです」

「あの時も、今も…全部、そのために…」

「その通り、我々の組織がやったことですよ。関与した人間全てを消し去って初めて、それは完全なものとなって積み重ねられていく」

彼はナイフをもてあそぶように、手のなかでくるりと回転させる。血が、あたりに飛び散った。

「…まったく、情けない。あの事故が完全ではなかったことに、我々はつい最近まで気付いていなかったのですから」

「…あ…」

「生き残った人間がいたのです。それが誰だか、わかりますか？」

「それは…っ」

「…お察しのとおり」

ふいにフォードさんの手が伸びてきて、夕璃の首に触れた。
優しく、まるで愛しむかのように。傷になっている部分を撫でられ、走った痛みに関を震わせる。

「あの事故の生き残りである貴女が死んでくれないければ、この“プロジェクト”は不完全なままであり続ける」

「……！」

添えられた手に力が込められ、そのまま背後の壁に体を押しつけられた。首筋の痛みと後頭部に響いた鈍い痛みとで、意識が離れそうになった。

「…く…はっ！」

「…そう。貴女の死をもって、初めて“プロジェクト”は完全なものになるのです」

ハリツケ
磔の状態にされたまま、ユーリの首が締めあげられる。圧迫され

ていく気道。苦しいかった、助けてと叫びたかった。けれど、声も出ない。

「…しかし、一つ問題が起きてしまった」

言葉とともに、首から手が離れた。酸素が急に肺に入ったことにより、夕璃は激しく咳き込んで地面に崩れた。

「始末を終え、目的のデータを回収しようとして、異変に気付きました。データは、何一つとして残されてはいませんでした。10年以上の間、血眼になって探したけれど、それは見つからなかったのです。見つからないはずです…そのデータは貴女のお父上によって、全て消去されていたのだから」

「…けほっ…けほ…」

「そこで我々は知らされることになったのです…彼には娘がいて、その娘はあの事故の現場にいたにもかかわらず、一人生き残っていたということを…そうなれば、考えられることは一つ。データに関する事柄を、何らかの形で娘に託したのではないか、と」

苦しさに喘ぐ夕璃などお構いなしに、彼は話し続けた。ありったけの反抗を込めて睨みつけても、怯むことなどまるでなかった。

「だから、貴女が必要でした。貴女が父親から託されたであろうデータを、手に入れるために」

「…私は、何も知らない。パパが私に残してくれたのは、思い出だけ…たったそれだけ。だから私は、ずっと独りぼっちだった」

「そうですね：その通り。貴女のお父上は、何度も我々の計画を破綻させてくれましたよ。思い出だとか、愛だとか：鬱陶^{ウツトウ}しい。くだらないと思いませんか？」

「くだらなくなんか、ない」

「勝手に喚いて下さって結構です。肝心のデータに関することが残ってないのだから、我々にとって役に立たないという事実が変わりはありません。おかげで、計画を変更せざるをえなくなったのですから」

「それなら何故、まだ私を追うの…」

「今回の計画は、トーヤ・サクラキの娘をあの街から連れだし、データに関する情報を引き出す。そして済みしだい、始末をする」

「……！」

「しかし情報を得られなかった今、貴女を殺せば、データに繋がる可能性のあるものが一切無くなってしまう。もしかしたら、断片的な記憶としてデータに関する事柄が残されているかもしれないし、直接的にはデータに関係なくとも、何らかの方法によってそれが得られることだって充分に考えられますから」

「私は、研究の内容だって知らないし、実際に見ていたわけでもない。知ってることなんて何も——」

地面が、大きく揺れた。振り返って上を見上げると、爆発と同時に建物内から炎が吹き出していた。その衝撃で、すでもろくなっていた壁が崩れる。大きなコンクリートの塊が頭上から落ちてくる

のを、夕璃は座り込んだまま見つめていることしかできなかった。

——もう、いい。

疲れてしまった。何もかもが嫌になった。

パパがいなくなって、それでもパパとの約束を守りたくて、守ってほしくて、夕璃はずっとずっと待っていた。でももう、終わりにしよう。

夕璃は、そのまま目を閉じた。

「…え…？」

体が、ふわりと浮かぶような感覚。すぐ近くで響く破壊音。痛みはなかった。

「…今、貴女に死なれてしまったのは、困る」

すぐ耳元で声がして、おぼろげだった意識が覚醒する。夕璃が目を開ければ、触れてしまいそうなほど近くに碧い双眸あった。心臓が止まる。

「けれど、貴女が存在しているということ…存在したという証を、残しておくわけには行かないのです」

夕璃を抱きかかえたまま、フォードさんは言った。額と額が触れ合い、さらに距離が縮まる。

「貴女が乗る予定だった飛行機も今頃、海の底でしょう。飛行機事故による事故死。記録上での貴女の人生は、そう締めくくられる事

になるのです」

言葉を発するたびに、吐息が夕璃の唇をくすぐった。

「おわかりでしょう…？ 貴女が立ち入った場所、関わった人間。全てが、邪魔なのです」

言葉が耳に入ってきた瞬間、夕璃の思考機能が完全に停止した。夕璃と関わった人々——崩壊してゆくホテル、目の前に転がる死体。夕璃が11年という年月を過ごした、孤児院。

「…まさ…か」

——マリ。

「貴女は11年前、愚かなお父上のせいで生き残ってしまった。まったく、馬鹿なことをしたものです。あのときにお父上とともに死んでさえいれば、今ここで、こんな目に遭うことなどなかったのですから」

「……！」

夕璃というたった一人の人間の存在を消し去るためだけに、利用され、失われた、たくさんの命。今この場にいないければ、命を失わずに済んだのだ。夕璃に出会っていなければ——夕璃が、いなければ。

「貴女を連れ出すのは、実に容易いことでした。お父上と関わりが

あったと言えば、関心を持つだろうことは予想していましたが。しかし予想以上に、貴女は私の言葉を信じてくれましたよ」

心臓が、ドクンドクンと嫌な音を立てる。

「運命は定められたものではないと、貴女はおっしゃいました。しかし、現実とは残酷なものです。逃れられない運命にもがき苦しむ……それが人間であり、現実そのものなのですよ」

それ以上は、聞きたくない。叫びたいのに、声も出ない。今すぐにでも地面に伏して、そのまま目覚めることなく深い眠りについてしまいたい。

「お父上のことを存じ上げていると、私はそう言いましたが……あれは事実ではありません。面識があったということは事実ですが。私はあの事件への関与もなければ、知っていることなどほとんどありません」

11年前。そう、あれはもう11年前のこと。

「……貴女は本当に、お父上に似ていらっしゃる。信じていたものに裏切られてしまうというのは、貴女方親子の運命なのかもしれません」

11年もの月日が経っているにも関わらず、未だに“あの日”の記憶に縛られていた。忘れたくても、忘れられない——あるいは、そうではなくて、忘れてしまうのが恐かったのかもしれない。パパとの思い出の全てを失ってしまうことが、恐ろしくてたまらなかったのかもしれない。

まるでつい最近のこのように11年前の思い出に浸ることで、

自分自身を守っていたのだ。囚われているのだという事にすら、気が付かずに。

「可哀相に」

パパは一体、どんな気持ちで死んでいったのだろうか。

「貴女は本当に、ひとりぼっちになってしまいましたね」

居場所も温もりも思い出も、何もかも。夕璃には、もう何も残されてはいなかった。

G i r l ' s m i s f o r t u n e . [5] (後 書 き)

〈訳〉少女の災難

The town burns and people's despair.
The town burns and people's de
s p a i r s .

行き交う人々はみな慌ただしく、騒然とした雰囲気は閑静な街並にそぐわない。

「……」

空に向かって高く燃え盛る、赤い炎。真っ黒な煙は、漆黒の夜空に吸い込まれてゆく。

——…奴らの仕業、か？——

「…ああ」

おそらく、そう考えて間違いはないだろう。

——…返事をするなんて、今日はやけに素直だな？——

「…うるさい」

心中で舌打ちをした。うるさい、黙れ。

そのまましばらく、治まりを見せない炎の様子を眺めていた。

「…生徒が、生徒がまだ中に…！…カレン…メイ…！」

騒然とする人々の中から、一際響く大きな声が聞こえてきた。ヒステリックに泣き叫ぶその声が不快に思えて、眉を寄せる。

「あああ…っ！」

「ここにいては危険です、避難してください！」

荒れ狂う炎と格闘している消防隊が、絶叫する女に声をかけた。しかし女は炎から離れようとはしなかった。どこか虚ろな視線を、燃えて廃墟になっていく建物へ向けていた。

「私の、院が…ああ…生徒達はどこ？私の院は…これが全てだったのに……」

「……」

——…ああ、あれは……

憂うようで、またどこか嬉々としていて。やつは囁いた。

——…絶望だ……

「…心配ない。あれも、あとで始末される」

心配をしているわけではないとわかっていたが、皮肉を込めてそう言っている。

—…ならば、今我々が手を下したとしても、変わるまい—

「…勝手な行動をするな」

—…ふふ。お前は昔から変わらない—

—皮肉か？

黒くドロドロとした感情が立ちこめる。

笑い声なんか、上げやがって。機嫌がいいのか何なのか知らないが、こちらは不快でしかない。

「黙れ」

数日前から、やつはすこぶる機嫌が良かった。それは何故か——
大体見当は付いていた。

「…黙れよ。殺すぞ」

自然と声を張ってしまっていたらしい。家事の野次馬たちが、訝しむような視線でこちらの様子をちらちらと窺っていた。

別段気にすることもなく、人混みに背を向けて歩き始める。

——…ナツキ……

「……」

——…あの少女に、もう一度会えると思うかい？……

恐怖に色を失った少女の顔が、浮かぶ。

——…もう一度、会いたいと思うかい？……

倒れかかった少女の、柔らかな体と温もり。朦朧としていた意識の端で、背中に回されていた腕の温度を、覚えている。

——…私は、もう一度会いたいよ……

見開かれた瞳の色を、知っている。

「……黙れ」

——黙れ、死神。

左手首に、ピンと張り詰めるような感覚が走った。埋め込まれたチップに、電気が走ったのだ。彼が、呼んでいる。

——…行くのか——

今度は、返事をしなかった。

——…どうもあれは、好かないのだが——

「色好みか、死神の分際で」

——…言うようになったな、少しは成長したか——

——…いや、やはり、昔と変わらぬか——

——…あの時から、お前の時は止まったまま——

——…動かぬまま——

——…なあ、ナツキ?…——

喧騒の中で闇にまぎれるように、少年と死神は姿を消したのだっ
た。

The town burns and people's despair

〈訳〉燃える街、人々の絶望

Y o u n g n o b l e m a n o f l i e .

Y o u n g n o b l e m a n o f l i e .

由緒正しい家柄に生まれ育つということは、すべてに恵まれた不自由のない生活を約束されるということであり、またその人生を家の名前に縛られ続けるということでもある。

家の名の繁栄と存続のために、その身を捧げなくてはならないのだ。

「フォード様、ようこそいらっしゃいました」

とりわけ良い家柄のものは昔ながらの伝統や文化というものを大切にしているらしく、その証拠に、この城の警備は時代の変化にすぐわなないものばかりだった。

「案内をいたします、どうぞこちらへ」

特別な身体検査などはせず、顔だけで城内に立ち入る許可が得られる。

なんと単純なことであろうか。仮にも、国を治める王が住む城であるというのに。

「失礼いたします、陛下」

丁寧に頭を下げ、まずは相手からの言葉を待つ。

「…アレン。戻ったのか」

「はい。昨晚、到着いたしました」

「そうか、ご苦労だった」

もの言いたげな瞳。

焦らすつもりはなかった。その瞳を見据えたのち、相手の渴望する情報について話すべく、口を開いた。

「…やはり、隠されていました。彼女自身も気付かない、あるいは知らされていないのかもしれませんが…記憶の闇の奥底に」

「…そうか」

大体の予想は付いていたのだろう。彼は特に落胆の様子を見せるわけでもなく、そう呟いただけだった。しかし彼が細く長い息を付いたのを、決して聞き逃しはしなかった。

「陛下。もう少し、お時間をいただいても？」

「ああ、構わない」

「失礼いたします」

革手袋をはめ、小振りなアタッシユケースの止め金を外す。そのまま、テーブルの上で開いてみせる。

「黒い羽根…？」

「複数の人間に確認させたところ、見える者と見えない者とがおり

ました。おそらく、被験体であった少年ものかと」

彼の表情が、一瞬だけ歪められた。唇がわずかに動いて、ほとんど息同様のかすれた声が唇から漏れた。

「…死神」

「はい」

「彼に会ったのだな？」

「はい。相変わらず、死神と共に」

「………」

羽根に触れようと伸ばされた手を、すっと遮った。眉をしかめる陛下に向かって頭を下げつつ、忠告をする。

「触れないほうがよろしいかと。我々にとって未知の領域の、非常に危険なものとも限りません。これを」

シャツの胸元をはだけさせ、あらわにする。陛下が息を飲む音が、広く静かな王室に響き渡った。

無理もない反応だった。胸元はまるで腐敗しているように黒く変色し、人肌とは思えない状態になっていた。

「それは…呪いか…？」

「おそらく。羽根を拾い持ち帰ったのですが、気付けばこのような状態に」

「治るのか、その痣は…」

恐ろしさに肩をふるわせながら、陛下は彼の身体を案じた——否、自分自身の保全のためというのが正しいのだろう。

「ご心配なさらず、手は打ってあります。目には目を、歯には歯を」

「…“シェンシア”か？」

「彼は中々、博識ですよ」

「そう、か」

表情を陰らせた陛下に、彼はゆったりと微笑んでみせた。

「全ては整いました。死神も、少女の記憶に秘められた鍵も我々の手の内にあります。あとは、その鍵を見つけだし、データを手に入れるだけで良い」

アタッシェケースを閉じ、しっかりと止め具をかける。革手袋は付けたまま、ケースを手を持った。

「…あとどれくらい、時間があるのかもわからない。あるいは、あと数か月、いや数日の命やもしれん」

「存じております。ただ…人の精神というのは、壊れやすいのですよ」

あの時あの瞬間、目の前に伏した男の亡骸を見つめる少女の表情。

生氣すらも失い、ただ立ちすくむことしかできない状態だったのだろう。

「無理矢理こじ開けようとすれば、もはやそこまで。人は簡単に狂気を呼び起こすでしょう」

少女をそんな状態に追い込んだのは、紛れもなく自分自身であるというのに。

「一刻も早くプロジェクトを完成させなければ、リレイアは…」

「陛下のお気持ちはわかりますが…しばし、お待ちを。精神というものは、あまり手荒に扱わないほうが良いのです」

——偽善。

暗い闇のどん底まで陥れて、一本だけ残された細い糸を、切らずにたぐり寄せる。

善良の人の面をかぶった、殺人鬼。

「必ずや、朗報をお聞かせいたします」

「……お前しかいないんだ、アレン」

「お任せを」

——でも、どうしたらいい？

他に、どうすれば良いというのだろうか。

すべてを縛られた人生において、それに逆らう術もなく。

善の面を片手に全てを覆い隠して、どこかに空虚を抱えながら。

「永遠の命を、我々の手に」

歩き続けるしか、ない。

*T o b e c o n t e n u e d . *

Y o u n g n o b l e m a n o f l i e . (後書き)

〈訳〉 偽りの貴公子

序章†To the dark that has not been seen

第二幕

序章†**T o t h e d a r k t h a t h a s n o t b e e n s e e n**

T o t h e d a r k t h a t h a s n o t b e e n
s e e n y e t .

無月は、走っていた。辺りは闇、迎う先に何があるのかもわからないような場所だった。

しかし迷うことはなかった。というのも建物内の詳細地図が、寸分の狂いもなく頭に中に描かれていたからだ。

「逃がすか！」

視線の先、無月の目の高さとはぼ同じところで、赤い光が明滅していた。それが赤外線機能のある特殊マスクを装着しているためであることは、すでに調査済みだった。相手には、無月のいる位置や動きがはっきりと見えていることになる。

かまいたちのような風が頬をかすり、小さな痛みが走るのと同時に、体をひねって相手の後方に回りこみ、防護服の急所にナイフの刃を突き刺した。

「…うぐあ…っ」

「邪魔」

うめき声をあげる相手の顔を、勢い良く踏み付けた。

バリン、グシャ。

男はそれきり、動かなくなった。

——…絶望……—

「今は急いでる。後だ」

——…新鮮なほうが、格別美味なのだが……—

——…仕方あるまい……—

言いつつも名残惜しいのか、やつの意識は無残な姿になっている
であろう男の死体に向けられたまま。

——…ナツキ、お前は保_モつのか？……—

——…昨日から何も、得ていないだろうに……—

「お前と一緒にするな」

——…一緒にするなと言われても……

——…実際我々は一体なのだ、仕方あるまいよ……

喉の奥で笑うその声が耳障りで、無月は小さく舌打ちをした。

「ラヴィ」

——…何だ？……

「何人殺ったか覚えておけよ。全部殺るのに、あまり時間はかけられない」

——…ああ、わかっているさ……

無月は、足早にその場を立ち去った。目的を果たすまで、まだまだ先は長い。

+

「…誰？」

ノックの音に、ベッドに横たわったまま唇だけを動かして問い掛けた。

「失礼いたします」

「ああ、あなたねティオ」

「はい。お食事と、お薬をお持ちいたしました」

「そこへ置いてちょうだい。下がって良いわ」

「ですが」

「置いてって言って言ってるの。用が済んだなら、出て行って」

「…かしこまりました、リレイア様」

食事と薬の準備を済ませると、ティオはそれ以上は何も言わずに

部屋を出ていった。

「食事も薬も、嫌い。大嫌いだわ……ねえ、シェンシア」

呟いた言葉に、返事はない。

「シェンシア。シェンシア、出てきてちょうだい」

天井に視線を向けたまま、同じ名前を何度も呟いた。

——…お呼びですか、リレイア——

気が付けば彼は、ベッドサイドに腰掛けてこちらを見つめていた。

「意地悪ね。居たのなら、返事くらいしてくれればいいのに」

シェンシアは小さく笑みを浮かべて見つめてくるだけで、何も言わなかった。

「ねえシェンシア…あなたは、わかってくれるでしょう？ 私の孤独も、絶望もみんな」

——…もちろん。あなたの絶望は、誰よりも深い——

「お父様もティオも、何もわかっていないのよ。私がどんな気持ちでいるのかも」

幼い頃から、この体はほとんど使い物にならなかった。ベッドから起き上がって自分の足で歩くことすらままならなかったし、外へ出て走り回るなどということは到底出来なかった。

それなのに、弟は。

「ねえ、シェンシア。私ね、時々思ってしまうの」

ベッドサイドに置かれた写真に手を伸ばす。

幼い頃に一度だけ、中庭の庭園に出て家族写真を撮ったことがあった。お父様とお母様、無邪気に笑いながら手を握ってきた幼い弟。そして、車椅子に乗った自分自身。笑顔なんて微塵もないし、実際楽しくも何とも無かった。結局この後リレイアは体調を崩し、生死の境を彷徨^{さまよ}ったのだ。

それ以来リレイアが屋敷の外に出ることは、一度たりとも許されなかった。

「：何で、私なのかしらって。思ってしまうのよ」

無邪気に笑う弟。何の不自由もなく健康に育った、たった一人の弟。

「何で、弟ではなかったのかしらって」

写真フレームを掴み、壁に向かって無造作に放り投げた。壁にぶつかりフレームのガラスは飛び散り、部屋の外からは慌ただしい足音が聞こえてきた。

「リレイア様！」

乱暴に部屋のドアが開かれて、血相を変えた使用人たちが何人も現れた。

「…ティオ、顔が真っ青よ」

「リレイア様、先程の音は一体…」

「この部屋に、写真なんて飾らないで」

「リレイア様…」

「花も、絵も、本も。何もかも、捨ててちょうだい」

「……………」

まわりの人間は、本当に残酷なことをしてくれている。

咲き誇る花を見たのは、写真に残されたあの一瞬の時間だけ。絵に描かれるような美しい風景を、リレイアは一度だって見たことが無かった。本の世界にある夢や希望を抱いたことなど、生まれてから一度もなかった。

「…私の傍にあるのは、絶望と孤独だけ。そうでしょう、シェンシア？」

シェンシアはやはり何も言わず、ただただ微笑んでいるだけ。

「…死神…」

ティオが、低く唸るような声で呟いた。呟かれたその不吉な単語に部屋中が、ざわめく。勢い良く顔を上げた彼の瞳は、今までに見

たことのないような雰囲気を漂わせていた。

「リレイア様に何をした！」

「ティオール様、落ち着いてください！」

突然大声を出したティオにまわりの使用人たちは驚いて、慌てて止めに入る。しかしティオはシェンシアに燃えるような視線を向けたまま再び叫ぶ。

「リレイア様を惑わすな！」

「ティオール様！一体何をおっしゃっているのですか……」

「……そうか、お前たちには見えていなかったな」

そう、他の使用人たちには見えていない。シェンシアの姿も声も、存在していないのと同じなのだ。

「しかし、私には見えている……汚らしい死神め。今すぐに、貴様をここから追いだしてやる！」

「……ティオ、いい加減にしてちょうだい」

リレイアが呟くと、一瞬にして部屋の中が静まり返った。

「出て行ってちょうだい」

「……！」

「聞こえたでしょう、今すぐによ」

「……大変、失礼をいたしました」

俯いたままのティオの表情を、見ることはなかった。使用人たちもまた、連なって部屋を出ていく。後に残ったのは割れた写真フレームを片付ける使用人と、絵や本を取り外す数名の使用人だけだった。

「…シエンシア」

手を伸ばし、求めるように見上げれば、シエンシアは深い笑みを浮かべた。ゆっくりと絡み合う、指先。

——…リレイア——

唇と唇が重なり合う。この瞬間だけ、リレイアは全ての柵シガラミから解き放たれるのだ。

——そう、まるで、絶望を奪い取られていくかのように。

十

狭く暗い地下通路を抜けるまでに、闇の中で何人もの人間を始末した。倒しては新たな敵が現れ、また倒してもなお、次から次へと送り込まれてきた。小型ナイフにしたたる血は、あっという間に無月の右腕を真っ赤に染め上げていた。

向かってくる敵の防護服の上から、頸動脈に向かってナイフを風ぐ。激しい血しぶきを上げて倒れ、そのまま動かなくなった。

「…今ので何人目だ」

問いかけながら、脱いで左手に持っていたジャケットで血にまみれたナイフと右腕を拭った。血でナイフを握る手が滑り、うっとうしかった。

「…56人目だ…」

「確かか？」

「…獲物の数だ、寸分たりとも違わないさ…」

「多いな」

無月はわずかに眉をひそめる。スパイを送り込んでの事前調査では、警備にあたっているであろう人間は15名ほどとされていた。機械による警備システムが大多数を占めている施設内には、ほとんど人の姿はないとも聞いていた。無月がこれまで手に掛けた人間の数は、報告されていた数を40人は超えている。

「チ…」

スパイに入った幹部が、情報を読み違えたか。あるいはその正体を見抜かれて、偽りの情報を握らされたか。そのどちらかだ。どちらにしろ、任務を完遂できなかった人間の末路は決まっている。

——…一旦、戻るか? ——

「まさか」

未知数の敵が目の前に立ちあがらうと、それがたとえ何十人も何百人もいようと、結果は同じ。邪魔なものは全て、排除するだけ。

「ラヴィ、お前は仕留めた獲物を数えてさえいればいい」

——…ナツキ、お前は本当に、楽しそうに人を殺す……

面白がっているような色を含んだ死神の声が、反響して四方八方から聞こえてくる。

「何とでも言え」

楽しいだとか苦しいだとか、そんな感情はとっくの昔に失ってしまった。今はただ何も考えずに、前に進むことしかできない。

「この先のルートは？」

——…再び、地下へ潜れ。すぐ近くまで来ている……

「あと少し、か」

ひと休みしたいのも山々だったが、ここで足を止めてしまったら任務に戻れなくなるような気がした。それくらいに体力を消耗し、体は飢えている。——“絶望”を欲しているのだ。

果たしてそれは死神の感情なのか、そうではなく無月自身の感情なのか。長い時間をかけて、死神と無月は体も心も深く結び付いてしまった。後戻りなど、出来るはずが無いのだ。

さっさと終わらせようと、無月は思った。全てが済んだその後

に、気の済むまで飢えを満たせばいい。

それだけの絶望が、ここには確かに存在しているのだから。

*T o b e c o n t e n u e d . *

序章†To the dark that has not been seen

〈訳〉まだ見ぬ闇へ

一章†From the bottom of despair.

From the bottom of despair.

「ユーリ！」

幼さの残る声が、ユーリの名を呼んだ。パタパタという足音に後ろを見れば、無邪気な笑みを浮かべて走りよってくる少年がいた。藍色の髪に、パッチリとした同色の瞳が人懐こさを表している。

「ロイ…どうしたの？」

少年の顔がいつになく嬉しそうだったので、ユーリはそう尋ねずにはいられなかった。対する少年は待ってましたと言わんばかりに胸を張り、輝かせた瞳を真っすぐにこちらにむけて言った。

「試験に通った！これで僕も、ユーリと同じ学年だ」

「本当に？すごい、おめでとう」

「なんか、あんまり嬉しそうじゃないね？」

「そんなことないよ。ロイ、ずっと頑張ってたもんね」

「へへっ。とにかく、来年度からカリキュラムが変更されるんだよ。僕、ユーリと同じクラスに入れてもらうようにする」

「そんな、ロイならもっと上のクラスに行けるよ」

「∴ユーリってさあ」

「え？」

わずかに拗ねたような表情を見せるロイに、ユーリは首を傾げる。
すぐにロイは、あきらめたようにため息をついた。

「ま、いいや。お昼は？もう食べた？」

「ううん、今からだよ」

「よし、じゃあ一緒にいこう」

「うん」

ためらいなくユーリの手を取ったロイは、少々強引ともいえる力で手を引いた。自然と駆け足になる。ロイの横顔は、いつもに増して無邪気に見えた。

「ユーリ」

「ん？」

「今度の休暇、何か予定ある？」

「ううん、今のところは特にないかな」

会話の途中で、二人はレストランの入り口へとたどり着いた。メイドたちがこちらに気付いて、恭しく頭を下げる。^{ウヤウヤ}オーナーもまた

ロイを見るなり、笑みを貼りつけて言った。

「ああ、お坊っちゃま。お嬢様もご一緒でしたか。いらっしやいませ。さあさ、こちらへ」

窓際の特等席に案内されるのは、いつものことだった。いつものならば何も言わずに席につくはずのロイが、今日は何かを考えるような仕草を見せたのち、窓の外へと視線を移した。春の訪れを感じさせる眩しい日差しが、ふり注いでいる。

「ねえユーリ、今日は天気もいいし、テラスで食べない？」

「私は構わないけど…」

「はい、かしこまりました。それでは準備をいたしますゆえ、こちらでおかけになってお待ちください」

オーナーは丁寧に頭を下げると、まわりのメイドにあれこれと指示を言い渡しながらかたがた去っていった。その後ろ姿が少し慌てているようにも見えて、ユーリは心苦しく思えた。

「何か、悪いことしちゃったかな」

「…?…どうして？」

「わざわざ準備のために、手間を掛けさせちゃったから」

ユーリが言うと、ロイは眉尻を下げて呆れながら言葉を返す。

「どうしてユーリが、そんなこと気にするんだよ。変なの」

「そうかな。変かな、こんなこと考えるのって」

「うん、変だよ」

けらけらと笑い飛ばすロイに、ユーリは心中で小さくため息をついた。

生まれ育った街を離れ、夕璃がユーリになってから、一年近くが経とうとしていた。

ユーリ・ロゼル——それが、ユーリが生きていくために与えられた名前だった。“死んでしまった”、櫻木夕璃の代わりとして。

「お坊っちゃま、お嬢様。テラスの用意ができました。ご案内いたします」

「よし、ユーリ行こう」

「…うん」

ロイはやっぱり無邪気な笑みを浮かべて、ユーリの手を引くのだった。

「そうだ、さっきの話の続き」

椅子に腰をおろすなり、ロイは思い出したように話を切り出した。

「…えーと、何だっけ？」

「休暇だよ。春の長期休暇」

「あ、そうだったね」

次々と運ばれてくるフルコースのランチを口に運びながら、とても楽しそうに話すロイ。ユーリもまた、つられて笑顔になる。

こんなふうに笑えるようになったのは、他の誰でもない、ロイのおかげだった。全てを失い絶望に満ちあふれていた日々、ロイは光を与えてくれた。

「休暇に、ちょっとした旅行に出かけようと思ってるんだ」

「旅行？へえ、すごい」

「たいしたことないよ、三泊四日。それでさ、ユーリも一緒にどうかなって」

「え、私も？」

「そ。ユーリも」

「うーん…どうだろうね」

「えっ、ダメなのか？」

「だって、私だけじゃ決められないよ。聞いてみないと」

「良いつて言うに決まってるさ！」

「それでも、聞いてみないとね」

「：ちえつ。カタいなあ、ユーリは」

それだけで果たしてユーリがカタイということになるのかどうか
わからなかったけれど、許可を取らなければならないのだから仕方が
ない。

「アレンは元気？最近会ってないな」

「え？…ああ、フォードさん。元気みたいだよ」

「何だよ、みたいって」

「最近忙しいみたいで、帰ってないみたい。私もあまり会ってない
んだ」

「へえ。案外忙しいんだな、伯爵っていうのも」

「そうだね」

“あの日”以来、フォードさんと顔を合わせたのはたったの二回。
仕事が忙しいのか、会ったといっても学校の編入手続きやら事務的
な内容のためであって、言葉を交わすことはほとんどなかった。彼
の顔を見ずに済むことで、ユーリは心の平穏を維持できているのか
もしれない。そんなことを、ふと思ってしまう。

一年前の出来事を、ユーリは今だにはっきりと覚えている——忘
れたことなど、一度だってなかった。眠れない日々が長い間続き、
眠りにつけば夢に現われ、うなされるたびに目を覚ました。食欲は
失せて体力が落ち、体はやつれ衰弱し、ほとんどの時間をベッドの
上で過ごしていた。

「楽しみだなあ」

「なにが？」

「ユーリと旅行！」

「まだ行けるかわからないよ」

「ユーリは行きたくないのか？」

「楽しそうだな、とは思うよ」

「だろ？」

ロイと出会ったのは、部屋に閉じこもりっぱなしの生活が続いて数か月がたった頃だった。

どんな経緯があったのかは聞かされていなかったが、部屋に忍び込んできたロイと言葉を交わしたのがきっかけで、それからロイは見張りの目を盗んではこっそりユーリに会いに来て、他愛ないおしゃべりをしたのだった。

「ごちそうさまでした」

ロイのおかげで、ユーリは今こうして太陽の光を浴びながら、食事をしたりできるのだ。ロイには、言い切れないほどの感謝でいっぱいだった。

「うまく説得しておいてよ、旅行の話」

「はいはい」

「…じゃあ僕は、これから用事があるから」

「うん」

「遊びに行くよ」

「うん、待ってる」

「じゃあね。良い休暇を」

「ロイも。良い休暇をね」

太陽に負けないくらいの眩しい笑顔で、ロイは手を振っていた。

ユーリもまた手を振り返せば、ロイは満足気に頷き、去っていった。

「…ロイも、何だかんだ言って忙しいもんね」

一人ごちて、はっと我に返る。これではまるで、寂しがっているみたいじゃないか。

ユーリは自分で自分を叱咤^{シツタ}した。ロイはいつだってユーリのことを気遣ってくれるし、優しく接してくれる。学校でも、できるだけ多くの時間を一緒に過ごしてくれている。それ以上に、望むことがあろうか。

——これ以上は、私のわがままにしかない。困らせてしまうだけだ。

「……」

ユーリは固く目を閉ざした。

「…帰ろう」

幸いユーリには、まだ帰る場所がある。

From the bottom of despair. [2]

「…君、天使？」

それは、突然に訪れた。

「ねえ、天使なの？」

そう言って無邪気に話し掛けてくるのは、夕璃よりもいくつか年下に見える少年。ベッドの脇にある椅子に膝を立てて、夕璃の顔をじっと覗き込んでいた。

「……だれ？」

「僕？僕はロイ、ロイだよ」

「…ロイ」

「うん」

誰かと話をするのは、久しぶりだった。久々に聞いた自分自身の声は見事にかすれていたのだけれど、そのときはそんなふうに考える余裕もなかった。

「けほ…けほん」

ほんの少し相槌を打った程度の会話でも、喉にかなりの負担を与えたようで、夕璃は小さく咳き込んだ。

「具合悪いの？」

「…ちがうの、平気」

「君の名前は？天使には、名前はないのかな」

「天使じゃ、ないよ」

「えっ、違うの？」

「人間だよ。人間で、名前は夕璃」

「ふうん、ユーリか」

頷いたもののまだ納得がいかないようで、ロイは夕璃の顔をまじまじと覗き込んだ。

「何で、天使だと思ったの？」

「本で読んだんだ、天使の話」

「本で…？」

「うん、悲しい話だった。翼を落とされてしまった、かわいそうな天使の話さ」

「どうして…翼を？」

「人間を、愛してしまったから」

「天使が、人を」

「うん、そう。君を一目見て、僕…あつ、て思った」

「……？」

偽りも悪意もない、ただ純粋な笑顔を夕璃に向けて。

「天使はきっと、こんな横顔をしてるんだって」

あの時のロイの笑顔を、今でも覚えている。

品の良いノックの音がして、夢から覚めた。

「…さま、お嬢様」

「…はい」

メイドの声が聞こえた。ユーリは布団から起き上がって、返事をする。

「お客さまがいらっしゃってまして」

「お客さん？」

休日だというのに、朝早くから一体何の用事なのだろうか。

「ああ、いけませんわ、お坊っちゃま！」

「ユーリ！」

メイドの叫び声よりも数倍大きな声とともに、部屋のドアが勢い良く開かれた。

「…ロイ！」

あまりに突然すぎる出来事にユーリは数秒間まばたきを繰り返してから、やっとのことでその名を呼んだ。

「何だよユーリ、寝呆けた顔だなあ」

「だって、こんな朝早く来るなんて…聞いてない」

「たまたま、時間ができたんだ。すぐにでもユーリに会いたくてさ。起きてなかったら、起こしてやろうと思って」

「私だって、一応レディなんだけどな」

「何だよ、ユーリ。何怒ってるんだよ」

「…寝起きなんて見られたら、機嫌悪くなるに決まってるよ」

そう言って眉をひそめて見せれば、ロイは思いつきたじろいだ。

「あ…ご、ごめん。ごめんユーリ、謝るから。そんなに怒るなよ」

「……………」

「ユーリ…」

「五分」

「え？」

「…五分、待ってて。支度済ませるから」

「五分って……ユーリ、それ、オレの支度時間より短いよ。女の子なのに」

「うるさい。いいから、出る出る」

ロイを部屋の外へ追いやって、ユーリは小さくため息をついた。
寝間着をぬぎ、ワンピースを頭からかぶる。顔を洗い、髪を軽く
ブラッシングして、鏡を見つめた。

不思議な偶然だとユーリは思った。ロイと出会った日の夢を見て、
目覚めたらロイがいた。

「ロイ、おまたせ」

「ううん、全然待ってないよ。ユーリ、君って…すごいね」

「…怒るよ」

「…ごめん」

肩をすぼめて謝るロイに、ユーリはそれ以上は言わなかった。

「どうしたの、何か用事があって来たんでしょ？」

「うん、ユーリに会いに」

「私に会いについて、もしかしてそれだけ？」

「うん、そうだけど」

「…せっかくの休みなんじゃないの？」

「うん。だからユーリに会いに来たんじゃないか」

「……………」

だから、の意味がわからない。ロイのことがわからなくなるのは、よくあることだった。やることを為すことが突飛で、自由なのである。

「なあ、ユーリ。旅行のこと聞いてくれた？」

「あ、その話なんだけど…」

声のトーンを若干落として言いかけた言葉は、控えめなノックの音に遮られた。

「はい、どうぞ」

ドアノブが音を立てて動き、ドアが開け放たれた。

「…お久しぶりです、ユーリさん」

「…！！…フォード、さん」

「アレン！久しぶりだなあ」

「ロイヴィア様、ご無沙汰しております」

ロイが訪れていたことはすでにメイドたちから聞いていたのだろう、フォードさんは驚くこともなく、ロイにむかって丁寧に頭を下げた。

「…その呼び方はやめろって、いつも言ってるだろ」

「そうでした、失礼いたしました。ロイ様」

「まだイマイチ堅苦しいんだよなあ…」

「それも、仕方ありません。私の身分故でございますよ」

うやうやしく頭を下げるフォードさんが気に食わないのか、ロイは眉間にしわを寄せて不機嫌な表情だった。

「それにしたって、なんだか他人行儀すぎるよ。もう十年近く付き合いになるって言うのにさ。兄弟も同然だって、オレは思ってるんだ」

「もったいないお言葉ですね。ですが、ありがたく受け取っておくことにしましょう」

「何だよ、その言い方。素直じゃないなあ」

そういう問題なのかと思わず口を挟みたくなるユーリだったが、そのまま聞き役に徹していることにした。

「あ、そうだ。ちょうどいい機会だからオレから聞くけど、休暇中にユーリと旅行に行こうって話をしてたんだ」

「旅行、ですか」

「ああ、旅行。といっても、ちょっとした海外旅行になるだろうけど。あまり長い間、休み取れないみたいだからな。許可なんか取らなくてもいいだろうって思ったんだけど、ユーリがどうしてもって聞かないんだよ」

ユーリを見つめるロイのからかうような視線を追うように、フォードさんもまた夕璃に視線を向けた。ユーリは何となく、フォードさんの瞳から逃れるように視線を自分の手元へと落とす。フォードさんはゆったりとした動きでユーリとロイの座るソファまで近寄ると、そのまま身を屈めるようにしてロイに尋ねる。

「少しお時間をいただけますか？」

「時間を？なぜ？」

もちろん許可が下りるものだと思っていたようで、フォードさんの答えにロイは眉をしかめた。

「はい。実は、先の予定がございまして。今日はそのことをユーリさんに伝えるために、戻ってきたのです」

「そうか：それなら、仕方ない」

「申し訳ありません」

「でも、絶対無理って決まったわけじゃないんだろ？」

「ええ、あくまで予定ですから」

「よし、それならまだ希望を捨てないでおくことにするよ」

「詳細が分かり次第、ご報告いたします」

そう言って一礼したフォードさんは、頭を上げるなりユーリに向かって微笑んでみせた。心臓が一瞬、ひととき大きな音を立てた。見透かされるようなその瞳がユーリはやはり苦手に思えて、つい俯いてしまう。膝の上に置かれた手のひらには、無意識に力が入ってしまった。

部屋を出て行こうとするフォードさんだったが、ドアノブに手をかけたところで何かを思い出したように足を止めた。

「：：そうでした。すっかり忘れていました」

そう言うなりフォードさんはユーリの座るソファのすぐ後ろまで来ると、胸ポケットから何やら小さな包みのようなものを取り出した。

「失礼いたします」

ひんやりとした何かがユーリの首筋を撫でた。それがフォードさ

んの指先だと気が付くのにそう時間はかからなかったが、突然のことにユーリは金縛りにあったかのように動けなくなってしまった。

「お土産です」

気が付けば胸元に輝く、深い蒼色の石。

「え…」

窓の外から差し込む陽の光を浴びて、控えめに光を反射させていた。

物言わぬ美しさの石。目も心も、すべてを奪われてしまいそうな、不思議な輝きを放っていた。

そう、まるで、彼の瞳のように。

「どうか、身に付けていて下さいね」

何も知らずに交わした“約束”の記憶が、ユーリの脳裏に呼び起されていく。

——私がそばにいて、貴女を守ります。

「ん？ サファイアか、アレン」

「その通りです」

「何でサファイアなんだよ。ユーリにはもっと、明るい色の宝石が似合うのに」

ロイの言葉にフォードさんはそうでしょうか、と首をかしげて見せる。

「良くお似合いだと思いますが」

そう言って微笑んだフォードさんの瞳は、読み取れない何かを映す深い蒼。

「それでは、私はこれで。ごゆっくりお過ごしください」

フォードさんは再び丁寧に一礼すると、部屋を出て行った。

「あーあ、もう決まったもんだと思ってたのにな、ユーリとの旅行」

ふてくされたように頬をむくれさせるロイを見つめながらも、ユーリは上の空だった。ドクンドクンと波打つ心臓にくわえて、額にはうっすらと汗までもが滲んでいた。

いやな予感ほど、当たってしまうもの。

止まっていた歯車が軋んで音を立てながら、再び動き始めたのだと、ユーリは漠然と感じていた。

From the bottom of despair. [3]

+

ロイの突然の訪問、そしてフォードさんとの久々の再会から一週間もたたないうちに、その便りはユーリの手元にやってきた。

「……明朝、迎えにまいります。それでは失礼いたします…」

手紙の内容は、こうだった。

ロイとの海外旅行は、やはり都合が良くないため許可できないということ。そのかわりフォードさんの出掛け先に、ユーリとロイを旅行もかねて連れていつてくれること。

そして、出発は明日の朝と書いてあった。

「…、大変」

ユーリは手紙を読み終えるなり立ち上がって、クローゼットの中にある大きめの旅行カバンを取り出した。

必要な服や下着を、ベッドのうえに放り投げる。

一年前であつたら想像もつかないような服の量に、ユーリは最近やっと慣れてきたところだった。

「お嬢様、ただいまご主人様からご連絡がありまして、外出の準備をしておくようにと…」

ノックも半ばに部屋に駆け込んできたメイドが、ユーリの部屋の様子を見て啞然とした。

「大丈夫です、私のところにも手紙で連絡が来ていましたから」

クローゼットから衣服を投げながら、ユーリは顔も向けずにいった。

「まあ、お嬢様、私がやりますわ」

「ごめんなさい。それじゃあ、お手伝いお願いしますか？」

ユーリの放り投げた洋服を綺麗にたたんでカバンにしまっていく。さすがというべきか、メイドの手際の良さにはユーリもただただ感心するばかりだった。

+

翌朝、ユーリは早くに目が覚めていた。

どこかへ旅行へ行くなんて、いったいどれくらいぶりだろう。フオードさんに連れられて孤児院を出た、あの時以来だろうか。

「……」

考えてはダメだと、何度言い聞かせているかわからない。

けれどユーリが何かを考えるたび、思い出されるのは一年前のあの時のことばかり。忘れてしまいたい、忘れなければいけない——どんなに願っても、忘れることができなかった。

——コンコン

「……はい」

やってきたのはメイドで、フォードさんが到着したとのことだった。

「わかりました、すぐに行きます」

荷物はすでにロビーに運んでもらったはずである、持ち物はハンドバッグだけで良い。

部屋を出る前に鏡の前に立って、もう一度、自分の身だしなみをチェックした。

どこか、不安げな表情のユーリが映る。

「準備はよろしいでしょうか？」

「…はい、大丈夫です」

——そう、大丈夫。

二人きりではない、ロイだって一緒にいる。

「ユーリさん。おはようございます」

「おはようございます、フォードさん」

「アレンと呼んでくださって構いませんよ」

やわらかくほほ笑みながら言うフォードさんの声は、とても穏やかだった。

「アレン、さん」

「はい」

「：ちよつと、慣れないです」

小さく呟けば、フォードさんは可笑しそうに笑った。

「私にとってユーリさんは、もう家族同然ですから。そのうち慣れてくださいれば結構ですよ」

——家族、フォードさんと？

思わぬ言葉に声を失い、ユーリはこくりと頷いただけだった。

車に乗り込み、メイドたちに見送られながらユーリ達は家を後にした。

フォードさんの家にやって来たユーリは、その広大な土地に目を丸くして驚いたことを覚えている。一級のホテル並み、それ以上の広さの邸宅に、計り知れないほどに広い庭。

手入れの行き届いた庭を散歩するのが、ユーリは好きだった。

ロイいわく、伯爵という地位につくフォードさんには相応の土地であるという。

広い庭を通り過ぎてやっと、車は公道へと出た。

「…昨夜はよく眠れましたか？ ユーリさん」

「はい」

肩を並べて話をするのは、久々のことだった。フォードさんの氣遣いに、一言だけで返事をする。

「ずいぶんと急な連絡になってしまいましたから…まあ、驚かせたかったという気持ちもあったのですが」

「お電話で、連絡をくだされば良かったのに」

「手紙というのも、なかなか良いものだと思いますか？」

そう言うフォードさんは、どこか悪戯っぽい雰囲気だった。

フォードさんらしい綺麗な字で綴られた手紙を思い浮べて、ユーリは無意識に小さく微笑んだ。

「ネックレス、付けてくださってるんですね」

「…あ、はい」

メイドが用意したワンピースに、合わせて用意されたアクセサリが他にあった。しかしユーリは、フォードさんからプレゼントされたサファイアのネックレスを選んだのだった。

「せっかく頂いたのだからと思って、付けてきました」

「そう言っていただけで、嬉しいです」

フォードさんは小さく笑って、ユーリの前髪をそっつ撫でた。

+

目的の場所にたどり着いたときには、すでに日が暮れてしまっていた。

ずいぶん長い時間を車の中で過ごしたユーリは車を降りるなり、腕を高く伸ばして固まってしまった身体をほぐした。

「申し訳ありません、長旅になってしまって」

「いえ…ごめんなさい」

フォードさんに見られていたことに気付いて、はしたない行動だったとユーリは肩をすばめた。

「お疲れでしょうね」

「平気です、少し眠っていましたから」

「そうでしたね、失礼ながら拝見させて頂きました。ぐっすりとお休みになられていましたよ」

「あんまり、からかわないでください…」

ずっと隣に座っていたのだ、見られていないはずがなかったが、ユーリは恥ずかしさに顔をうつむけた。

「さあ、まいりましょう」

フォードさんはうつむくユーリの肩をやんわりと抱くと、導くように歩き始めた。

ユーリたちの向かう先に門兵が二人立っていて、フォードさんの姿を確認するなり姿勢よく頭を下げた。

門兵によって開け放たれたドアから建物の中へとはいると、そこは外の暗さを忘れさせるほどの明るさだった。

フォードさんの邸宅でさえユーリにとっては気が遠くなるほどに広いのに、そこはそれ以上に広く豪華なロビーとなっていて、まるで別世界のような場所だった。

「綺麗…」

高さのある天井から、キラキラと輝いたシャンデリアが下がっている。

壁や床にいたるまで、美しい装飾がほどこされていた。どれもユーリがこれまで目にしたことはないものばかりで、一つ一つに目を奪われる。

この家のモチーフなのだろうか、不思議な紋様がいたるところに見られた。

「フォード様、特別室へご案内いたします」

いつのまにか燕尾服を身にまとった男性がそこにいて、ロビーの右奥にある階段へと誘導していく。

銀色に輝く階段の手すりにもまた、同じ紋様が彫られていた。

蔦^{ツタ}が絡まり合って円形を作り、花——だと思っていたものはどうやら違ったらしい。数枚の羽が、花開くように集まっているものだった。

綺麗だ、とユーリは思った。

この紋様が持つ意味を知るのは、もう少し後のことである。

From the bottom of despair. [4]

ロビーから右奥に続く階段を三階までのぼり、ふかふかの絨毯の敷かれた廊下を歩いて、ユーリたちは特別室へとたどり着いた。

執事に案内された部屋の扉を開いて見えた景色、それは真っ暗の闇だった。

「だーれだ!」

すぐ耳元で楽しそうな声が聞こえて、ユーリは突然のことに驚きながらもその名を答えた。

「ロイってば、もう…」

途端に視界に光が戻ってきて、ユーリは二度三度まばたきをする。眉をしかめて振り向けば、満面の笑みを浮かべた少年ロイがそこにいた。

「危ないでしょ、急にあんなこと」

びっくりしたんだから、と困った顔をして見せると、ロイは悪戯っぽく笑う。

「だったら大成功だね、驚かせることが狙いだったんだから」

「ロイヴィア様、ユーリさんが転んでお怪我でもされたら、どうなさるのですか」

やんわりとたしなめるフォードさんに、ロイは不満げに眉を寄せる。

「もちろん、転ぶ前に助けるさ」

幼さの残る顔で、胸に手を当てて紳士のような振る舞いをするロイ。ユーリは小さく吹き出した。

部屋にたどり着くまでの短い時間ではあったが、慣れない環境にユーリはすっかり気を張ってしまっていた。ロイの登場にいつもの日常が戻ってきたような気分になって、ユーリは幾分か気持ちが落ち着くのを感じたのだった。

「ユーリ、僕の部屋に案内するよ」

返事も聞かずにユーリの手を引くロイに、ユーリは戸惑いの眼差しをフォードさんに向ける。フォードさんはユーリの心を察したのか、頷いて、やわらかな笑みを浮かべた。

いってきます、という意味をこめて笑い返す。

「ロイ、ちゃんと付いていくから、そんなに引っ張らなくても大丈夫だよ」

「ん？」

ロイはとぼけたように笑って、ユーリの手を放そうとしなかった。

ロイの部屋は、最上階にあった。ユーリとロイは一階の乗り場からエレベーターに乗り、最上階まで上がった。

エレベーターは最上階以外の他の階にはとまらないらしく、ユーリの泊まる三階特別室はもちろん、全九階のうち八階までは階段を利用する他ないのだという。そのため客間や特別室などは四階までに集中しており、五階から上は調理室や洗濯室、メイド部屋といった従業員のみが立ち入るフロアになっている。と、ロイは詳しく説明をしてくれた。

「ようこそ、僕の部屋へ」

執事のようなロイの振る舞いは、まるでユーリをお姫さまか何かのように扱っているようで、ユーリは小さく笑った。

おかしくなって二人でひとしきり笑い、ソファに腰掛けたときにはすっかり息が切れてしまっていた。

「ロイの部屋、とっても広いね」

「そうかな。ここは別荘だからこのくらいだけど、本邸はもっと広いんだ」

「別荘、ロイの？」

どうりで、ロイはこの屋敷について詳しいわけだとユーリは納得した。

つまりロイは屋敷の持ち主でもあるわけで、最上階という好条件に与えられた広い部屋というのも頷ける。

「アレンから連絡があつたんだ、うちの別荘にユーリと一緒に遊びに来るって。それもほんの数日前にね。あまりにも急だったから、僕も驚いたよ」

「ロイとは後でおちあう予定だとフォードさんは言っていたけれど、こういうことだったんだね」

何といってもここはロイの別荘なのだ、主人がいない間にこの場所を訪れるのは失礼にあたるゆえ、この別荘にお邪魔することはすなわちロイとの再会を意味していたわけである。

「まさかロイの別荘にお泊りするだなんて、考えもしなかった」

メイドが音もなくあらわれて、てきぱきとお茶の準備をこなしていく。至れり尽くせりといった状態。

この屋敷に勤めるメイドや執事は、人数・質ともにフォードさんの屋敷にいる人たちよりもはるかに上回っている。

学校での振る舞いといい扱われ方といい、ロイは特別なのだと薄々感付いてはいた。ロイのお父様はきっと、フォードさんよりもずっと上の立場にある方——もしかしたら公爵様かもしれないと、ユーリは思った。

ずば抜けて才があり、異例の出世を遂げたという公爵様の噂は、ユーリも耳にしている。

「明日、今日みたいに良い天気だったら庭園を散歩しようよ。僕、案内する」

「庭園、私も見てみたいなあ」

到着時にはすでに日が暮れていたため、屋敷の外観や庭といった外の景色を見ていなかった。ロイの提案に二つ返事で頷く。きつと、春の時期に咲く花が見頃だろう。

「失礼いたします。ロゼル様、お食事の準備が整いました。お部屋

までお送りします」

メイドの声に、ユーリは自分がひどく空腹であることに気付く。

「ロイは一緒ではないのですか？」

「ロイヴィア様は別室にてお食事をとられます」

「そう…」

「僕はユーリと一緒に食事するよ」

「…えっ？」

何でもないふうに言ったロイに、ユーリもメイドも目を見開いた。

「ロイヴィア様、そのようなことは…」

「せっかく会えたんだ、食事くらい一緒にしたい。ユーリだってその方がいいだろ？」

ロイと一緒にの食事はいつだって楽しいし、久しぶりの再会であればなおさら、話に花が咲くことだろう。

「それはそうだけど、迷惑がかかるのでは？」

「大丈夫さ。みんなにも、そう伝えしてもらえろ？」

「…はい、かしこまりました」

ロイの言葉に押されるように、メイドは渋々と頷いた。振る舞いに気を配りながらも慌てた様子で部屋を出る彼女に、ユーリは申し訳なく思った。

前にもこんなことがあったような、と、ユーリはため息をついた。

ユーリと一緒に食事を済ませたロイは、ご満悦だった。ロイの部屋に戻ってから話題は尽きることなく、長期休暇が始まってからユーリに会えなくてつまらなかったこと、四日後に迫った旅行のことなど、色々な話をしてくれた。

穏やかだった空気を一変させたのは、飛び上がるほどの音を立てて開け放たれた扉。

「坊っちゃま！」

鬼のような形相で仁王立ちをした女性が、そこにいた。

「アレグラ！…どうして、アレグラがここにいるのさ？」

「私がないのを良いことに、随分と勝手な振る舞いをなさってたそうね！」

ロイの問い掛けに答える気はまったくないようで、怒り心頭といった様子でまくしたてる彼女——アレグラさん。ふくよかな体に柔らかな赤毛を頭のとっぺんに結いあげた、中年の女性。ちょうどユーリやロイの親ほどの年齢だろうか。

戸惑うユーリの存在もお構いなしに、アレグラの叱咤が飛ぶ。

「お客さまの食事にお邪魔するだなんて……失礼極まりない！品位に欠けますよ！」

「僕は、ユーリによかれと思って…」

「ええ、ええ。そうでしょうよ。いつものように、ろくに返事も聞かずにね！」

無邪気なところがあるロイの行動をものの見事に言い当てて、アレグラは荒々しく鼻で息をついた。

「あの、私はロイにとっても感謝しているんです。久しぶりにたくさんお喋りもできたし、迷惑だなんて思っていないません」

叱り付けられて小さくなってしまったロイが心配になり、ユーリ

はおずおずとフォローの言葉を入れた。

ギリリと光るアレグラの瞳が、ユーリを射止める。余計なことを言ってしまったのかもしれないと、ユーリは額に冷や汗がにじむのを感じた。

「……まあ」

アレグラはユーリの顔をしばらく凝視したのち、釣り上がっていた瞳を真ん丸にした。

「あなたはもしかして、ユーリちゃん？」

「…はい？」

相手の様子をうかがうような返事になってしまって、ユーリは失礼だったと口をつぐんだ。しかし次の瞬間、ユーリの体はその三倍もある大きな体に、すっぽりと包み込まれてしまっていた。

「まあまあ、あなたがあのユーリちゃん！もっと良く、顔を見せてちょうだいな」

グキ、という音が鳴りそうなほど、アレグラはユーリの顔を勢い良くつかんだ。彼女としては両頬に手を添えて軽く動かしたのだろうが、ユーリの首にはかなりの衝撃がきた。

きらきらと輝きのある瞳でユーリを見つめ、笑みをこぼす。

「坊っちゃんのお話に伺っていたとおり！珍しい茶色の髪に茶色の瞳、間違いないわ。それに、とても澄んだ目をしてらっしゃるもの！」

「よせって、アレグラ。ユーリが驚いて固まっちゃってるじゃないか」

ロイが慌ててユーリとアレグラを引き剥がし、その間に割って入った。

いったいどんな風にユーリについて話したのかはわからないが、どうやら相当買い被られてしまっているらしい。

「ほんとうに、可愛らしいお嬢さんだこと。坊っちゃまが夢中になっってしまうのも、無理ないわね」

「アレグラ！」

ロイの鋭い声に制されるも、アレグラはどこ吹く風だった。耳まで真っ赤になったロイを見て、にっこりと微笑む。

「明日、首都会議場にて催しがございますこと、お忘れではないでしようね？」

「……」

雰囲気を一変させたアレグラの言葉に、ロイは気まずそうに視線を泳がせた。

そういえばさっき、明日はユーリと庭を散歩する約束をしなかったか。矛盾した事実に関ロイの顔を見つめると、ロイは弱々しくため息をついた。

「…わかったよ、催しにはきちんと参加する」

「ええ、当然のことですわね」

すっかり落胆したロイは暗い表情のまま、ユーリに向かってごめん、と小さく呟いた。

アレグラが部屋を去ってから、ロイはすっかり落ち込んでしまっていた。

夕食前にかわした約束を果たせなくなってしまったことに、大きなショックを受け肩を落としていた。

「用事があったのなら、無理に誘ってくれなくても良かったのに」

ロイが多忙であるということは、ユーリも重々承知している。忙しい合間を縫って今日みたいに会いに来てくれることはとても嬉しかったし、それ以上に何を望むことがあるだろうか。

「それでも僕は、ユーリとの時間がほしかったんだ」

呟くロイの声音から、若干の不機嫌さがうかがえた。見ると、眉間にしわが寄せられている。

「催しなんて、所詮僕なんかが行くこうが行くまいが、何も変わらないんだよ。そうだろ？僕には権限も、権力もない」

そうだろ、と問われてもユーリに答えるすべはない。

「それでも、行かなければならないのでしょ？」

「……………」

「ロイの代わりに私が行くななんてことは、きっとできない。つまり明日の催しには、どんな理由であれ、ロイの存在が必要なんじゃないかな」

言葉の裏を返してしまえば、明日の催しに必要なのはロイの意見ではなく、ロイの存在。意見も求められず考えることも許されない、飾りのような存在だ。

人は考える葦であると、どこぞの偉人は言った。考えることを奪われた存在はもはや、人間ではない。

ロイ自身も、それをわかっているからこそ、頑なに拒むのだ。痛いくらいに伝わるロイの悲しみや悔しさに、ユーリも視線を落とす。

「ロイは、アレグラさんが大好きなんだね」

「…何でそうなるんだよ」

「だって何だかんだ言って、アレグラさんには逆らえないようだったから」

図星なのか、ロイは顔を赤く染めて視線を逃がした。今日のロイは、赤面することが多いなとユーリは思う。

「…アレグラはさ、僕の乳母なんだ。小さい頃から世話してもらってさ、何だか、逆らう気にもならなくて」

「ふうん」

「なっ、なんだよユーリ、笑うなよ!」

「だって」

何故だか、ユーリには分かる気がした。ロイの見せる太陽のような笑顔——それはアレグラさんが見せた、底抜けに明るい笑顔によく似ていた。

ユーリの心を救ってくれた、すべて。

「もう少し、話をしてみたかったな」

そう一人ごちると、ロイは不思議そうに首を傾げる。

「変なの。あんな賑やかなだけで一方的な人と、何を話したいっていうんだよ?」

「ロイの小さい頃の話、とか」

「それは絶対にやめてくれ!」

「嘘うそ、冗談」

笑って話を流しても、ロイの訝しむような視線がしばらく離れることはなかった。

From the bottom of despair. [5] (後書き)

〈訳〉絶望の底から

The world that will collapse.

The world that will collapse.

「さあさ、参りましょうユーリちゃん！」

「あ、はい…！」

ユーリは今、大股で歩く赤毛の女性の背中を、見失わぬようにとひたすらに追い掛けていた。

歩幅も歩く早さも違う彼女を追い掛けるのはひと苦勞なうえ、人だかりが容赦なくユーリの体を押し流していく。見失ってしまうのも、時間の問題だった。

「…ア…アレグラさんっ！」

次第に人波に紛れていく赤毛にむかって、夢中で呼び掛ける。

幸い声が届いたようで、アレグラは人をかき分けてユーリの腕をつかんだ。

「まあ、大丈夫？」

「すみません…」

「このあたりの街に来るのは、初めてだって言っていたものねえ。人だかりには慣れていないのね」

まるで幼い子供にするように、アレグラはユーリの手をしっかりと

と握った。冷たいような温かいような、不思議な体温を手のひらに感じる。

「さあ、これで大丈夫！」

にっこりと微笑まれて、ユーリはくすぐったいような気分だった。

なぜアレグラさんと街を歩くことになったかという、話は昨晚までさかのぼる。

ロイの参加する催しは、国家の重要な会議であるのだという。つまり国中から組織の中心となる人物が大勢集まるものであり、伯爵であるフォードさんもまた参加しなければならないのだ。

客人であるにもかかわらず寂しい思いをさせてしまうことを気に病んだロイは、信頼できる乳母であるアレグラに、ユーリの相手を頼んだのである。

快活で行動的なアレグラさんは、退屈しのぎには買い物に限ると、ユーリを首都の街へと連れ出したのであった。

「すごい人の数ですね」

昨日に引き続き馬車での移動であったため、馬車に慣れないユーリの体は早々に悲鳴を上げていた。しかし馬車を降りたとたんが始まった人波との戦いに、馬車での疲れなどはすっかり意識から吹き飛んでしまっていた。

「市場はいつだって人の波。とくにここは貴族階級よりも、商人階級や一般市民の出入りが多い場所だから、一際にぎわっているのよ」

アレグラさんいわく、市場を抜けた先にあるショッピングモール

まで行けば、人だかりもだいぶ納まるのだという。

「でも、市場の賑わいはこの国の潤いの証拠だわ。ぜひユーリちゃんにも見てほしいと思ったのよ！」

「はい、とっても素敵なことだと思います……少し、驚いたけれど」

「もみくちゃんにされながら街を歩くというのも、中々良いものだと
思わない？」

さすがアレグラさんと言うべきか、人波を気に負うことなく、ズンズンと進んでいく。アレグラさんの一歩はユーリにとっての二歩と同じ程で、自然と駆け足になってしまう。

そうしているうちにも人はまばらになっていき、やがてゆったりと歩くことができるほどになった。

「ここはね、主に貴族たちのような富裕階級が集まる場所なの」

広々とした通りに並ぶのは、ピカピカに磨き上げられたウインドウ。アクセサリーやドレスといった装飾品が綺麗にディスプレイされていて、どれも高価に見えた。

ユーリが今まで見たことのないような、きらびやかで可愛いドレス。思わず目を奪われる。

「ユーリちゃんも、やっぱり年頃の女の子なのねえ。ドレスは好き？」

「いえ、私……ドレスとかは着たことがなくって」

「まあ、そうだったの。そういえば、そうね……社交の場に出ている

のだったら、もっと前からユーリちゃんと出会っていたはずだもの」

「社交の場、ですか」

「ええ、そうよ。ユーリちゃんくらいの年頃なら、貴族間でのお茶会やパーティーに招待されても、おかしくないのに」

どうしてかしらと、アレグラさんは首を傾げる。

「…まあ、もしかして」

何かを思いついたのか、声を上げて、眉根を寄せた。渋い顔である。

「…アレンったら、ユーリちゃんを屋敷に閉じ込めておくつもりなのかしら？」

何を言いだすのかと思えば、物騒極まりない言葉がアレグラさんの口から発せられた。

「いくらユーリちゃんが可愛くて仕方がないからって、過保護にもほどがあるわよね！」

「決してそのようなことはないと思いますが…」

「昔から、変に執着心やら独占欲が強い子だったのよ。相変わらずなのねえ」

懐かしむように話すアレグラさんに、ユーリは浮かんだ疑問を投げ掛ける。

「幼い頃のフォードさんを、ご存じなのですか？」

アレグラさんは一瞬目をしばたいた後、吹き出すように笑いだした。

「アレグラさん……？」

何かが弾けたように笑い続ける彼女は、ユーリの声も届いていないようだ。ひとしきり笑い終えてから、やつのことで治まった。

「ごめんなさいね、あまりにも当たり前のことを聞かれてしまったものだから、つい」

「……？」

「私はね、お坊っちゃんだけの乳母であつたわけではないの。お坊っちゃんはもちろんのこと、アレンや、自分の子供たちも育てたのよ。みんな幼い頃から、兄弟同然に育ってきたわ」

そう言ったアレグラさんは、どこか誇らしげだった。手塩にかけて育てた子供たちが、今は一人前になって生活しているのだ。喜びは計り知れないものだろう。

「フォードさん……アレンさんは、いつだって私のことを氣遣つて、優しくしてくださいます。アレンさんにとってアレグラさんがとても大切な存在であるように、私にとってアレンさんは命の恩人なんです」

彼から与えられた居場所、彼から与えられた存在。

ユーリ・ロゼルという人間は、彼なくしては存在し得ない。

フォードさんは、とても素敵な方です。そう伝えたくて、心からあふれ出てきた言葉。

「あなたも一緒だわ、ユーリちゃん」

「…え？」

「あなたもあの子と…アレンと同じ、私の可愛い子供よ」

「アレグラさん…」

アレグラさんとユーリの手が、まだ繋がれたままだったことに気付く。冷たいような温かいような、やはり不思議に思える温度は、心地よくユーリの手を包む。

それ以上の温もりを心を感じ、体中が温かい気分になる。

「いつだって、私を頼ってくれてかまわないのよ？ユーリちゃん」

「はい、アレグラさん」

ユーリは、アレグラさんに心からの笑みを向けたのだった。

それから二人は、様々な店が立ち並ぶショッピングモールを、寄り道しながら歩いた。

ユーリが足を止めるのは綺麗な衣裳やさんであったり、可愛いキルトのぬいぐるみやさんであったりと、一般的に女の子の好む店が大方だった。

屋敷のなかにいるだけの生活よりは幾分か刺激になるだろうと、フォードさんを非難するかような冗談を言って、アレグラさんは笑った。

「あらまあ、こんなところまで来てしまったのね。そろそろ引き返しましょうか」

立ち並ぶ店が次第に閑散としたものになってきたころ、アレグラさんの言葉にユーリは立ち止まる。

道の先は、暗くさびれた雰囲気のある通りに繋がっているようだった。通りの入り口に、黒いマントをかぶった人影が、壁にもたれ掛かるようにしてたたずんでいた。浮浪者か何かだろうか。

「あの先には、何があるのですか？」

「あの先はね、旧市場へと繋がっているのよ」

「旧市場ですか？」

「ええ。先程通ってきたあな市場は、十年ほど前にセントリア広場に移転されたものなの。ここから見える細い通り…今はルイン通り

というのだけど、昔は雑貨や洋服などの露店が立ち並んだ、にぎやかな通りだったわ」

にぎやかな、という言葉とは程遠い。暗く、先へ進むことさえ憚ハバカられる道——人々に、忘れ去られた道。

「随分と廃れてしまったから、驚くのも無理ないわよね。ショッピングモールができた今となっては、仕方のないことだけれど」

「……」

「春が近いとはいえ、夕刻は冷えるわ。セントリア広場まで戻りましょう」

アレグラさんはそう言って歩きはじめたはずが、足音は数歩で止まる。ユーリはルイン通りを見つめ、立ち止まったままだった。先程まであった人影が、消えていた。

「ユーリちゃん？」

どうしたのと問われて我に返り、ユーリはアレグラさんのそばへ歩く。心配そうな表情を見せたアレグラさんに、ユーリは頬笑んで見せた。

「何でもありません、ごめんなさい」

アレグラさんの隣に並んで歩き始める。

ふと、背後から複数の足音が聞こえて、怪訝に思ったユーリが振り向いたときだった。

「——っ！」

布のようなものを口と鼻に押しつけられ、息が詰まった。すぐ近くで悲鳴が聞こえ、それがアレグラさんの声だということがわかった。

「ずらかれ！」

唸るような声を合図に、ユーリの体は俵か何かのように肩に担ぎ上げられた。

思考が鈍り、目の前がぐるんぐると渦巻いているかのようだった。走るたびに担ぎ上げられた体が揺れ、お腹を圧迫されて吐き気がこみ上げる。

遠退く意識のはしで、アレグラさんの悲痛な叫び声を聞いたのだった。

体の右半分から伝わる鈍い振動に、ユーリは目が覚めた。

それがエンジン音であることはすぐに理解できた。フォードさんと共に都市へ来てからというもの、まったく乗らなくなった自動車の音や揺れが懐かしくて、穏やかな気分になえた。

「…うっ…」

舗装のされていない道を通っているのか、ガタガタという揺れが

体を揺さ振った。石に乗り上げたらしく、ユーリの体はずんで頭が叩きつけられた。

走り続ける車で横になったまま、頭の鈍痛に歯を食い縛って耐えた。それまでぼんやりとしていた意識が、次第にはっきりとしてくる。

「……」

目を開けば、土臭い毛布のようなものが体に覆いかぶさっていた。手を伸ばして毛布をのけようとしたが、できなかった。

気付けば後ろに回された両手首が、ロープのようなものできつく縛られている。肘を使って体を起こすと、毛布が落ちて視界がひらけた。

あたりの景色を見回すと、そこは全く知らない場所だった。オレンジ色に染まる空は、さらわれてからそれほど時間が経過していないことを示していた。一時間、といったところだろうか。

——どうしよう。

どうにかして、この状況から脱しなければ。アレグラさんが心配しているかもしれない。

あのあとアレグラさんは、危害を加えられたりしていないだろうか？

心の中には暗雲だけがたちこめて、どうしようもなく不安になってしまう。

ブレーキが錆付いたような甲高い音を立てて、車は速度を落とすて止まった。ドアが開く音、複数の足音が聞こえて、ユーリはとっさに息を潜めた。

「依頼主は20前後が希望だって話なのによ。ありゃ、どうみても

ガキだぜ。どうする？」

「使い物になるかならないかは、向こうの判断にまかせるさ。もしいらねえってんなら、遊女屋にでも売り付けりゃいい。ここいらじや珍しい茶髪に茶眼、なかなかの上玉だ」

「ちっとくれえなら、俺らで遊んでからでもいいんじゃないか？」

「馬鹿。手つきとなりゃ、値打ちだって下がっちまうんだよ」

下劣な会話に眉をしかめ、込み上げる吐き気をこらえる。人をモノとしか扱わない物言いに、ユーリは腸がハラワタふつつと煮えたくるのを感じた。

「おい、それくらいにしろ。まずは腹ごしらえだ」

低い声、リーダー格の人間なのだろう。騒つく男たちを一言で黙らせると、砂を踏む乾いた音とともに男たちは遠ざかっていった。

「っ…はあ…」

無意識に止めていた息を吐き出し、ばくばくと高鳴る心音を全身で感じた。ひとまず窮地を脱したようである。

あたりは闇が濃くなりつつあった。迷っている暇などない。

毛布を除けて立ち上がり、手の使えない不自由な状態ながらも、車の荷台から飛び降りた。

「いたっ…」

うまくバランスがとれず、膝から崩れるように着地した。膝がす

りむけて血がにじんだが、かまわずに立ち上がる。車体の影から顔半分だけをのぞかせて、男たちの姿が見えないか探った。人影はひとつもない。

ユーリは、必死の思いで駆け出した。

しばらくは、人が二人すれ違うことが精一杯なほどに狭い路地を走った。人の気配はなく、一匹の猫とすれ違った以外は生きものの姿は見られなかった。

向かう先に、明かりが灯っているのが見えた。人が往来している様子もうかがえる。

ユーリは走る速度を緩めて、荒い息を静めようと深呼吸をした。いつどこで、あの男たち一味に遭遇するかわからない。できるだけ目立たないようにしなければ。

「そうだ、マフラー」

ふと、防寒用にとメイドが着せてくれた紺色のマフラーに目をやる。

この都市では珍しく、人目を引いてしまうらしい茶色の髪。これをどうにかして隠さなければ、人通りの多い道を歩くのは危険すぎる。

すぐそばに、有刺鉄線があるのに気付く。ユーリは鉄線に背を向け、手首をあてがった。

「…いっ…！」

鋭い痛みが手首から肘のあたりに走り、生暖かいものが伝う感触がした。手首を動かすが、拘束は解かれないまま。

ユーリはもう一度、先程よりも強い力で、手首を擦り付けた。

「ぐ…あぁっ！」

痛みと同時に手首の拘束が解かれて、ユーリはそのまま地面に突っ伏した。頭がおかしくなるのではないかと思えるほどの痛みに、体を丸めるようにうずくまる。

痛みに耐えながら上半身を起こし、マフラー首から外して手首の血を拭いた。血の付いたほうを裏側にして、頭と顔を隠すように巻く。これで、髪が目立って見つかってしまうことはなくなる。

「……………」

ズクズクと疼く傷跡に顔を歪めながらも、ユーリは立ち上がった。人通りの多い場所へ出るのは危険であるが、地理に詳しくないユーリが帰る方法を知るためには、人に尋ねる他ないのだ。

夕刻、闇に侵食されつつある街にたった一人、ボロボロの体を引きずるようにして足を踏み入れたのだった。

The world that will collapse. [3]

そこは、大きく開けた広場だった。行き交う人々は皆どこか興奮気味に目を輝かせていて、話の絶えない様子で歩いていた。

異様な雰囲気の本体は、すぐにわかった。石造りの建物の壁に何十枚と貼られた、イラスト入りのチラシ。そこには、興行団・トランジェという名が描かれていた。

「もうすぐね、楽しみだわ!」

「この街に舞台がくるのは、もう何カ月ぶりだろうね?」

「かの有名なトランジェの舞台がこの目で見られるなんて…」

「舞台、舞台だよ!一緒に酒やつまみはいかが?」

人々の盛り上がりはさまざまだった。有名な興行団とやらを見ると恍惚とする人、盛り上がりには便乗して商売をする人もいた。着飾った富裕層らしき人間もいれば、そうでない一般階級の人々もたくさんいた。

チラシにもう一度目をむけて、立ち止まる。

「興行団・トランジェ、久方ぶりに帰還。団長トム・オーミ、その他すぐれた人間たちによる舞台で皆様を魅了しましょう、…」

不思議なチラシだと、ユーリは思った。入場料だとかチケットだとか、そういった内容の記載が一切なかった。

中心に大きくかかれた髭面ヒゲツラの男性は、団長のトム・オーミで間違

いないだろう。その他に子役や俳優たちの似顔絵も描かれていたが、どれも団長のそれよりかなり小さかった。

そんな中で、団長と同等に大きく描かれている人物。それは、切れ長の射ぬくような瞳を持った女性の似顔絵。

「おい、始まったみたいだぞ！」

「大変！急がなければ…」

広場が一層騒がしくなったかと思えば、広場の中心へと走る人々が目の前を通りすぎる。

走り去る男に肩をぶつけられて、ユーリの体はバランスを崩して傾いた。

「……！」

よろけた拍子に人波に吞まれて、そのまま広場の中心に流されていく。何度も何度も人とぶつかり、そのたびによろめいては波に流され。

逃れられないままに、気付いたときには仮設舞台のすぐ目の前で押し出されてしまった。

目を上げればそこは、現実ではないおぼろげな世界。

「……ああ、太陽の神よ。罪深き私をどうかお許してください。私は、この手に月の夜の姫君をと願ってしまったのだ」

金色の髪を肩のあたりにまで伸ばした美しい青年が、憂いに帯びた瞳を空に向け、ひざまずいていた。

周囲は青年の息遣いさえも聞きとれるほどに静まり返っていた。ほう、という女性たちの恍惚としたため息が沈黙の広場に響く。

「相交わることの無き姫君を、渴望してしまう……我が罪は、重く、残酷なものなのだ……」

——欲にまみれ汚れた心にどうか、月の姫君の救いの手を。我が餓えと渴きを癒すのはもはや、月の夜の姫君をこの手に、抱くことだけ。

恋焦がれ、叶わぬ想い。禁じられた恋に心を縛られてしまった王子様。

浮き世離れた美しさを放つ青年は、まるでお伽話の世界のごとく美しくはかなげに、それを演じていた。

「……漆黒の瞳に今再び我が姿を映すことができるのなら、私は月の神に我が身を捧げよう。大罪を背負うことも厭わ^{いと}ない、太陽の神に誓った忠誠を断ち切らん」

欲にまみれて闇を映す、青年の瞳。金色の瞳が、ギラリと妖しげな色を浮かべた瞬間。

「――！」

ユーリは息を呑んだ。

「……………月の夜の、姫君！」

音もなく現われた——それは闇。

漆黒の瞳、同色の長く艶やかな髪。いかなるものも闇へと引きずり込む侵食。まさに、月の夜の支配者。

姫君のまとった月の羽衣が、風になびいてシャランと揺れた。それに乗じるかのように、姫君は舞を舞う。

誰もがその目を心を、呼吸さえも、奪い取られていた。

ユーリも、その場にいた人々と同様に、闇に取り付かれてしまっていた。自分自身に降り掛かろうとしていた最悪の事態に、身構えるどころか気付くことさえもなかった。

破滅への足音が一步、また一步と忍び寄ってきていることも知らず。

人波に押されてマフラーを無くし、特徴的な茶髪を人々の前にさらしてしまっていたことに、ユーリは全く気付いていなかった。

「…いたぞ！」

唸るような声が、広場に響き渡った。続けざまに人々の叫び声が聞こえ、ユーリを含め舞台に釘づけになっていた観客たちは、怪訝な顔で背後の喧騒をながめた。

悲鳴や罵声が飛びかい、広場は騒然としていた。ユーリの視界に、横倒しに去れる人々の姿が映る。倒れた人をためらいなく踏み付けて現われた、黒いマントの男。その後ろに、同様の姿見をした複数の人影があった。

ユーリの姿を見て、男の口は半月のように弧を描いた。

「…あ…ああ…っ！」

口からこぼれ出る、叫びとも呻きともとれる声——言葉にならない絶叫。

恐怖に、全身が震えた。

「さあ追え！おまえら、絶対に逃がすんじゃねえぞ！」

激昂さながらに叫ぶ男の背後から、黒装束の人影が何人も現われた。

近くにいる人間をなぎ倒し、ためらいなく踏み付けてユーリに迫る。怒声、悲鳴、絶叫。

何百もの感情の渦の中でユーリは、ただ立ちすくむことしかできなかった。

——私のせいで、また。

「――馬鹿！」

離れかけていた意識が、引き戻された。

全身に強い引力を感じ、ぼやけていた視界が現実を映し出す。どこか遠くに感じていた音が、すぐ近くのものであったことを知った。気付いたときにはユーリは何者かに手を引かれ、人混みの中を駆け抜けていた。

見ず知らずの人間に手首を掴まれたまま、ユーリは建物と建物の間のせまい裏路地を走り抜けていた。

どれくらい走ったのだろうか。辺りは完全に闇と化し、空には星が瞬きはじめていた。

そろそろ体力の限界だった。息も上がり、掴まれたままの手首からは止まりかけていたはずの血が再びたたっている。失血からか、ユーリの手は感覚すら失ってしまっていた。

「…いった、い…あなたは…誰…？」

走り続けて意識も朦朧とした状態であっても、ユーリは問い掛けずにはいられなかった。

「…どう…して、助けたの…？」

ユーリの声が聞こえていたかどうかは、定かではなかった。しかし次第に走る速度は緩やかになり、早足から徒歩になり、やがて止まった。

黒く長い髪を持つ、ユーリよりもいくぶんか背の高い女性——ユーリはここへきてやっと、前を走っていた人物の姿をはっきりと認識した。

「あの…手を、放してもらえませんか…？」

腕からしたたる血は、手首をつかむ彼女の白い指先を真っ赤に染め上げていた。これ以上触れさせるのは気が引けて、ユーリは彼女の背中に問いかける。

ユーリの言葉に彼女は手を離してくれるのだと思いきや、手首は放されるどころか、より強く握り締められたのである。

刺すような痛みが腕を貫き、突然のことにユーリは声にならない悲鳴を上げた。

「何のためにここへ来た」

振り向きざまに言い捨てられた、威圧的な言葉。彼女はユーリを睨み付けるかのように、その闇色の瞳を細めていた。

彼女の一方的な言葉を咎めるよりも、ユーリは驚きに目を見開いた。

目の前にいる人物を、見間違うはずもない。

先程までユーリはこの人物を、穴が開くのではないかと言うほどに見つめていた——見とれていたのだ。

それだけではない。

月の夜の姫君である、彼女の薄く綺麗な唇からこぼれたその声は、低く、少し擦れたようなハスキーボイスだった。

「あなた、まさか…男…？」

「だったら、どうする」

「どうする、って…」

太陽の神の王子だけにとどまらず、何人もの人間の心を取りこに

してしまった、麗しの姫君。

その正体は、漆黒の闇と偽りをまとった、美青年だった。

「なぜ…?」

「見目に囚われるのは、愚かな人間の定なのかな」

姫君の姿形をした青年は、それは美しく、世の常を嘲笑う。握り締めていたユーリの手首を、無造作に放した。

彼の手にまで伝っていた赤い鮮血が、同時に地面に染みを作る。

「アンタは、俺の手を振り払おうともせずに、のこのこと付いてきたわけだ。それは、俺が女だと思ったから?」

違うと言いたいのに、声は喉に引っ掛かって、息の抜けるような音をたてただけだった。

「男だから危険だとか、女だから安心だとか。この街じゃそんなことは通用しない。この世界に存在するものは、欲にまみれた人間ばかりだ。男も、女もな」

「……………」

——ならば何故、あなたは私を助けてくれたの?

その言葉を、ユーリは飲み込んだ。別の言葉を探して、きちんとした声にして問い掛ける。

「……さっきのは、一体何だったの?」

「人売り」

「人売り…？」

「身寄りの無い子供を奴隷として売ったりする連中。器量の良い女なんかは、いい売り物になる。この辺りじゃそんなこと、日常的だ」

それ以上、深く問うことはしなかった。

足がふらつき、近くの壁に寄りかかる。走り疲れたからでも、自分の身に起きた出来事を嘆いたわけでもない。

そんなことが日常的に行われていたのだという事実が、悲しかった。何も知らなかった自分が情けなく思えた。

今、自分がこのように無事でいることに驚きさえ感じた——完全に無事だとは、決して言えないけれど。

「わかっただろ。この街は、アンタみたいな金持ちの令嬢が来るとこじゃないんだよ」

好き好んでこんな事態に巻き込まれたわけじゃない。口から出かけた言葉は喉元まで来てピタリと止まり、再び胃の中へと落ちていく。

わかっている。ユーリは、何も知らなかった。知らなすぎた。

故に、軽率であったのだ。

社会に存在する闇、人売りという存在。物珍しい容姿をしたユーリが彼らのターゲットになりうるということは、知識さえあれば十分に察しが付いたはずだった。

何も知らずに過ごしてきた。

そうして生きてこれたのは、それはつまり——いつだってユーリは、誰かの庇護下にあったということを意味していた。

わかってる。ユーリは自分の身を守る力さえないということも。誰かに守られていなければ、生きていくことなど叶わない。

——一年前、痛いくらいに突き付けられた事実。

結局ユーリは、あの頃と少しも変わっていない。

「…あなたは…一人きりで、生きているの？」

自然に口から出てしまった言葉。

自分の身は自分で守り、舞台に立つことによって生きるためのお金を手に入れる。自立した彼女——もとい彼の姿に、尊敬と羨望の気持ちがあったのかもしれない。

一体どうしたら、過去から抜け出すことができる？

——…一人じゃない、今も昔もね……

「……！」

——…私はずっと、傍にいたのだから……

声——姿無き、声。以前にも体験した、全身を駆け抜ける恐怖。声は、まるで四方八方至る所から聞こえてきているようにも、ユーリ自身の頭の中から響いてきているようにも思える。誘うように優しいような声音が、恐ろしくてたまらなかった。

「……！」

叫びかけたところで突然口をふさがれて、ユーリはさらにパニックになる。真っ白になる頭のなかに、声が届いた。

「騒ぐなよ。人が来る」

耳元で聞こえた、落ち着き払ったその声に、ユーリは次第に我を取り戻していった。ユーリがおとなしくなった所で、口をふさいでいた手のひらが離れる。

ゆっくりと深呼吸をして、波打つ心臓を落ち着かせる。

「アンタ、今の声は何だかわかるか？」

ユーリが黙ったまま首を横に振ると、彼はそうだろうかと呟いて小さくため息をついた。

「これは、死神の声」

紅を引いた青年の唇が、ゆっくりと弧を描く。

「……そう言ったら、アンタどうする？」

どうしようもないほど信じがたい言葉をさらりと言った彼が浮かべるのは、闇の影をまとった美しい微笑みの表情。

彼の双眸と、ぶつかる視線。

深い漆黒の瞳に、吸い寄せられる。

——一瞬、呼吸を忘れてしまった。いくつもの鍵をかけてしまい込んでいた記憶、強すぎる既視感。

「私…あなたを知ってる？」

戸惑う心が、妙な問い掛けとなって口からこぼれ出る。言葉をあれこれ考える余裕なんて、少しもなかった。

The world that will collapse. [5]

心臓が破裂しそうなほどに、どくどくと脈を打つ。

ユーリの視線から逃れるように、青年は闇色の瞳を伏せた。

「……さあな」

吐き捨てるような言葉と共に、ユーリに背を向ける。忌々しいとでも言いたげな、そんな態度だった。

そのまま歩き去ろうとする青年の左の手首を、ユーリはとっさに掴んでいた。突飛であり強引すぎるその行動に、何よりもユーリ自身が驚いてしまった。

「…!…、何」

青年の声に、わずかながら戸惑いの色が浮かんだ。拒むように握り締められた拳を有無も言わずに解いて、手のひらをじっと見つめた。

「…やっぱり」

透き通るように白い肌のうえには、一筋の傷跡が残っていた。憶測が、真実となる。

「あの時……ナイフを握りしめて、できた傷。違う？」

突然ユーリの目の前に現われて、喉元にナイフを突き付けてきた

少年。

彼があの中の少年であると、ユーリは舞台でその姿を見たときから気付いていたのかもしれない。だからこそあんなにも目を奪われ、引き付けられるような何かを感じたのだ。

聞こえてきた不可思議な声のことも、すべて説明がつく。

「…だとしたら、何？」

仮にそうだとしても、アンタにはもう何の関係もないのに」

感情の欠落した、絶対零度の声音。紡がれる言葉は、ユーリを追い詰めていく。

「自分はある時ターゲットにされた人間だって、バラして何になる？」

「そんなつもりは…！」

「同じだろ。軽率で浅はかで、愚かな行動だな」

全身が、かなしばりにあったように動かなくなる。

「……わざわざ、殺されに来たんだ？」

青年の瞳は、ユーリが存在そのものを嘲笑っているかのようにだった。

「——っ」

彼はユーリに、声を上げる間も与えなかった。一年前と何ら変わらない素早い身のこなしで、彼はユーリの背後にまわって片手で首

を押さえ付けていた。

「本当に、馬鹿だろアンタ」

どこか悲しそうにも思える声が、すぐ耳元で囁いた。

「…さ…ない、から」

「は？」

「あなたは…殺さない…」

飛びそうな意識の中で訴えた言葉に、青年の手の力が緩んだ。体が支えを失い、ユーリはそのまま地面にへたり込んだ。体激しく咳き込む。

「…気は確かか？」

「愚かだって笑いたいなら…好きにすれば良い。でも私は、貴方を信じたかったから…信じたの」

「……アンタ、言いようのないくらい馬鹿」

彼は呆れ果てたような苦々しい表情を浮かべていて、ユーリはその表立った感情表現に目を奪われる。彼の、こんなふうに関中に浮かぶ感情を目にしたのは、初めてだった。

「一体、何を信じる？ 殺しないと、どうして断言できる」

「私を殺す気があったのなら、わざわざ助ける必要なんかなかった」

「自分の手で、殺すことに意味があるんだとしたら？」

「そうかもしれない。

でも、一年前に聞き出せなかった情報をまだ探しているのだとしたら……あなた達は、私を殺すことはできない」

ユーリの命は今、ユーリの中にあるかもしれない“記憶”や“情報”によって繋ぎ止められているにすぎないのだから。

名前を奪われ、居場所を奪われてしまったユーリは、その残酷な運命に身を委ねる他ない。

「それにもう、いいかなって」

スカートについた砂埃を払いながら、ユーリは立ち上がる。

「私が生きるってことは、誰かが死ぬってことと同じだから」

残酷な記憶ほど強く根深く、記憶に植え付けられている。目の前で死んでいった人々の断末魔の叫び声が、耳にこびりついて離れない。

父親との思い出も、もうほとんど無くなってしまった。

「これ以上は誰も、巻き込みたくない。自分のために他の誰かが傷つくのは……もう嫌だから」

「どうでもいいよ。アンタが死のうが生きようが」

彼の口から紡がれるのは、感情も何もない言葉。おかしいことにそんな言動が、なんとも彼らしいと感じてしまった。

「この道を通つすぐ抜ければ、アンタの住む世界だ」

「……」

「用があつても無くても、ここへは二度と来るな」

ユーリの命なんてどうでもいいと、彼は確かにそう言った。しかしユーリを救い、今だってユーリをもとの居場所へ、生きるための世界へと導いている。

この世界はいつだって、矛盾だらけだ。

「私、ユーリ」

立ち去ろうとした背中にそう叫ぶと、彼は足を止めた。振り向かない。

「ユーリ・ロゼル。あなたの名前は？」

顔だけをこちらに向けた彼は、わずかに目を細めたように思えた。^{イブカ}訝しむかのようなその表情はどこか女性的で、艶っぽくみえた。

「聞いて何になる？」

「知りたいから、聞いたの。理由は充分でしょう？ 相手が名乗ったんだから、名乗るのが筋」

「…押し付けがましい奴」

「何とでも言うて」

「名乗られなくても、名前くらい知ってる。櫻木夕璃」

「…え？」

記憶の奥にしまい込んでいた単語。一年前に捨てた、ユーリの本当の名前。

「ユーリ・ロゼル、か。あいつが付けたのか？」

彼の言うあいつがフォードさんのことを指しているのだと、ユーリはすぐに理解した。言葉に、憎しみに似た感情が含まれていた。返事をせずに唇を引き結ぶと、彼は嘲るように笑った。

「凶星？わかりやすい奴」

「…私はユーリ・ロゼル。櫻木夕璃は、もういない」

ほとんど自分自身に言い聞かせたような言葉だった。

「へえ…本当に、そう思ってたの？」

「…？」

「俺の知っているあんたは、櫻木夕璃以外の誰でもないのに？」

その問いかけは鋭い刺をまもっていて、ユーリの胸に突き刺さった。胸をえぐられるような痛みに下唇を噛む。

「…まあ、どうでもいいけど」

「何、それ…」

惑わされる。心がざわざわと音を立てていて、騒がしいとさえ思えた。

「水無月」

ポツリと呟かれたのは、その一言だけ。

「覚えてくれなくても構わない。
もう二度と、会わないだろうから」

それから、あつという間だった。ユーリが何かをいう前に、彼は背を向けて歩き始めていた。

そのまま彼は、もと居た闇の街へと消えていったのだった。

+

「…ユーリっ！」

ロイは屋敷に帰るなり、蒼白な顔を浮かべてユーリのもとへとやってきた。

「ロイ、おかえり」

「おかえり、じゃないよ。傷は平気？」

誰にやられたのかわかったのか？ 一体何のためにこんなこと…」

「お坊っちゃま！」

ユーリちゃんは安静が必要なのです、これ以上に騒ぐとつまみだしますよ！」

「……ごめん」

アレグラさんにピシヤリと怒られて、申し訳なさそうに肩をすばめるロイ。

ユーリは小さな声で、大丈夫だよと伝えた。

青年との不思議な再会を果たした後、彼に導かれてたどり着いたのは、昼間にアレグラさんと一緒に歩いたショッピングモールだった。

とりあえず市場のあるセントリア広場まで戻ろうと歩いていたユ

ーリは、アレグラさんの通報で捜索にあたっていた警備隊に保護されて、今に至るのであった。

「それにしても、大変だったね：ユーリ」

「うん：まあ。

珍しい髪色ってことで、まさかこんなことになったちゃうなんて思わなかった」

正直、警備隊に保護されてからの時間が、ユーリにとっては最も苦痛だった。

傷の手当てもしないままに誘拐犯の特徴やら目的やらを問いただしてくるものだから、すっかり困憊コンバイしてしまった。

アレグラさんが鬼のような形相でその事情聴取に割り込んできてくれていなかったら、ユーリは未だ休むこともできずに、保護と称した尋問を受けていたことだろう。

困ったように笑ってみせると、なぜかロイの表情は苦渋に歪む。

「…ごめん。僕の配慮が足らなかったせいで、こんなことになったんだ」

「どうして？ ロイは関係ないよ、私の注意が足らなかったただけだから」

ロイは何も言わずにユーリの右の手を取って、包み込むように握った。ぬくもりが、心地よい。

ロイの後ろに見えるドアがゆっくりと開いて、フォードさんが姿を現した。心なしか、その表情は青いように見える。

「フォードさん…？」

いつもと違ったその様子に、ユーリはフォードさんの碧い瞳をじっと見つめてその名を呼んだ。

フォードさんは答えず、ユーリの寝ている医務用ベッドのすぐ横まで来て、ユーリの顔を見つめたまま。

「ごめんなさい。迷惑をかけてしまった」

意図的では決していないものの、厄介ごとに巻き込まれてしまった責任はユーリにも少なからずある。

そう思って謝ると、フォードさんは寝ているユーリの額に手をのせて、ゆっくりと撫でた。

「……………本当に、貴女が無事で良かった」

いつもとは違う声のような、そんな気がした。

切ない色を乗せた碧い瞳が、真っ直ぐにユーリの目を見つめ、やがて包帯の巻かれた腕に移る。

一瞬苦しように表情を浮かべて、フォードさんは小さく問いかけてきた。

「怪我を、されたのですね」

「…あ、はい。これは、実は自分でしてしまったことなんです」

ロープで縛られた腕を自由にしようと、ユーリがその際に取りった行動を話して聞かせた。

話が進むにつれて、ロイの顔色は蒼白になっていく。すべて話し終えると、ロイはすっかり真っ青になってしまっていた。

「ユーリ、君ってば…何てことを…」

「そうしなければ、逃げられないと思ったの。それに、もう大丈夫です。」

出血のわりには傷は深くないし、きちんと消毒もしていただきました」

金属から感染する可能性がある病気については、すでに消毒したことで解決済みだった。

もう止血も済んでいたし、消毒さえしてもらえばユーリ自身、なにも心配することはなかった。

しかし二人はというと、そう簡単に安心できるものではないようで、心配している気持ちがありありと見て取れた。

「……フォードさん、ロイ。私は、大丈夫です」

二人に心配をかけたままでありたくない、安心してほしいという一心だった。

それぞれの目を見つめながら、もう一度はつきりと言う。

「私は大丈夫ですから。」

お願いだから……そんな顔はしないでください」

ロイに握られた手を握り返し、フォードさんの瞳を見つめて、二人に言い聞かせるように。

二人がユーリを大切に思っていて心配してくれるのと同じように、ユーリもまた二人に悲しそうな顔をしてほしくはなかった。

「こんな傷、すぐに治っちゃいます。ね、ロイ」

「え？…何でそこで僕に話を振るのさ？」

治ってほしいけど僕は医者じゃないからわからない、とロイは困り切ったような顔をした。

それがおかしくて、ユーリはつい吹き出してしまう。つられたように、ロイも笑った。

いつもとかわらない雰囲気、ユーリの心は和んだ。

「はい、はい！そこまでにしてください。

ユーリちゃんは、そろそろ休まなくてはなりませんのよ」

ユーリの身の回りの世話をテキパキをこなしていたアレグラさんが、会話を中断させた。

ロイは惜しむような顔をしながらも、アレグラさんには逆らえずに、おやすみと言って部屋を出ていった。

フォードさんというと、ユーリの額を優しく撫でたままそばを離れようとしなかった。

「アレン、貴方も疲れているはずよ？」

今日は部屋に戻って、ゆっくりお休みなさいな」

まるで駄々っ子をあやす母のような声だと、ユーリは思った。聞こえているのかいないのか、フォードさんは動こうとしない。

「…アレン」

少し強い口調で名を呼ばれたアレンさんは、ほとんど聞こえない

くらいに小さくため息をついた。

「わかっています、すみません」

額を撫でていた手のひらの温もりが、髪の毛を撫でるように動く。ゆっくりと近づいてくるフォードさんの碧い瞳に、ユーリは囚われてしまったかのように動けなくなる。

フォードさんはそのまま、ユーリの額にキスを落とした。

「……」

突然のことに、言葉を失った。思考が停止して何も考えられなくなる。

「一つだけ、教えてください」

肯定の意味で、一つ頷く。

「貴方を襲った人間は、黒装束の集団でしたか？」

その質問にさえも、頷いてみせるだけで精一杯だった。

「…おやすみなさい、ユーリさん。

良い夢を」

一年前に初めて出会った時から、向けられる優しさは何らかかわらない。

しかし、何かが違う。

一年前には見えなかった何かに、この時初めて、触れたような気がした。

「…ごめんなさいね、逆に心配させてしまったわよね？」

フォードさんが出ていったドアを、考え事をしながら眺めていたユーリに、アレグラさんが困ったような笑みを浮かべて言った。

「昔から、少しも変わっていないわね。」

大事なものを奪われたり傷つけられると、どうしていいのか、わからなくなってしまうのよ」

アレグラさんの表情に、ふと影が落ちる。

「…複雑な感情が、狂気になったりすることもあったわ」

——失う恐怖が、狂気へと。

ドクドクと心臓が波打って、握りこんだ手のひらに汗がにじんだ。

その感情を、ユーリは知っている。

「でも、あの子は変わったわ…あなたのおかげね、ユーリちゃん。あの子があんなに感情を表に出したのって、初めてだもの」

一変して、アレグラさんは穏やかな表情になる。

ユーリの内側に渦巻いていた暗い何かが、すっと消えた。

「よっぽど、貴女が大切なのね」

恐怖とともに存在する狂気を、打ち消してしまうほどに。
——それは愛か、狂愛か。

The world that will collapse. [6] (後書き

〈訳〉 崩壊する世界

D e s i r e o f b o t h p a r t i e s .

D e s i r e o f b o t h p a r t i e s .

都市から離れた場所に位置する、廃れた街。旧市場と呼ばれたそれは、今はすでに賑わいを失い、人々に忘れ去られようとしていた。今回の公演にそんな場所が選ばれたのは、団長トム・オーミの単なる気分だろう。

興行団トランジェに入団してからというもの、無月は国中を点々とする生活を送っていた。

決して一ヶ所に留まることはせず、どこに移動するかは、いつだって団長の気の向くまま。

団員はそれに文句も言わずに付いていく。

一ヶ所に留まりたいと思えるほど思い入れのある場所など、無月にはなかった。

生まれたときにはすでに両親すらおらず、知り合いもいない。

思い入れるほどの出会いなど、もちろん無い。

今回だって、そのはずだった。

無月の予想は見事にはずれることとなった——もはや出会うはずのない人物が、そこにいたのだ。

——懐かしい。あの声、あの絶望……——

——…あの娘はあの頃と、少しも変わってはいなかった……——

舞台の上でその姿を見つけたとき、それがあの少女だと理解するのに時間はかからなかった。自分でも、驚いてしまうほどに。

まさか、こんなところで会うことになるうとは。

彼女が襲われそうになったあの時、意志とは関係なしに、体が動いていた。

彼女は追われていたのだ。最近、裏の社会で噂されていた“黒装束”。彼らが人をさらう目的を、無月は知っていた。

記憶を蘇らせるのは、自分の意志か。はたまた死神の“悪戯”か。

思い起こされるのは、一年ほど前。

当初の目的であった“少女の記憶”から一転、ボスは無月に特別施設——国家が極秘に行っている研究の中核となっている場所への潜入を命じた。

地下へ地下へと進んだその先。そこは、死に満ち溢れた場所だった。

結局、目的のその場所にたどり着くまで、無月は100人近くの人間を始末した。返り血を浴びた髪や顔がベタつき、不快感に心中で舌打ちをする。

眼下に広がる光景を、無月は音を立てずに見つめていた。

壁に礫ハリツケにされた複数の影。20歳前後の年ごろと思われる、女たちだった。

ある者は恐怖に顔を歪めて泣き叫び、またある者は——大半が、すでに息絶えた状態だった。それが、人であったと言えればの話だが。

それというのも、礫にされた影は、ほとんど人間の姿形を残してはいなかった。

赤黒く変色した細長いものが、壁に設置された礫台の手足にあたる部分にぶらさがっていた。

胴体にあたる部分は内側から爆発したかのように床にはじけ飛び、頭にいたってはそれらしいものが見当たらなかった。

絶望に満ち満ちた、闇の世界。

「……あれが、“不適合”の成り果てか」

おぞましい。それ以外に、何の言葉も浮かばない。

——…まるで、私の故郷のようだな——

死神が、嬉々としてつぶやく。

死神の言う故郷とは一体どんなものなのか、まったく想像もつかない。死神たちの故郷などろくなものではないだろうから、別段興味もわかなかった。

——…これだけの絶望を、生み出すのは骨がいらそうだ——

状況はつかめた。

国家が最重要気密として隠す、この研究所で行われていることは、^{ラボ}一体何なのか。

今この場で目にした惨状を、死神に“記憶”させる。その情報をボスのもとへと持ちかえれば、この任務は完了となる。

——…人体実験、か……

——…人間とはまったく、残忍なものだな……

心にもないだろう言葉をつらつらと述べるコイツは、まったく死神らしいと無月は思った。

死神との会話まで事細かに思い出されたことに、無月は舌打ちをした。

「…言っただろう、俺の思考に入り込むな」

——…私の“記憶”は、何よりも正確だというのに……

——…思い出させてしまうのは、酷だったか？無月……

小馬鹿にするように、死神はケタケタと笑った。

——…人間の生み出す絶望は、この世の何よりも、格段に大きなもの……

——…死神よりも、真に死神になりうるのは……

——…人間の方だと、思わないかい？……

「……………」

なるほど、あの残酷な光景が人の手で作られたのだとしたら。

人間は死神よりもはるかに、人を死や絶望に追い込む死神に相応しい。

……もし。何も見ずに生きていくことができたのなら、どんなに楽だろうか。

関わらずにいられたのなら。……彼女も、自分自身も。

——…ふふ。叶わぬ願いだよ……

わかっている。

死神ゴイツに取り入れられてしまったその時から、闇を這うような人生を送ることが定めとされた。

逃れられない、生きながらにして死すという定めを、体のなかに受け入れてしまったのは自分自身なのだから。
何を恨み、何を憎めばいいのか。

——…世界を、恨むかい？ ナツキ……

恨んでも憎んでも何も変わらない、それもわかっている。

どうにもならない運命を、受け入れることもできず。

背くこともできないから、それならば——何も、考えぬようと。

心を閉ざし、為すがままに。

それが自己防衛だということを、少年はまだ知らない。

十

「あああ…ぐああっ…！」

うめく男の顔面を、思い切り踏み付けた。

生かす価値も、生きる価値すらもない人間たちに、同情の余地など欠けらなかつた。

「や、やめてくれ…助けてくれ…！」

恐怖で震え上がった声を上げる男。青い顔をしているだろうが、痛め付けて血にまみれた顔は真っ赤に染まっていて色などわからない。

「うああああああっ！」

絶叫する男の体を、戸惑いなく切り付けた。

ぱっくりと開いた胸から血しぶきが返り、金色の髪を濡らす。
血が目蓋の上をすべっていく鬱陶^{ウットウ}しさに、眉をしかめて舌打ちした。

「…誰もかれも、出来損ないの愚か者ばかりですね」

悪態をついてから、あたりを見回した。元々は彼らのアジトだったその場所は、今や血に汚れ、複数の死体が転がる墓場でしかなかった。

「…化け…も、の」

「しぶといですね。まだ生きていたのですか、そんななりで」

一番はじめに、痛め付けてやった男。

彼女をターゲットとし、捕らえるよう指示を出した張本人。

「プロジェクトに必要な人間を集めろ、と。」

その指示とは関係なしに、あなた方は私欲のために動いた」

彼女を捕らえ、傷つけた。

「任務に背いた、その罰は重い」

「…ふ…っはは…!」

「……?」

血まみれの顔が歪み、男はかすれた笑い声を漏らす。

喜怒哀楽の区別もつかない程につぶされた顔のまま、男は嘲笑を浮かべていた。

「何のた、め…に、こんなところ…まで来…のかと、思…えば…」

「あの…茶髪の…女、か…?」

見る影もなくつぶされたその口で、男はとぎれとぎれの言葉を紡ぐ。

「…そん…なに、大切か…あの小、娘が……？」

見上げてくる目玉が癪に触り、男の腹を思い切り蹴り上げた。

「…笑わせる、な…」

声も出せぬ程に顔面を潰してやったというのに、まだこんなにも喋れるというのか。

「…二度と、口もきけぬようにして差し上げましょうか」

「…テメエ…の、ような人間が…ひ、とを…愛せる…わけ、が…」

男が言葉を言い切る前に、喉元に足を置いて気道をふさいだ。
靴底に体重を加えていくにつれて、苦しげにうめく、瀕死の男。

「…………お前に何がわかる」

ポキ、という小さな音が喉元から聞こえた。

足を離して男を見れば、すでに事切れていた。こちらに向いたままの両目は、生気を宿してはいない。

しかしその目に嘲るような色を含んでいるように見えて、胸に渦巻く黒い感情は、なかなか収まることなかった。

Desire of both parties. (後書き)

〈訳〉双方の想い

後書きにまで目を通していただきまして、ありがとうございます。
挨拶が遅れました、

『死神に愛された少年』作者の璃玖^{リク}と申します。

初めて御覧になられた方もいらっしゃると思いますが、以前から御覧になってくださっていた皆様へ、長期にわたる更新停滞でご迷惑をおかけしましたこと、この場を借りてお詫び申し上げますm(

┘ m

シリアス一色で、読み手も書き手も元気になるような作品では決してないですが：

ぬるゝい恋愛なんかも交えつつ、書いていけたらなあと思っております。

とは言っても、ハイなテンションがなければ文が書けない作者です。

頑張ります……／＼(^ O ^)／！！

あどがきの最後までお付き合いくださって、ありがとうございました。

2010. 12. 26 璃玖

二章†Light of rift in the clouds.

Light of rift in the clouds.

せつかくの旅行だというのに、とユーリは心中でため息をついた。

あれから丸々二日間、ユーリはアレグラさんの徹底的な監視のもと、絶対安静を余儀なくされていた。

手首から腕にかけての傷はだいぶ良くなったし、精神的な疲れもない。体調は良好といったところ。

しかしアレグラさん曰く、

「年頃の女の子なので、傷が残ってはいけません。

将来のことも考えて、徹底的に療養しなければいけませんわ」

とのことだった。もちろんユーリは、アレグラさんの言い付けに逆らえるわけもなく。

ユーリの療養生活は、三日目へと突入していた。

「…ユーリ、ただいま!」

「ロイ、おかえり」

療養生活三日目もそろそろ終わりを迎えようという頃、ノックと同時に開いたドアの隙間からロイが顔をのぞかせた。

「どう、身体の調子は？」

「朝からずっと、元氣のままだよ。動いてないんだもん」

ロイはというと、休暇といえども家の仕事が忙しいらしい。

朝早くからユーリの部屋を訪れてから出かけていき、すっかり日が暮れてから帰ってくるのだった。

「ロイって、本当に忙しいんだね」

「：学校がないぶん、色んなところへ連れ回されるんだ。休みにもならないよ」

「夜はゆっくり休んだほうがいいんじゃない？」

忙しい毎日にロイの身体を気遣えば、ロイは目を真ん丸くしてから、表情を崩した。

「せっかく、こうやってユーリに毎日会えるんだ。会いに来ないわけないよ」

「疲れて居眠りして、怒られても知らないよ？」

ロイの言葉がうれしい反面、照れ臭くて、ユーリは意地悪を言った。

まるで会話の途切れるタイミングを見計らっていたかのように、丁寧なノックが部屋に響いた。

アレグラさんに代わってユーリの世話をしてくれていたメイドが、ドアへと歩いていく。

ドアの外の人物と何やら会話をし、一分もたたないうちにドアを閉めた。

「…ロイヴィア様、お言付けを承りましたのでお伝えいたします。明日参加される予定でした会議が、急遽中止になったとのことですよ」

言付けを伝え終えたメイドは丁寧に頭を下げて、部屋の隅へと下がった。

「……ユーリ！」

「えっ、何？」

「聞いたろ？明日、時間がとれることになったんだ！」

見開かれた大きな瞳は、嬉々とした輝きにあふれていた。

勢いのままにユーリの両手を掴みかけて、腕に巻かれた包帯に気が付き手を引っ込めた。

「明日は一日、ユーリと一緒にだ！」

「良かった、仕事ばかりで大丈夫かなって思ってたんだ。明日はゆっくり休めるね」

「何言ってるのさ、どうせなら出かけようよ！首都の国立公園、今はきつと花でいっぱいだよ。オペラ鑑賞とかどうかな、ユーリは興味ある？」

よっぽど嬉しいのか、ロイは早口でまくしたてる。ユーリは眉尻を下げて、少し困ったような顔をした。

「うん：でも、アレグラさんが許してくれるかどうか」

気遣わしげにロイを見つめてから、ユーリは視線をドアの方へと移した。

目をすつと細めたアレグラさんが、今にもお小言を言わんばかりの雰囲気であっていた。

「……あ」

マズイ、といった表情を浮かべるロイ。素直すぎてわかりやすいその反応に、アレグラさんは目を細めた口元に笑みを浮かべた。

ユーリの背中に、冷たい風が吹き抜ける。

「ずいぶんと楽しそうなお話をしていらっしゃること。ねえ、お坊っちゃん」

顔は笑っているのに、まとった空気は氷点下。

「……それはユーリちゃんが、絶対安静が必要な怪我人だと承知の上でのお話でしょうね？」

冷気にさらされてカチコチに固まってしまったユーリとロイは、言葉を返すことすらできなかった。

しばらく見つめあったままの冷戦が続き、その沈黙をロイの一言が破った。

「せっかくの休みなんだ、僕だってユーリと出かけたいんだよ」

アレグラはユーリと市場へ行ったのだったね、と。

そう言ったロイの顔は、どこか不貞腐れた子供のようだった。

「くれぐれも、ユーリちゃんに無理をさせるようなことだけはないように。」

それがお出かけの条件ですわ」

「…アレグラさん」

それはつまり、外出の許可と受け取ってもいいのだろうか。

うかがうようにアレグラさんを見つめれば、アレグラさんは少し困ったような笑みを浮かべた。

「ごめんなさいね、お坊っちゃまの我儘に付き合ってもらえるかしら？」

「我儘なんて、とんでもないです」

「やった、ユーリ！」

気付いたときにはロイの腕が、ユーリの身体を包み込んでいた。突然のことに、息が止まる。

「ロ…ロイ…っ！」

「お坊っちゃま！」

恥ずかしさのあまり、ユーリは頬に熱が集まるのを感じた。火照った頬にロイの髪の毛がさらさらとすべり、くすぐったかった。

「…ユーリ、君って」

「な、なに？」

抱き締めたまま、ユーリの肩を撫でるように触れるロイ。

「僕よりずっと、華奢だな」

そう言って身体を離して、ロイはにっこりと笑った。

それは、屈託のない笑み。ユーリの頬の熱は、なかなか引きそうになかった。

+

「……アレン！」

屋敷に帰り着いたときには、すでに深夜を回っていた。

誰も起きてはいないだろうと思っていたため、名前を呼ぶ鋭い声が聞こえたときには、わずかだが驚きに目を見開いた。

「何も言わずに出かけたきり、帰ってくる様子もないからどうしたのかと…それに、なんて格好を！怪我をしているの？」

天井まで三階分ほどの吹き抜けとなっているロビーでは、声が響きやすい。深夜という時間帯を氣遣って声を落としてはいたが、彼女の口調は厳しかった。

「…返り血です」

「………」

彼女は一瞬にして表情を失い、口をつぐんだ。

「ご心配なさらず。アレグラさんは、早くお休みになられてください」

真っ青になった彼女を一人おいて、アレンは疲労で重く感じる体を引きずるように、階段をのぼった。

無意識だった。

たどり着いたそこは与えられた客室ではなく、わずかだが薬品の匂いが漂う医務室だった。

「………」

ベッドに横たわっている、一人の少女。細い腕に巻かれた包帯に目がいき、心中で忌々しげに毒ついた。

すでに始末をすませた彼らには、その声は届くはずもない。

「…ん………」

少女が小さくうめいて、そっと寝返りをうった。

白くなめらかな肌、華奢な肩。胸元の開いた服から覗く、鎖骨の浮いた首もと。

——触れたい、触れさせたくない。

他の、誰にも。

胸に渦巻く黒色の感情が、彼女には伝わらぬよう。彼女を、起こしてしまわぬように。

伸ばしかけていた指先を、きつく握り締めた。

Light of rift in the clouds. [2]

+

翌日。

すっかり身支度を整えたころ、コンコンコン、とノックの音が響いた。

ロイが迎えに来てくれたのだろうと、ユーリは心持ち早足でドアに近付き扉を開いた。

「おはよう、ロ——」

言いかけた言葉を、ユーリは飲み込まざるをえなかった。それはなぜか、目の前が真っ黒だったからだ。カーテンのようなものが、ユーリの目の高さから床にまでのびている。

床に付いた布の隙間が人の足のようなものがのぞいていて、ユーリは恐る恐る視線を上へと持っていた。

「殿下の命により、迎えにまいった。君が“ユーリちゃん”？」

暗い赤色の髪が、無造作に跳ねている。切れ長の鋭い瞳が、ユーリを見下ろしていた。

目と鼻の先にあってカーテンだと思ったそれは、黒いマントだったらしい。黒一色のそれは、数日前ユーリの上に降り掛かった災難を思い起こさせた。

ユーリは戸惑いをこえた恐怖の色を隠せるはずもなく、ユーリは無言でうなずいただけだった。

「初めまして、というべきか。君のことは、俺は前々から知っていたが。」

こうして話すのは初めてだな」

見上げるほどの身長差を考慮してか、彼は床に膝を付き、逆にユーリが彼を見下ろす格好になった。

「そんなに不審なものを見るような目をしなくても良いだろう」

「……………」

黒という色に過剰な恐怖心を抱いてしまっていることは、否めない。

しかしそうでないとしても、見ず知らずの人間が突然ドアの前に立っていて、ユーリの名を知っているともなれば、怪しまずにはいられない。

そもそも、殿下の命って？

「アレグラ・ミーチャを、知っているだろう？」

その名を聞いた瞬間、まったく単純な話だが、警戒心は影もなく消え去った。

「アレグラさん…はい、もちろん知っています。お知り合いなのですか？」

「俺はその息子、クラウディオ・ミーチャだ。皇太子付勤務の守衛をしている」

「あなたが、アレグラさんの？」

彼の物静かそうな雰囲気からは、アレグラさんと親子関係にあるなどとは結び付かなかった。

会話をしてもどこか淡々としていて、表情の変化にも乏しい。

アレグラさんとは正反對の人柄だ。

しかし癖のある赤い髪は、なるほど、アレグラさんの持つ豊かな髪によく似ていた。

「君を客人として、殿下の部屋へ案内する」

「お聞きしたいのですが…殿下、というのはいったい？」

次に彼の口から発せられた言葉に、ユーリは耳を疑わずにはいられなかった。

「ロイヴィア・ディスティ皇太子、第二王位継承者であられる御方だ」

「ええっ!？」

「もしかしたらとは思っていたが…本当に何も知らなかったんだな
悩ましげにため息をついた彼だったが、表情はほとんど変わら
ない。

「一年も前から、殿下とは知り合っているというのに」

「だ、だってロイは今までそんなこと一言も…!」

皇太子、この国の最高権力者である王のご子息。

高貴な家柄の子なのだとは思ってはいたが、高貴なんてものじゃない。まさかロイが、皇子さまだったとは。

「私ってば、知らずとはいえ…失礼なことを…」

「特に話さなかったと言うことは、殿下自身、皇太子という地位にこだわりのないということだろう。案ずることはない」

「ですが…」

そう言われても、ユーリは頭を抱えずにはいられなかった。これから、一体どんなふうに接するべきなのか。

「…悩むのも良いが、一先ず殿下の部屋へ向かうべきだと思うが」

クラウディオさんに指摘され、顔中で困惑をあらわにしていたことに気付いて、恥ずかしさにうつむいた。

「…はい、そうですね」

ユーリは悶々（モンモン）と考えをめぐらせながら、クラウディオさんの後ろを歩いた。

ロイの部屋の前にたどり着くと、クラウディオさんはドアをノックして一歩後ろに下がった。

小さく開けられたドアの隙間から若いメイドが姿を見せる。

「…ミーチャ様…！」

来訪者の姿を見るなり——見たのはクラウドイオさんだけで、ユーリには一瞥もくれなかった——彼女は頬を赤らめた。

どこかうっとりとした表情でクラウドイオさんを見つめながら彼女は、ご用件は？と尋ねた。

「保護のもと、客人をお連れした。取り次ぎを願いたい」

「かしこまりました。少々お待ちを」

彼女の感情がわずかに浮き足立っているのが、目に見えて理解できた。可愛らしく会釈をしてみせると、彼女は部屋へと消えた。

「有名人なのですね、クラウドイオさんって」

ユーリが一人でロイの部屋を訪れたときには、てきぱきと仕事をこなす優秀なメイドでしかなかった。打って変わって今の乙女らしい全開の様子に、ユーリは正直な感想を述べた。

「…何故？」

クラウドイオさんはそんなユーリに向かって、怪訝そうに眉をひそめただけだった。

やがてメイドが戻ってきて、ユーリを部屋のなかへと案内した。クラウドイオさんは行かないのかと後ろを振り返ると、守衛は部屋の中まで立ち入ることは許されていないからと、頑なに拒んだのだった。

「おはよう、ユーリ！今朝はどう、よく眠れた？」

「うん、おかげさまで。もうすっかり元気だし」

「そっか！それは本当に良かった。

色々心配になっちゃってさ、クラウドに迎えを頼んだんだ」

「クラウド……クラウドイオさん？」

「そうさ。昔から一緒にいたから、兄みたいなものなんだ」

「そっか、アレグラさんはロイの乳母さんだもんね」

「アレンもそうさ、三人で兄弟みたいに育った。

でも二人とも、今じゃあんなふうにかしこまるものだから、嫌になっちゃうよ」

年を重ねて青年へと成り代わる年代、すなわち皇太子から、王位継承者としてふさわしい人間へとなっていかなければならない。

そんなロイに仕える立場になる者たちが、子供時代と変わらずに接するということ自体、無理な話なのだろう。

「ユーリ、もしかして変なこと考えてない？」

考えていたことがすべて顔に出てしまっていたらしく、ユーリの顔を見るなりロイは厳しい表情をした。

「……クラウドイオに聞いたんだね？」

わずかに表情をゆがめたロイは、少しだけ寂しそうな顔をする。
そんなロイに、ユーリはさらに困惑してしまい、どうすればいい
のかわからなくなって視線を泳がせた。

「どうしよう、とか考えてるんだろ？」

「う…えつと…」

「そんなことだろうと思った」

凶星を言い当てられてまごつくユーリに、ロイは盛大なため息を
ついた。

「隠してるつもりはなかったんだ。

…こうなるんじゃないかってことにも薄々気付いてはいたから、言
いたくなかったっていうのも本心なのだけど」

ロイの表情は複雑だった。拗ねているような怒っているような、
しかしどこか悲しんでいるような。

「ロイ？」

垣間見えた悲しみに、ユーリは思わず声をかける。

「ねえユーリ、変わらず友達でいてくれる？」

「……………」

「今までどおりっていうのは、難しいかな？」

国中のすべてを従える王という存在。その息子として生まれたロイは、一体どれだけの人に尊ばれ、かしくかれてきたのだろう――それはきつと、友達という対等な関係性をも築けないほどに。

「ごめんなさい」

ユーリは深く頭を下げた。

「私、ロイを傷つけてしまった」

「…ユーリ」

「大切な友達を、裏切ってしまうところだった。ごめんね、ロイ」

ロイの瞳が見開かれて、輝いた。やがていつものように、明るい笑顔を取り戻す。

「ユーリ!!」

軽い衝撃と、息もつまるような強い包容。ロイの感情の高ぶりが、直に伝わってくる。

「やっぱり、ユーリはユーリだ!」

「ロイ、苦し…」

「ユーリと出会えて、本当によかった」

背に回された腕がゆっくりと放され、ユーリの肺が空気で満たされる。

目の前にある、ロイの瞳。男の子とはいえ、二つ年上ユーリのほうが数センチほど身長が高い。

「いつかユーリよりもずっと大きくなって、僕がユーリを守るよ。約束する」

にっこりと笑うロイの顔は、まだどこか幼い。

それでもきつと、数年経てば、ユーリなんて簡単に見下ろすほどの身長になってしまうのだろう。

「約束」

そう言って半ば強引にユーリの小指をとると、自分の小指にそれをからめて、ロイは笑った。

Light of rift in the clouds. [3]

空は分厚い雲におおわれ、お出かけ日和とはいえない難しい天気だった。すぐ隣を歩くロイはそんなことは全く気にならないようで、至極ご機嫌にユーリの手を引いていた。

二人から少し離れたところに数人の護衛やメイドが控えており、その中には今朝ユーリを迎えに来てくれた赤髪の青年、クラウディオさんの姿もあった。

「もうすぐだよ、ユーリもきつと気に入るさ」

「国立公園って広いんだね、どこまでも続いてるみたい」

入り口で馬車を降りてから歩き始めて、どれくらいがたったただろ
うか。

歩いては変わり、また歩いては変わる景色。めまぐるしく変わり
ゆく景色一つ一つを、ユーリは記憶に留めていく。

蕾を付けた木々、空を飛ぶ小鳥。まだ冷たいだろう川の水は、川
下に向かって緩やかに流れゆく。

「ほら、見えてきた!」

ロイの指差す先に見える、色とりどりの野原。何種類もの植物が、
何色もの花を咲かせていた。

ふんわりと香る花のかおり、ユーリにとっての春のかおりだ。

「行こう、ユーリ」

先を歩くロイがぐいぐいと手を引っばっていくため、ユーリは小走りですれについていく。

「すごい…こんなにたくさんの花、初めて」

「だろ？何ていったって国立公園だからね。
一年かけて、春の見頃のために手入れされているんだよ」

ただ花が自然に咲き誇っているわけではないことは、ユーリも一目見た瞬間から気付いていた。
花は色ごとに区画され、どれも凛としていて美しい。

「でも、残念。花壇の花では、摘んだりできないもんね」

子供の頃はよく、花を摘んでは冠を作って遊んだものだった。
初めて作ったのはもうずっと昔で、パパがまだ定期的に休暇をとっていた頃。近くの公園に散歩へ行ったときだった。

砂場のまわりに咲くシロツメクサで、パパがユーリにプレゼントしてくれた花輪。どうしても作ってみたいとせがんで、作り方を教えてもらったのだ。

とても幼い頃の記憶であるはずなのに、ユーリははまだ覚えている。

「…り、……ユーリ？」

名前を呼ばれていたことに気付いて顔を上げると、目の前に心配そうな表情を浮かべるロイの顔があった。
脳裏によみがえる記憶に、どうやらすっかり浸ってしまっていたらしい。

「ごめん。少しぼうつとしちゃった」

「ユーリ…そんなに花を摘みたかったんだね」

「…？」

ロイはしょんぼりとした様子でユーリの頭を撫でる。
しかし突然ひらめいたような顔をするなり、そうだ！と手を打って
みせた。

「わかった、僕が花を摘めるように頼んでくるよ！」

「えっ、頼むって」

「ユーリは本当に花が好きなんだね。大丈夫さ、ちゃんと許可をも
らってくるから」

「ロイ…！」

ちょっとした勘違いをしたロイは使命感たっぷりにそう言って、
返事も聞かずに駆け出してしまった。

「…行っちゃった」

走り去るロイの後ろを、数人の護衛が追い掛けていく。
色素のうすい灰色の髪をした騎士と、黒い艶のある髪の騎士。
二人とも背が高く、後ろ姿からでもわかるくらいにがっしりとした
体格だった。

「少し向こう見ずなところがあるんだ、殿下は」

低い声に背後を振り返ると、目の前には真っ黒のマントがあった。今朝のこともあり、声の主が誰であるのかユーリはすぐに理解したため、驚くことなく視線をあげた。

紅い瞳と視線がぶつかる。

「クラウドイオさんは、ロイを追わなくても大丈夫なんですか？」

「問題ない。」

というよりも、君を一人にするわけにはいかない」

「すみません…ありがとうございます」

謝るべきかお礼をのべるべきか迷った末、結局両方の言葉をのべた。

「昔からかわらない癖だ、良い意味でも、悪い意味でも」

「そんなロイの優しさに、いつも助けられていますから」

ロイの素性を知って、ほころびかけた絆。だがそれはユーリの身勝手で押し付けがましい遠慮からきたものだった。

友人でいたいと強く願ってくれたロイのおかげで、今だって、ユーリはこんなにも幸せな気持ちになれる。

「ユーリっ！」

花を摘んでもいいって、管理人さんが言ってくれたんだ！」

満面の笑みを浮かべたロイが、こちらに駆け寄ってくる。

空にかかる雲も吹き飛んでしまいそうなほどに、明るい笑顔。

本当に、太陽のようだ。

かけてくるロイの後ろには二人の騎士と、白髪混じりの黒髪を綺麗に整えた初老の男性がいた。

「この人は、国立公園の管理人さんなんだ。ユーリの話をしたら、是非会いたいって」

「初めまして。

花が好きだとおっしゃるお嬢さんは、君かね？」

眼鏡をかけた男性は、ユーリの顔を見るなりにつこりと微笑んだ。優しいような声での挨拶に、ユーリは丁寧に頭を下げる。

「はじめまして、ユーリ・ロゼルと申します。

勝手なわがままを聞き入れてくださって、ありがとうございます」

「いや、いや。

花が好きだと言ってくくださる方だ、是非ともお目にかかりたいと思ったのですよ。

私はペメール、国立公園の植物専門管理人です」

「ペメールさん、本当によろしいのでしょうか。

苦勞して手入れされた花のように、私なんか摘んでしまつては可哀相では？」

ユーリの言葉に、ペメールさんは大げさなくらいに首を振って見せた。ユーリに向けられた目は、眼鏡の奥できらきらと輝いている。

「とんでもない！」

確かに花は、長持ちさせて楽しむことにも価値はある。

しかし、眺めて美しさを愛でるだけが花ではないと、私は考えておるのです」

言うなり彼は花壇のそばにしゃがみこんで、一輪の花の茎をパキリと折った。一つ、また一つと花を摘み、やがてそれらを編みこんでいく。

手際よく作業が進み、何分もたたないうちに色とりどりの花輪が出来上がった。

「こうして花に触れて、より美しいものを作ったり、水に色を付けたり……

そうやって、花で遊ぶのです」

花の話をするペメールさんの声は、とても穏やかで耳に馴染んだ。染みわたるような声に、ユーリは思わず聞き入ってしまった。

「花は人に触れられることで輝かしくあれる。

短い命だからこそ、一瞬でも良い、すべての花が触れられてほしいのです。

人と同じなのですよ……一人では、命を輝かせることなどできやしないんです」

ゆったりとした動作で花輪を差し出すペメールさん。ユーリは貴族のお辞儀を真似るように、膝をまげて体をかがめる。

ふんわりと香る花の匂い、首にかけられた花輪。

目の前で、管理人さんがにっこりと笑った。

「……花輪の作り方はご存じですか？」

「はい。私もよく、幼い頃に作って遊びましたから」

「そうですか、そうですか。どうりで、花を見る目が優しいはずですよ」

ペメールさんに笑いかけて、ユーリは花を手折った。

摘んだばかりの花はまだ生き生きとしていて、花と花とを繋ぎあわせていくたびに、その色の美しさが引き立っていくのがわかる。

ペメールさんの手際の良さにはまるでかなわなかったけれど、ユーリは五分程かけて花冠を完成させた。

「はい、ロイ」

出来上がった冠を、ロイの頭の上にのせた。白と赤紫の花を編みこんだ冠は、ロイの藍色の髪によく映えた。

「これ、僕に？」

ユーリは頷いて、小さく笑ってみせた。言葉では表せないくらいの、感謝の印にと。

「…ありがとうございます！」

皇太子であるという事実を忘れさせてしまうくらいに、ロイは無邪気な笑みを浮かべた。

Light of rift in the clouds. [4]

+

予定されていた滞在期間をすぎても尚、ユーリはロイの別荘——すなわち王家の別荘にとどまっていた。

別荘内に与えられたユーリの自室にはいま、ユーリと、皇太子付きの騎士が一人いる。

黒いマントが外されてはいるものの、マントがなくとも騎士という人種はどうしてか物々しさが残るらしい——というよりは、もしかしたら、それは彼そのものがまとう雰囲気なのかもしれない。

「次、クラウドディオさんの番です」

「ああ」

ユーリが促すと、クラウドディオさんはいつもの無表情に少しだけ険しさをのぞかせた。

「パスは使いきってますよ」

さらに言葉が続けると、クラウドディオさんは眉間のシワを深くさせた。

「…わかってる」

「あ、そこには置けないです」

「……………」

勝負のゆくえは明らかだった。ボードのうえに並べられた、白と黒の丸いピース。全体的に白一色で、まばらにある黒は片手で数えられるほどだ。

黒いピースを持ったクラウディオさんの手が、ボードの上を右往左往した。

「降参ですか？」

「……」

彼は無言のまま、手に持っていた黒いピースをケースに戻した。

これほどまでの大勝は、ユーリも生まれて初めてだった。

ボードの上を支配している白いピースを集め、それぞれ均等になるようにケースに戻す。

「もう一度やりますか？」

「いや、もういい」

会話終了。

と言った感じで、会話をしようとも長くは続かず気まずい空気が流れる。

なんとかそんな空気を打破しようとボードゲームを始めたわけだが、どうやら墓穴を掘ってしまったらしい。

気まずさに息が詰まる思いがして、ユーリは心中でため息をついた。

何故、こんなことになったのかというと、原因は数日前までさかのぼる。

日々仕事で忙しく、日頃から家に帰ることの少ないフォードさん。家に残されたユーリは数名のメイドたちとともに、広い屋敷で毎日を過ごしていた。

そんな生活の様子を知って、過剰なほどに心配し、激怒した人物——アレグラさんの一言によって、それは決定されたのである。

「ユーリちゃんは、私が責任を持ってお世話いたします！」

彼女がそう啖^{タン}呵^カを切った理由は、こうである。

年ごろの娘を、抛り所となりうる家族も相談相手もない屋敷にたった一人でおくなどありえない。

警備の手薄な屋敷に一人でいて、何かあっては取り返しがつかない。そして、極め付けの言葉。

「アレンもアレンだわ。」

いつまでたっても心配ばかりかけさせて。

良い機会だわ、私がユーリちゃんを預かれば、必然的に私にも顔を見せるようになるのだから」

子供を叱る母のような勢いに、まわりにいたすべての人間が何の反論もできなかった。

ユーリも、とうの本人であるフォードさんも言葉を忘れ、ただ頷くことしかできなかった。

ここまでは良かったのだ。

アレグラさんの申し出はユーリにとって不満であるどころか、ありがたいことこの上なかった。

フォードさんやロイが休暇を終えた今、フォードさんのお屋敷に戻れば、ユーリは一人きりでいる時間が多いだろう。

一人きりには慣れている。けれど、淋しさを感じないはずはないのだ。

ロイの別荘に留まることができれば、アレグラさんがそばに居てくれる。ロイもきつと、仕事から帰れば顔を見せに来てくれるだろう。

一人でいるよりも、ずっと楽しい——そのはずだったのだが。

どういうわけか、ユーリの目の前にはクラウディオさんがいるという現状。

「……………」

「……………」

「……………」

「…体調が優れないのか？」

「いえ…そういうわけではないのですが」

気まずさは病ではないが、ある意味ちくちくと刺さる空気が痛くてたまらない。

一人では退屈だろうからと、クラウディオさんを話相手につれてきたアレグラさん。

さすがに、これは断っておけば良かったと心底後悔した。

誰でもいいからこの沈黙を破ってくれはしまいかと、切実に願うばかり。

「あの、お仕事がお忙しいのでは…？」

無理して私に付き合ってくださなくても、大丈夫です」

「無理ではない。

君の護衛も兼ねて相手をする事、それが今日の仕事になっている」

「ではロイの護衛は一体誰が？」

「守衛は一人ではない。優秀な騎士が、他にも大勢いる」

そうは言ってもきつと、ロイはクラウディオさんは特別に信頼を寄せている騎士なのだろう。

そんな大切な存在を、ユーリの相手をするためだけにロイのそばから引き離してしまった。

「気に負う必要などない。

君の護衛をと命じられたのは、殿下自身だ」

心の内を言い当てられた驚きと、予想していなかった言葉に、ユーリは声も出なかった。

クラウディオさんの護衛は、てっきりアレグラさんの提案だとばかり思っていた。

「ロイ、が」

ユーリが怪我をして帰ったあの日、ロイは至極つらそうな表情をしていた——それは心の底から、ユーリのことを心配してくれていたからで。

ユーリの護衛にと、最も信頼のおける守衛に仕事を任せたロイ。ロイの優しさに、胸が満たされるのを感じる。
あふれそうになる涙。

涙を流すまいと下唇を噛み、それ以上の喜びにユーリは、はにかんだような笑みを浮かべた。

「殿下が言っていた。

最近、君はよく笑うようになった、と」

たとえ他人のことであっても、自分のことのように喜ぶロイの姿が目に見えかぶ。

ユーリがこれほどまで元気になれたのは他でもない、ロイ自身のお陰だということに、ロイはきつと気付いていないのだろう。

「ロイのそばに居ることができる私は、とても幸せ者ですから」

今だってロイの存在が心の中にあるだけで、自然と笑みがこぼれる。

驚いたことにクラウディオさんもまた、笑みとまではいえないが、とても穏やかな表情を浮かべていた。

「不思議だな、まったく同感だ」

あれほど会話に困っていた相手なのに、今はすっかり穏やかな雰囲気の流れている。

今もまたロイに助けられたのだと気付き、笑いがこみあげた。

「クラウドディオさんも、ロイが大好きなんですね」

「…?」

「ロイの話をするクラウドディオさんの顔、とても優しくかったから。ロイもクラウドディオさんも、お互いに信頼しあってる。素敵な関係ですね」

自分がいつも以上に饒舌ジョウゼツになっているような気がして、おかしかった。

言葉は次から次へとこぼれてくる。
建前などではない、すべてユーリが心から思ったことだった。

「君と殿下も、また同じだろう」

「クラウドディオさんと比べたら、まだ出会ってから間もないです」

「関わってきた時間よりも、どれだけ相手を思うかだろう」

気恥ずかしいようなことをサラリと言ったのける彼は、至って真面目のようだ。

隙もなくとっつきにくいイメージしかなかったクラウドディオさんだったが、一つ、ユーリの中で変わったものがあった。

——言葉にこそしないが、心が綺麗で優しい人。

思わず微笑んでしまって、クラウドディオさんに怪訝な表情をされたのだった。

L i g h t o f r i f t i n t h e c l o u d s . [4 (後書き)

〈訳〉雲間の光

B e t w e e n t h e d a r k a n d t h e d a r k .

B e t w e e n t h e d a r k a n d t h e d a r k .

仕事詰めだったフォードさんと久しぶりに顔を合わせたのは、長期休暇も残り三日となり新学期の準備を始めた頃だった。

「まあアレン！

随分と長い間、帰らなかったじゃないの」

数週間ぶりに見たフォードさんの顔を、アレグラさんは真ん丸の目で見つめた。

やがてその表情は険しくなり、眉間には見事なまでのシワが寄っていた。

「…あなた、普段からこんなに家を空けていたの？

ユーリちゃん一人を残して！」

けしからんと言わんばかりに腰に手を当て、鬼もとい母の形相でフォードさんをにらみつける。

「全く、ユーリちゃんを預かることにした私の判断は、どうやら間違っていないかったようね？」

「…すみません」

「とはいえ、アレン。」

そんなに疲れ切った状態のあなたにお説教しても無駄ね。
すぐに温かい食事を用意するわ、着替えていらっしやい」

謝罪のため頭を下げたフォードさんは、ぐったりとしていて顔色もよくなかった。

目に見えてわかるくらいに疲れ切っているフォードさんに、アレグラさんはそれ以上何も言わなかった。

メイドに指示を出すアレグラさんの後ろ姿からは、どこか嬉しそうな様子が感じ取れる。

息子同然に育てたフォードさんが家に帰ってくることは、やはりこの上なく嬉しいのだろう。

「フォードさん、お帰りなさい」

「…今、何と？」

「えっと…お帰りなさい、フォードさ…」

言い掛けた言葉を止めるように、人差し指で唇を押さえられる。

突然のことに心臓が跳ね上がったが、ユーリは彼の言いたいことに気が付いて、言葉を訂正した。

「おかえりなさい、アレンさん」

「ただ今帰りました、ユーリさん」

フォードさんは、満足気な笑みを浮かべて答えたのだった。

フォードさんが着替えを終えてやってくるであろう頃合いで、アレグラさんはフォードさんの軽食と、お茶の準備を整えていた。

「どうしたのかしら？ 遅いわねえ」

ユーリたちがお茶を半分飲み終えた頃になっても、フォードさんが部屋に姿を見せることはなかった。

アレグラさんが心配そうに、表情を曇らせる。

「私、様子を見に行ってきます」

「まあ、助かるわ。お願いねユーリちゃん」

「はい」

先にお風呂に入っているのだろうか。

だとしたら、フォードさんのことである、メイドや執事に言付けを頼むだろう。

もしかしたら、疲れ切ってそのまま眠ってしまったのかもしれない。

「フォ……えっと、アレンさん」

ノックをしてから呼び掛けてみるが、返事はなかった。

悪いと思いつつも心配になってしまい、ユーリは中の様子をうかが

おうとドアノブに手を掛けた。
ノブをゆっくりと捻れば、カチャリ、という音が静かな廊下に響いた。

「アレンさん？」

部屋のなかは音もなく、耳が痛いくらいの静寂だった。
声もしない、物音もしない。
暖炉の薪がはぜる音もない。

ユーリはそのまま、フォードさんの部屋へと足を踏み入れた。

「アレンさん、いらっしゃいますか？」

リビングにもおらず、浴室の電気も付いてはいなかった。
どの部屋にも人のいる気配がまるでなく、冷え冷えとした空間が、
ただ口をあけてユーリを待ち受けているだけだった。

呼びかける声にも、返事はない。

まだ見ていないのは、寝室だけだ。もし眠っているのだとしたら、
起こしてしまわないように、ユーリは音を立てないように気を遣い
ながら歩いた。

ドアに近づくと、ほんの少しだけ開いていることに気付く。
開いた扉から漏れる明かりに、ユーリは安堵のため息をついた。
やはり、疲れて眠ってしまったのだ。

「……………」

失礼しますと心の中だけでつぶやいて、そっとドアを開く。
ベッドのかたわら、床に敷かれた真っ赤な絨毯の上に、横たわっ
たまま動かないフォードさんの姿があった。

「――！…アレンさん！」

思考回路が停止したのはほんの一瞬だった。

我に返ったユーリはすぐにフォードさんに駆け寄って、その場にしゃがみこむ。

「…どうし、て…一体何が…」

無造作に頬に流れた髪の下に見えるフォードさんの顔は、生気さえもうかがえないほどに青白い。

その体を起こそうと肩に手を伸ばした。

「…触れないでください」

指先がシャツに触れるか触れないかというタイミングで、フォードさんの体がわずかに動いた。

蚊の鳴くような細かい声だったが、拒絶の言葉にユーリは手を引いた。

「人を呼んできます」

今ユーリにできることは、他になかった。

駆け出そうとしたユーリだったが、途端に手首をつかまれて動けなくなる。

見るとフォードさんが、苦しげな表情でユーリの手首を掴んでいた。

「だいじょ…ぶ、です。何ともありませんから」

黒い革手袋のせいなのか、掴まれたフォードさんの手のひらからは、体温が感じられない。

冷え切っている彼の手に、ユーリは背筋が凍る思いだった。

何とかしなければ、最悪の事態に陥りかねない——もし、彼にもしものことがあったなら。

「何にもないって、そんなわけないです…！」

脳裏に浮かんだ考えを振り切るように頭をふって、ユーリは彼の制止を振り切って立ち上がろうとする。

「…誰に…も」

「アレンさん！」

「知らせては…なり、ません」

それだけ言うのにも息絶え絶えだというのに、フォードさんはユーリの手首を放そうとはしなかった。

やがてフォードさんは、ユーリの手首を掴んだまま、ベッドのふちに手について身体を起き上がらせた。

ふらりと身体が揺れて倒れそうになりながら、それでも彼はユーリが支えようとすることをひたすらに拒んだ。

はだけたシャツから見えるフォードさんの胸元を目にした瞬間、ユーリは血の気が引いた。

「アレンさん…その痣…っ！」

左胸から鎖骨のあたりにまで広がる、青紫色の痣。

フォードさんは、その胸元を隠すようにシャツを握り締めた。

「何でも、ありませんよ」

何か忌々しいものでも見たような冷たい視線をするフォードさんに、ユーリは何も言えなくなる。

恐怖からか、畏怖からか。ユーリは無意識で、掴まれていた手を払い除けてしまった。

「いいですね？…今ここで見たことは…他言しないでください。すべて、忘れてください」

肩で息をしながら、再びユーリの手をとるフォードさん。

「ユーリさん」

声色はいつも通りの優しいものだったが、有無を言わせない強さがあるように思った。

「本当に、大丈夫なのですか？アレンさん」

嘘であっても、フォードさんが頷くであろうことはわかっていた。ただ何も言わないまま、はぐらかされるだけなのは嫌だった。

「もちろんですよ、ユーリさん」

あまりにも優しい眼差しを向けられ、ユーリはもう何も言えなかった。

視線を下げて俯くと、ユーリは小さく首を縦に振った。

「着替えて、すぐに行きます。

アレグラさんにも、そう伝えていただけますか？」

「わかりました」

それが部屋を出ていけという意味であることはすぐにわかった。

ユーリは言いようのない感情を抱えたまま、無言で部屋を出たのだった。

「申し訳ありません、遅くなってしまいました」

ユーリがアレグラさんにフォードさんからの言付けを伝えてから間もなく、彼はさんはユーリたちのいる茶室へと姿を見せた。

着替えたといえど、ジャケットとネクタイがなくなった以外には先程までの服装と何ら変わらない。しいて上げるならば、白いシャツやパンツスーツのシワが綺麗になくなっていただけだった。

「まあ、もう少し楽な格好をすればいいのに」

「いえ…これが一番落ち着くので」

「…まあ。ユーリちゃん、アレンたらいつもこうなの？」

ぼうっとしてしまっていたユーリは、突然話を振られたことに驚いて、肩を震わせた。過剰な反応をごまかすためか、無意識のうちに早口になる。

「えっ、と…私も、フォードさんのスーツ姿しか見たことがないの
で何とも言いかねますが…」

というよりも、ほとんど顔を合わせないに等しい。一カ月顔を見ないことだってあったほどである。…：などは、口が裂けても言えなかった。アレグラさんの逆鱗に触れそうで、恐ろしい。

「呆れた…まあアレンの気が休まるのなら、格好までとやかく言う

ことはしませんよ」

アレグラさんは小さく肩をすくめて、ため息をついた。

考えてはダメだと思っけていても、フォードさんの身体にあつた痣がまざまざと脳裏に浮かび上がつてしまふ。

大丈夫、という一言で片付けられるようなものではなかつた。本能からか、ユーリはそう感じていた。

けれど知られることを頑なに拒むフォードさんには、ユーリはそれ以上何を問うこともできなかった。

「…ユーリさん？　どうかなさいましたか？」

すべて忘れろと言つたフォードさんの暗い表情は、今はかけらもない。氣遣わしげな優しい目線をこちらに向けて、フォードさんは笑つた。

「いいえ、何も」

ユーリは何事もないように、首を振つて笑つた。フォードさんが言わぬというならば、同じように、ユーリだつて何も言わない。

子供っぽいような考え方になつてしまつたが、ユーリ一人が騒ぎ立てたところで、結局は何も変わらないのだ。

「もうそろそろ、ユーリちゃんの学校が始まるわ。制服や他の荷物、どうなつてゐるかしら？」

「はい。明日には到着するよう、荷物を送らせてあります」

「そう、助かるわアレン。ありがとう」

当たり前のように話している二人だったが、本来ならばそれは全てユーリがしなければならぬことである。

「私自身のことなのに…手間を掛けてしまつてごめんなさい」

「いえ、気になさらないでください。私はユーリさんの保護者なのですから、このくらいはさせてください」

フォードさんは、どこまでも優しい。優しい眼差しでユーリを見つめ、優しい言葉を掛けてくれる。初めて会ったときから、それはずっと変わらなかった。

——…でも、本当は。

「……」

ユーリは溢れだしそうになる何かを拒むように、ユーリはきつく目を閉じて思考を止めた。フォードさんがユーリの様子に気付いて言葉をかけてくれたが、ユーリは、何でもないと言いつつ首を振って見せた。

アレグラさんがメイドに呼ばれて席をはずしたため、茶室にはユーリとフォードさんだけが残されていた。いつもは一人部屋に残るはずのメイドも、今は見当たらない。

終業近くになるとメイドたちを集めてミーティングをやることがあるのだと、以前アレグラさんが言っていたことを思い出す。

二人きりだと認識した瞬間、広い部屋の中がやけに静かに感じら

れる。

「アレンさんも、明日は仕事で早いのではないですか？」

「いえ、明日は休暇をいただいたのですよ」

「休暇、ですか」

フォードさんの口から珍しい言葉がこぼれて、ユーリは瞬きをし
ながらその言葉を繰り返した。

「驚いた顔ですね」

「あ、ごめんなさい…」

「いえ。ユーリさんの素直な性格は、心得てますから」

フォードさんはいつになく可笑しそうに笑い、ユーリをからかつ
た。

「実は明日、ユーリさんに会わせたい方がいらっしるんです。少し
出かけることになるのですが、大丈夫ですか？」

「はい、もちろん構いません」

「よかった。申し訳ありません、最後の休日だというのに」

「いいえ、私は平気です」

ユーリはふと、こんなふうにフォードさんと二人きりで会話する
のは久しぶりであったことに気付く。

孤児院を出て国家学校に通うようになってからというもの、同じ家に住んでいながらも、二人でゆっくりと会話をすることなどなかった。

……忘れてなど、いない。

孤児院から空港までの道程を、電車で移動したあの日。恐怖を覚えながらも惹かれてやまなかった、フォードさんの瞳。今はやわらかな雰囲気なたたえて、ユーリを見つめている。

「ユーリさん？」

思い出せと、頭の中では絶えず警報が鳴り続けていた。今までずっと。

気付かないふりをしていたのだ。

あの日、彼はユーリに何をした？ 一体何人の人の命を無下にした？

「……アレンさん」

忘れてはいけない、忘れられない。

十二年前のあの日、一年前のあの時。パパが殺されてからユーリが、目にしてきたもの。

「どうかなさいましたか？」

目の前で微笑んでいるこの人が、ユーリの人生を狂わせた。

「……………私たちは今、何をしているのでしょうか？」

「…何、とは？」

——否、

複雑で細密で、手の施しようのないくらいに絡み合った歯車が、幾人もの人間の運命を狂わせた。

パパも、浩おじさんも、茉莉も、院長先生も。

ロイも、アレグラさんも、クラウディオさんも。

フォードさんもまた、歯車に触れて、運命を狂わされた人間なのだろう。

「……………パパが死んだことも、あなたが何をしたのかも。私は片時も忘れたことはありませんでした」

ユーリは知らなければならぬのだ。

何故パパや研究所のみんなが殺されなければならなかったのか。

ユーリの運命を変えてしまったもの、それは一体何だったのか。

……………一体何のために、ユーリはここへきた？

「詳しく聞かなければならないんです、自分のためにも、パパやみんなのためにも」

長い、長い夢を見ていた。

できればそのまま、夢のなかに居たいと願ってしまうほどに、優しい夢。

信じたかった、たくさんのものが崩れ落ちていく。

長い、長い夢のあとにあるものは。

今まで目を逸らし続けてきた——真っ黒な孤独と、深い絶望だけだった。

「いつかこんなふうに話をする時がくると、思っていました」

俯いているフォードさんの表情はうかがえず、しかし聞こえてくる声はいつもと変わらない。

「ユーリさんが何を見つめていようとも、その瞳の中には必ず闇が潜んでいた。そのことに、気付いていましたから」

フォードさんはゆっくりと顔をあげ、表情があらわになる。やはりいつもと変わらない、笑み。

どくん、どくんと心臓が低い音を立てて波打つ。

一年前の記憶のなかのフォードさんと、目の前の彼とが重なる。どこか諦めたような、吐き捨てているようにも聞こえる声。しかし、表情だけは柔らかに微笑んでいる。

戦慄^{センリツ}が、背中を駆け抜ける。ユーリは震える身体を持ちこたえさせるため、強く手を握りこんだ。

「“プロジェクト”のためにパパが…みんなが死んだなんて、そんな理由で、納得できるはずがありません！」

詳しく話を聞いてどうする？

国家気密とされている“プロジェクト”の詳細など知って、今更何になる。——パパが戻ってくるなんて、二度と有り得ないのに。分かっていた。分かっていたから、考えないようにと。今までずっと、溢れそうになる感情に鍵を掛けていた。

「気密を知ってしまったら、二度と後戻りはできません」

「…今だって、私には偽りの自由しかありませんから」

「全てを知ったからといって、何になるのですか？ 貴女に何かできることがあるのだと、そうお思いですか？」

自問していたこととまったく同じ問いをされて、ユーリは言葉に詰まる。

フォードさんに付いていこうと決めたのは、ただ知りたかったから。知って、何かをしようと考えていたわけではなかった。

——何をすれば良いか、何ができるのか。わからなかった。

「………」

心中に浮かんだそんな言葉に、ユーリはまた自問する。

何のために、この人に付いてきた？——パパのことを知る人に、出会えたから。懐かしいパパの記憶に、触れたいと願ったから。

…もともと、ただそれだけの理由だった。

「……私は」

何かを、しようとしている。

「知ろうとする事に、理由が必要だなんて思いません。必要なのは、権利です」

フォードさんに、操り人形のように踊らされてきたとは思っていない。すべてのことにユーリの意志が伴っていた。

隠されていたのではない、問わなかったのだ。今までずっと目を逸らし続けてきたのは、ユーリ自身だったのだから。

「プロジェクト」のために、アレンさんは私を利用しようとした。私には、知る権利があるはずです」

手元にあったティーカップを取って立ち上がると、ユーリはそれを勢い良くテーブルの角に叩きつけた。

パリンッ、という陶器の割れる音が響き、紅茶が飛び散ってテーブルクロスや絨毯、ユーリの服にも染みを付けた。

「…どういうおつもりですか？」

ユーリの行動を眺めていたフォードさんは、ずっと瞳を細める。割れて鋭利な切っ先を持ったティーカップの破片を、ユーリは自らの喉元に突き立てていた。

「ここで私が死んでも、アレンさんには何の支障もないでしょうね」

「と、言いますと？」

「私には、父が行っていたという研究に関する記憶も、データも。一切ありませんから」

「そうでしょうか。私は貴女のお父上が、貴女に研究データを託し

たのだという見解を、変えてはいません」

「そろそろ気付いているんじゃないかって、そう思っていました。櫻木冬也は娘思いの良い父親、それ以外に他なりません。研究者であるという面を、父はただの一度も、私に見せたことはありませんでした」

ツ、と温かい液体が首を伝い、胸元まで流れる。

自分の身体に自分で傷を付けるなんて、どうかしている。錯乱状態に陥りそうになるが、首に走る痛みがそれをとどまらせる。

「いつまでも偽りの生活を送っていたって無駄なのだと、私は気付きました」

涙は流れない。さまざまな感情が渦巻いて、今自分がどんな表情をしているのかさえ、わからなかった。

「貴女に死なれては、とても困ります」

フォードさんはそれだけ言って、ふんわりと笑みを広げた。この場にそぐわないほどに穏やかなその笑みに、ユーリはぞっとする。

この人は、感情がメチャクチャだ――。

気付けばすぐ目の前にフォードさんが立っていて、破片をつかんでいるユーリの手首に彼はそっと触れた。

「ユーリさん」

「……っ」

碧い瞳が目の前にある。睨まれているわけでもないのに、恐怖に足が竦んで動けなくなった。

「貴女が何と言おうと、私は貴女を生かします。貴女の生に、もはや貴女の意志など関係ないのですから」

力を失った指先から破片が滑り落ち、絨毯には赤い染みが増える。

「すでに貴女は、我が国の“所有物”」

血の伝った胸元に唇を寄せながら、彼はささやく。熱い息と一緒に、生暖かい何かが胸元から首筋へと動いた。

「…んっ…」

刺すような痛みが首筋に走り、同時にチュツと軽いリップ音が響く。傷に落とされたキスに、ユーリは目眩メマイを感じた。

「貴女の意志で死ぬことなど、許されませんよ」

彼は耳元で囁いてから、そこにキスを落とした。

「明日は早いですから、もうお休みになってください」

頬とおでこにも優しいキスを落としながら、彼は言う。

「おやすみなさい、ユーリさん。良い夢を」

感情の見当たらない、奇麗な笑みをたたえるフォードさんに、ユーリは全身に悪寒が走るのを感じた。一步、一步と彼との距離をとり、やがて逃れるかのように、ユーリは部屋を飛び出した。

十

——痣が心臓近くにまで達している。

まるで明日の天気のことを話すように、何でもない様子で医者と言った。

「発作のような痛みは、おそらくそのためでしょう。しかし痣の原因もわからない、ゆえに治療法もない。今後この痣が身体にどのような支障をきたすのか、検討もつきませんな」

「…そのようですね」

原因はわかっていた。しかし、死神の姿は全ての人間に見えるわけではない。王族お抱えの医師の中には、死神を見る能力のある者がいなかったのだ。

研究グループ内ではアレンが持ち帰り、胸に痣を負う原因になった“黒い羽根”の研究が行われているが、成果は一向に見られなかった。

もちろんこの医者には、死神の姿など見えやしない。当然、死神の羽根も見ることができない。たとえ見えたとしても、医者に治療が可能な病なのかと言われれば、それもまた疑問である。

「せいぜい、長生きするんですな」

ため息をつきつつ投げ掛けられた言葉にアレンは軽く会釈をしてから、結局いつも通りの痛み止めだけを受け取って、診察室を出た。

医者との無駄なやりとりがあったのが、つい先日。研究の現状とその報告も兼ねて、アレンは首都の中央に位置する王宮を訪れていた。

「アレン、よく来たな。その後はどうだ？体調の方は」

問い掛けに首を横に振ってみせると、国王は眉じりを下げて嘆息した。

「そうか」

「ご心配は無用です。優秀な研究チームが、近いうちに良い知らせを聞かせてくれることでしょう」

「…ああ、そうだな」

研究チームは今、謎に包まれた死神という存在にすっかりお手上げ状態なのである。

その事実を知ってか知らずか、アレンの嘘の報告に、国王はゆったりと頷くのであった。

慈悲慈愛にあふれた国家最高権力者、国王陛下。国民たちは、彼の表の顔が真実のものであると、信じて疑わなかった。

実際、アレンの知っている国王は欲の塊そのものだ。国土拡大と王家の安泰のために様々な策略を立て、表向きには国民を最優先に考えた政略だと、善意を振りまく。

我が子をも策略のために利用している、真っ黒な存在。

「アレン」

「はい、国王陛下」

「いや、最近お前の姿を見ないとリレイアが心配しているのだな」

「そうですね…最近は特に、うかがっておりますでした。申し訳ございません」

「謝る事ではない、アレン。リレイアは、誰よりもお前に心を開いている…力になってやってほしい」

「尽力いたします」

いつ尽きるかもわからない自らの命をかけてまで、プロジェクトを完成させる意味があるのかどうか。考えたところで、アレンには与えられた任務を放棄できるすべもなく。

国家最高権力の足元に、ただひれ伏すしかない。

自身に残されたのは、短く儚い命だけ。

何とも病弱だと思っていたお姫様と、今の自分はほとんど同等なのだと気付いて、アレンは心中で自分自身を嘲笑った。

+

彼とは幼い頃からずっと一緒に、互いに互いの性格を良く知り尽くしていた。もちろん嫌な事や好きな事まで知れていたため、よく衝突し合ったものだ。

兄弟のように育った彼とは今、まったくの疎遠となっていた。そんな彼と顔を合わせるようになったきっかけ、それは、ある一人の少女の存在があったからだ。

「…久々だな、アレン」

彼と少女がこの屋敷で休暇を過ごしていたことは知っていた。彼らの姿を見ることがそこそあったものの、何せ彼は伯爵の地位。休暇中といえども名ばかりで、ほとんど仕事詰めの日々を送っていた。

「…クラウド。お久しぶりですね」

「忙しそうだな。母さんが働きすぎだと呆れていた」

「アレグラさんが、ですか。そうですね、以前お説教をあげましたから」

そう言って、彼は自嘲的に笑った。

「仕事は順調か？」

「ええ、お陰さまで」

「…この前のあれは、何だったんだ？あれも、仕事か？」

彼の表情には何の変化もなかったが、まどっている空気の温度が明らかに変わるのがわかった。

「…何でもないですよ」

何のことかと知らばつくないあたり、あの夜あの場に自分がいたことを、彼は気付いていたのだろう。

「血に濡れたまま帰ってくるのが、か？」

「ええ、何でも」

自分の領域に他人を踏み込ませるつもりは全くないらしく、彼は微笑を浮かべたままサラリと流した。

「……あの娘は」

あの夜、母との会話のあと、彼が向かった部屋がどこであったかも知っていた。彼は何故、少女を求めたのか。

「一体、何なんだ？」

誰なんだ、と聞かない辺り、自分でも奇妙な気はした。

しかし、誰と問うてもわからないのだろう。少女は自らの意志とは関係なく、何らかの目的でこの国にいる。そう、確信していた。

「身寄りがなく孤児院で暮らしていた彼女を、私が引き取りました。それだけですよ」

問い掛けの本意を知ってか知らずか、彼はそう答えただけだった。他人行儀に会釈などしてその場を立ち去ろうとする彼の背中に、もう一度だけ。

「アレン」

「はい？」

「変わったな、お前」

その言葉にこもった意味がはたして良心なのか、嫌味だったのか。自分自身でもわからなかった。

ただ彼は嘘ばかりの笑みを張りつけて、こう言った。

「貴方は変わりませんね、昔からずっと」

立ち去りぎわのほんの一瞬、チラリと見えた彼の瞳の色は相変わらず、深く澄んだ青い色。

そこに潜む感情を読み取らせる時間を、彼は与えなかった。

「…嫌味なところは、昔から変わらないな」

他人からの小さな毒を、数十倍に灰汁アクの強い猛毒で返す。それが昔からの、彼のやり方だった。

少女と母がいるであろう部屋へと向かう彼の後ろ姿を眺めながら、長いため息をついた。

会議が長引いたため今夜は帰らない、という連絡が殿下から届いたのは、もうすぐ22時を回ろうという頃だった。

忙しい殿下に代わってあの少女——ユーリ・ロゼルの相手をするようにと申し付けられてから、殿下は毎晩のように連絡を送るようになった。その内容というのも、ほとんどは少女への気遣いをうかがわせるものばかりで、彼女は元気かとか、明日も頼むだとか、殿下の少女に対する思いが手に取るように伝わってきた。

日々仕事に追われている殿下が中々家に帰らないのは、珍しいことではない。今夜もかと、クラウディオは小さくため息をついた。

それにしても、殿下は年齢にそぐわず働きすぎではないかと思う。聡明で人柄も良い殿下は、15歳という若さにもかかわらず大人顔負けの仕事ぶりを見せていた。それはまわりの人間も目を見張る程で、次期王位に就くのは彼に違いないと噂されるほどだった。

「……っと」

「きゃ…」

考え事をしながら廊下を歩いていると、突然、腰のあたりに何かが飛び込んできた。反射的にそれを受けとめる。

見るとそれは殿下が心配してやまない少女、ユーリ・ロゼ尔だった。前を見ずに走っていたのか顔面からぶつかったらしく、鼻を押さえながら、慌てた様子で謝罪をしてきた。

「い、ごめんなさいっ」

「…いや、構わないが」

「っ、クラウドディオさん…」

ぶつかった相手が予想していなかった人物であったからなのか、こちらに気付くなり少女は目を見開いた。

少女の異変にはすぐに気が付いた。血の気のない顔に、額ににじむ汗。受けとめた体は、かすかに震えていた。

「何かあったのか？」

その問い掛けに、異常なくらいに肩を震わせる少女。眉根を寄せ、少女の顔を覗き込もうとすると、彼女はそれを避けるように、一歩足を引いた。

「何でもありません」

「そんなはずはないだろう」

明らかにおかしかった。逃れるように遠ざかる少女の肩に手をおき、目線が合うように床に膝を付く。

彼女はいっそう身体を震わせて、何かを耐えるように下唇を噛んだ。

「どうした？ 何があった」

彼女はしばらく目を合わせようとしなかったが、やがてしぼり出

したような声でこう問うた。

「ロイは今夜、帰ってきませんか？」

「…ああ、会議が長引いたそうだ。今夜も帰れないと、連絡があった」

「そう、ですか。わかりました」

諦めたように目を伏せた少女は、相変わらず顔色がすぐれない。

「今夜はもう遅い。部屋まで送ろう」

「いえ、悪いです…私は大丈夫ですから」

「…もう何も聞かない、約束しよう」

はつきりとそう告げれば、少女は少しの間迷うように視線を泳がせる。しかしやがて顔を上げた少女はどこか安心したように、小さく頷いたのだった。

+

フォードさんに連れられてやってきたそこは、まるで物語の世界からそのまま抜け出てきたような、現実離れした場所だった。

「フォード様、どうぞ」

「失礼いたします」

「失礼いたします…」

扉を押さえて部屋へと招き入れてくれた執事は、感情のない言葉と眼差しをユーリたちに向けている。そんな彼に畏怖に似た感情を抱いたユーリは、自然と声にそれが表れる。

「ユーリさん？」

「あ、ごめんなさい。大丈夫です」

変に思われたかもしれない。ユーリは慌てて言い繕って、小さく笑みを見せた。

「行きましようか」

「はい」

感情が、声や表情に出てしまわないように。ユーリは震える指先を隠すように、両手を握った。

ふとその手に、ひんやりとした何かが触れる。

「行きましょう」

握り締められていたユーリ手のひらは、フォードさんの冷たい指先によって、やんわりと解かれていく。

フォードさんに手を引かれるようにして、ユーリは部屋の奥へと導かれていった。

大きな窓のそばに、美しい木彫りの装飾がほどこされたベッドがある。窓からは暖かな日差しが差し込んで、整えられたシーツの白さがより際立って見えた。

「リレイア様」

フォードさんの声にふりむいた、ベッドの上の人影。肩にかかったサラサラの髪の毛が、背中へと流れるように落ちる。

「…アレン？」

金色に近い絹糸のような髪、碧い瞳、白い肌。脆く儚いような雰囲気全身にまとった彼女の声は、透明に透き通っていて耳に心地よかった。

彼女のピンク色の唇が、ゆつくりと弧を描く。

「お久しぶりです、リレイア様」

「あなた、誰？」

フォードさんの挨拶に答えるより先に、そんな言葉が彼女の口からこぼれた。真っすぐに見据えられて、肩が緊張に震える。

「彼女の名はユーリ・ロゼル、国家学校の特別クラスに在席している生徒です」

「…そう。アレンとあなたは、どういう関係なの？」

「両親を失い孤児となった彼女を、僕が引き取り都市へと招きました。彼女の両親にはとてもお世話になっていたので、せめてもの恩返しにと」

フォードさんはどこまでも饒舌だった。嘘で塗り固められた言葉を次から次へと紡ぎだしていく。

彼女はというと、フォードさんを見つめたまま小さく笑った。

「私に何の用があつて？まさか、その子を紹介するためじゃないでしょう」

どこか刺のある彼女の言葉に、彼はいつもユーリに向けている、変わらない笑顔で答える。

「もちろん、リレイア様に会いに」

彼女の手をゆっくりととると、その手の甲に口付けをした。

「どうか、ご機嫌を直してくださいませんか？」

「いいわ」

彼女はそう言うと、悪戯な笑みを浮かべて。

「この唇に、誓ってくれるのなら」

彼の手を両手で包み込むように握ると、自らの胸の上に重ねた。

「心に、誓ってくれるなら……ねえ、アレン」

フォードさんの名を呼ぶ彼女の表情はどこか憂いや悲しみを帯びていて、それでいて瞳には強い渴望にも似た感情がうかがえた。

ユーリの胸の内で、心臓がドクンと音を立てた。

「永遠に、私は貴女のしもべ」

彼女の額に唇をかさね、右と左それぞれの頬、そして首筋まで唇を這わせた。彼女の浮き彫りだった鎖骨に唇を当て、紅い華を咲かせた。

「……それ以上でも、以下でもありません」

優しい笑みであるはずの彼の笑顔が、今は残酷なものにも思えた。相容れない複雑な想いが、そこにあるのだ。

「……キスして」

「それは、命令ですか？」

突き放す、言葉。

「そう、命令よ」

「かしこまりました」

彼女のあごに手を添えた彼は、そのまま口付けをした。貪るように、深い口付け。見てはいけない気がして、ユーリは顔をそらして目を閉じる。

かすかに痛む胸のうちに、疑問を抱きながら。

「…ユーリさん？」

声をかけられて、肩が震える。顔を上げれば、フォードさんが心配そうに見つめていた。

「どうかなさいましたか？ 顔色が良くないようですが」

フォードさんの手が伸びてきて、頬と首筋に触れる。そのまま額へと動いて、フォードさんは表情を曇らせた。

「熱はないようですが」

「大丈夫ですから、ご心配は…」

指先が、組まれていたユーリの手に触れた。気付かないうちに力がこめられていた手には爪が食い込んでいて、赤い傷跡が残っていた。

見られてしまったことに、なぜか戸惑いを感じた。

「ユーリさん」

「何でもないんです、大丈夫ですから」

突き放すような口調になってしまったことに、ユーリ自身も驚いた。すぐに我に返って息をのみ、フォードさんを見つめた。

「すみません私、失礼なこと……」

自分を失いかけたことに、ユーリはひどく動揺していた。訪れた沈黙は、ユーリの速い鼓動の音だけを耳に響かせた。気まずさに、ユーリは再び視線を落とす。

「ご気分が優れないのかしら？」

透き通った声。それがユーリに向けられた言葉だと気付いて、ユーリは彼女の目を見つめる。

「使用人呼びましょうか？ソファに掛けたほうが良いんじゃないんですか？」

「すみません、大丈夫です」

「…そうね、もしかして酷くお疲れなのかもしれないわね。別室でお休みになられたほうがいいわ」

——出ていけ、と。

彼女の瞳はそう言っているようで。

「ユーリさん？」

彼女の声に名前を呼ばれた、その時だった。ベッドに横たわる彼女の背後の景色が、歪むように波打って見えた。

思考が追い付かずそのまま見つめていると、その歪んだ空間は人の形をかたどっていった。彼女は気付かないのか、ユーリから目を逸らさぬまま。

人型となった空間に表情が浮かぶのを、ユーリは見た。

「……！」

足が震え、立ちすくんだままだった体がグラリと揺れた。

「ユーリさん……！」

フォードさんが慌てて駆け寄ってきたのを、ユーリはどこか意識の端で見っていた。騒ぎを聞き付けたのか、使用人たちが部屋に集まり状態を確認するようにフォードさんと話をしていた。

担架に乗せられ部屋を出るときには、音は聞こえず視界も曖昧だった。

しかし、はっきりと耳に届いた声。

——…初めまして、人間のお嬢さん……——

空間に浮かんだ顔、弧を描いた唇。見覚えなどあるはずもなく。声にも、聞き覚えはなかった。

しかし、確信していた。間違いなく、あれは死神。

ユーリは、死神の姿を見てしまった。色もなく蜃気楼のように浮かんでいたそれは、ユーリが意識を手放す直前まで、甲高い声で忍び笑いをしていた。

十

誰もいなくなった広い部屋は、いつもどおりの静寂を取り戻していた。無意識のうちため息をつけば、肩に掛けられていた良質のシヨールが肩から滑り落ちる。

シヨールを掛けなおそうと手を伸ばすと、まだ触れてもいないのにシヨールはひとりで肩へと掛け直された。

「ねえ、シェンシア」

何もない空間に向かって話し掛ける。

——…何でしょう？…——

姿無き声が、答える。

「見えていたのね、あの子にも。あなたの…死神の姿が」

——…いかにも、あの方にも見えていた……

「ねえ、シェンシア」

手触りの良いショールをもてあそびながら、ほほえむ。

「気に入らないの」

——…と、言いますと？……

死神の問い掛けに、彼女は心底おかしそうに笑った。細い肩を震わせ、握った拳にすじを浮かばせて。

「本当に意地悪ね、わかっているのでしょうか？」

誰よりも愛しているのに。他の何よりも、望んでいるのに。

「何も知らずにその愛を奪っていくあの子も、弟も。憎くて憎くてたまらないわ」

くつくつと、喉の奥にあった笑いがやがて声になる。笑いが大きくなればなるほど、負荷のかかった身体が悲鳴をあげ、やがて大きく咳き込んだ。

しかし、笑いは止まらない。

肩を震わせ息を荒げながら、彼女は笑い続けた。

B e t w e e n t h e d a r k a n d t h e d a r k .

[5]

(後

〈訳〉闇と闇の狭間で

序章†Solitude of rabbit that has blue

Solitude of rabbit that has blue eyes.

“死神の声が聞こえる少女”の存在が、王族関係内でまことしやかに囁かれ始めたのは、彼が王女リレイアのもとへ訪れてから何日も経たない頃からだった。

王族といっても、死神の存在を知り得るもの、すなわち国家プロジェクトに関わる人々である。

それはごく少数であり、しかしながら国家に及ぼす権力は計り知れない。

表向きには国家繁栄のため、国務をまっとうする優秀な貴族として。

しかしながらみな、国家極秘プロジェクト始動のための駒としての闇の顔を持っているのだ。

アレンもまた、その者達のうちの一人なのであるが。

十年以上の月日をかけて、綿密に作り上げられてきた極秘計画。プロジェクト始動の中心的な位置に属しながらも背後で蠢く不穏なものの存在を、確かなものとして感じていた。

裏切り、裏切られ。

殺し、殺され。

結局のところ、たとえ誰であろうとも、真意を知るものはいないのだろう——国家の最高権力者であれど、知らない事は無限にある。王は無知だと嘲笑ったのは、誰であっただろうか。

「あれー、青ウサギじゃん」

耳障りな声。

その姿を確認せずとも、アレンには声の主が誰であるかわかっていた。

振り返って見た先に立っていたのは、銀色をしたストレートの髪を肩までのばした、色白の男。

青年というにはまだ幼さが抜け切れていないようにも思えるが、実際のところ、アレンとは一つ二つしか年齢は変わらなかったはずである。

「相変わらずシケた面してんなあ。暗いつての」

彼が軽い口調で侮蔑の言葉を吐くのは、いつもどおりの挨拶のようなもので、アレンはその言葉に対して言葉を返すことはしなかった。

任務遂行の最中であるのだろう、縄で両手足を拘束された罪人らしき男が一人、彼の後ろからチラチラとこちらをのぞき見ていた。

「久方ぶりですね、リュア様」

今いるこの場所は、限られた者しか立ち入ることを許されていない。

限られた者とはつまり、王より与えられた権限のある者——爵位を持つ者達である。

今日の前にいる人物は、伯爵である自分より一つ上の爵位、公爵

の地位に立つ者。

誠意をあらわすつもりなど毛頭なかったが、形式的なものとして挨拶を返す。

恭しく頭まで下げてやれば、彼は鼻で笑った。

「おいおい、心にもないことするなよ。虫酸が走る」

「敬意を表すことが、問題だとても？」

「問題ないさ。その敬意ってやつが本心なら、な」

彼は口元に弧を描きながら、アレンの姿を頭のとっぺんから足の先まで見つめた。

「どうした？今日はめずらしく、地味な格好してんじゃん」

「そうでしょうか」

「ああ、地味だな。お前の艶やかな金髪には“紅”が映える」

彼は貴族らしいゆったりとした動きで、アレンの上着の内側から小さな折り畳みナイフを取り出した。

すぐ近くで、トン、という軽い音がして、アレンの髪や顔、服など至る所に血潮が飛んだ。

「…うぐっ…あああ…！」

苦しげに呻いて、がくりと床に崩れ落ちる男。

手足を拘束されたまま、罪人は首元からおびただしい量の血を流していた。

もがき苦しむ男を見ても、アレンのなかに特に感情が芽生えることはない。

「ひどい御方だ、こんなに苦しそうな顔をしている」

「所詮罪人さ。」

もともとオレの任務は、こいつを最大の苦と一緒にあの世に送るところだからな」

彼は返り血を浴びたアレンをどこか楽しげに眺めて、それはそれは美しい笑みを浮かべた。

「お前には、その姿が一番似合ってる」

「それは、光栄です」

投げ渡され、手のなかに納まったナイフは、汚らしい罪人の血に染められていて。

まるで自分自身を見ているようだと、アレンはやんわりと笑みを浮かべた。

罪人の血で彩られた格好のまま微笑む自身の姿は、狂気でない人々の瞳にはどのように映るのだろうか。

脳裏に一人の少女の姿が浮かんで、すぐに消えた。

「流行病にかかってしまわれたと伺っていましたが、任務に戻られたということは、もう体調に問題はないのですね」

「ああ、残念ながらこの通りさ。完全復活」

「リュエ様の姿が見えないようですが」

「ああ、アイツならまだダウンしてる。

弱っちいからな」

「お大事にと、お伝えください」

言葉と一緒に頭を下げる。

これ以上離すことはない、という意味をこめての会釈だった。
相手にもそれは理解できているらしく、特に何も言わなかった。

「ああ、そうだ」

あたかも、たった今思いついたというような口調。

歩き始めていた足を止めて彼を振り返れば、彼はいつも通りの、
嫌味な笑みを浮かべていた。

「面白い噂を聞いたんだよ。

プロジェクトの最深部まで関わっている人間が、オレら以外にいる
んだと」

「表沙汰になっていないだけで、そのような人間は大勢いるでしょ
うね」

やんわりとアレンが言葉を繋げば、彼は少し驚いたように目を見
開いた。

「…ははっ。リュエの言った通りか」

彼はそう一人ごちて目を細め、闇色に染まった笑みを浮かべる。その背に負う計り知れない程の闇が、彼を包み込んでいた。

「…まあ、いいさ。誤魔化したいと思っているなら、今はそれでも十一年前に、お前が任務で犯した失敗。知っている者は、まだそんなに多くはない」

——すべて知っているのだ、と。

彼は、そう言っているのだ。

「みんな、興味津々なんだよ。

お前が執着するものってのは、どんなものだ？ ってさ」

子供のような無邪気な声音で、紡がれる言葉。

おそらく、もう逃げることはできない。彼らに“捕まってしまう”から。

「…プロジェクトに関わるデータ、ですよ」

「…そうか？ それなら、そういう事においてやろう。

…大切なものってさ、大事にすれば大事にするほど良くないらしい」

「私にそのようなものが、あるとでも？」

そう言って、冷たく微笑み返す。

——はるか昔から、一人きりで生きてきた。今も、それはかわら

ない。

「リュエからのアドバイスを、伝えておこうと思ってさ」

何もかもを見透かしたような口調、細められる瞳は嘲笑っているかのよう。

「…手放したほうが良い、今すぐに。身の破滅を呼ぶ前に、な。寂しがり屋の青ウサギちゃん」

片手をひらひらと振りながら去っていく、彼。
すべてが癩シヤクに触る。

この場で始末してしまえば、という感情が黒い渦となって胸にとどまっていた。

爪が食い込むほどに握りこんだ手のひらに、ふと、やわらかな感触が思い出される。

温かな頬に、もう一度触れられるのなら。
心の平穏を得られるのなら、と。

——手放したくない。

……切に願っているのは、誰？

.

序章†Solitude of rabbit that has blue

〈訳〉青い眼をしたウサギの孤独

一章†Hero who is fascinated by the dark.

Hero who is fascinated by the dark.

新学期が始まり、ユーリは新たな学年として一年の始めを迎えていた。

昨年の学年末、特別試験で優秀な成績を収めたロイは、一年分の飛び級を許可され、今年度からユーリと同じ学年、同じクラスで学んでいくこととなった。

ロイの聡明さを、アレグラさんはもちろん、ロイの身の周りにいるすべての人々が喜んだ。

メイドさんたちであったり、王宮の守衛たちであったり、クラウド、イオさんもまた、ロイの成長を心から喜んでいたのだった。

「お嬢様、準備は整いましたか？」

扉の向こう側から声が掛けられて、ユーリは今行きますと言葉を返した。

毎朝着替えを手伝うと言ってきかなかったアレグラさんや、メイドの皆さんの申し出を、ユーリはやりわりと断った。自分でできることならばできるだけ自分でやりたかったし、そうするべきだという思いがユーリの中にあったからだ。

お嬢様という呼ばれ方にもいまだに抵抗があったが、メイドさんたちからすれば、仕える者に対しての決められた呼び方なのだという。

それをユーリ一人のわがまままで変えさせてしまうことも悪いと思い、

ユーリは慣れるしかないのだと腹をくくったのだった。

鞆の中身をもう一度確認し、鏡の前に立って自分の姿を確認する。誰から見ても、自分はどこにでもいるようなごく普通の女の子だと思ふ。

何の変哲もない、普通の生活をしている女の子。

お嬢様何て呼ばれるような生まれでもなければ、華やかな容姿も持ち合わせてはいない。

「お嬢様、殿下がお待ちですよ。お支度のお手伝いは必要ですか？」

「いえ、大丈夫です」

フォードさんに出会って都市に赴き、養子という関係になって、ユーリの身分は全くと言っていいほど変わってしまった。

きれいな屋敷に住み、きれいな洋服を身にまとい、洗練された教養を身につけるべく、限られたものしか入学を許されない国家学校に通う。

ロイと出会ってから、さらにその生活は変わっていった。

身支度を整え部屋を後にし、小走りとはまではいかないものの早足で玄関ホールへと向かえば、送迎用の車が目の前で待機していた。車のそばで控えていた男の人が、ゆったりとした動作でドアを開いてくれる。

足元に注意しながら車に乗り込めば、後ろでパタンとドアが閉められた。

「ロイ、ごめんなさい。待たせちゃって」

「ユーリ、おはよう！ 良い朝だね」

謝罪の言葉を口にしたユーリだったが、ロイは少しも気にしていないのか満面の笑みで挨拶をしてくれた。

不安に染まっていた心が満たされていくのを感じながら、車はユーリとロイの通う国家学校へと走り出したのだった。

隣に座る、年もあまり変わらない少年が、一国を担う王の息子・皇太子殿下であったという事実を知ったのは、ロイと出会って一年近くが経過してからだった。

隠しているつもりはなかったのだというその事実を知ったとき、ユーリは言葉を失ってしまうほどに驚いたし、これからどのように接していけばいいのかと戸惑った。

しかし彼の大らかで優しい性格のおかげで、ユーリとロイは今までどおりの親しい友人としての付き合いを続けている。

多忙のためにあまり屋敷に帰らないフォードさんの代わりにと、アレグラさんが保護者の代わりを申し出てくれた日から、ユーリとロイは同じ屋敷に暮らしている。

新学期が始まってからは毎日、登下校をともにしていた。

「新学期が始まって今日で5日目だけど、クラスには慣れた？」

クラス替えもなく、持ち上がりで進級したユーリとはわけが違い、周りに見知った友人のいないロイ。

そんな彼を氣遣った言葉だったが、当の本人は全くと言っていいほど不安な様子を見せないから驚きである。

「うん。ユーリもいるし、今のところ授業にもついていってる。

わからなくなっても、ユーリに聞けるから大丈夫さ」

「そんなことないよ、ロイのほうは何だって出来るもん。逆に、私が教えてほしいくらいだよ」

「ユーリは努力家だから、自分で何でもやろうとするじゃないか」

出会ったばかりのころは、執事にドアを開けてもらうことにさえ戸惑っていたと、ロイは度々思い出してはおかしそうに話す。

フォードさんに養子として引き取られる前までは、今とは全く違った生活をしていたのだ。

仕方がないことなのだと何度説明しても、ロイにとってのお気に入りエピソードになってしまったのか、面白半分に話題に出されては気恥ずかしい思いをするのだった。

「着替えをするのも、部屋の整理整頓も自分でやっているんだろ？ユーリらしくて、僕は好きだな」

「そんなふうにおだてようとしたって、全然嬉しくないよ」

「おだてるといふか……本音というか、ね」

曖昧な言い方をするロイにユーリは首をかしげて見せる。

ロイはそんなユーリの様子に少し困ったような顔をして、小さくため息をついた。

「ユーリみたいな女の子に、僕は今まで出会ったことが無いよ。すごく居心地がいいんだ。

だから、僕にとってユーリは特別」

「…ありがとう。私にとっても、ロイはとても大事な友達だよ」

「……、はあ」

なぜかがつくりと肩を落とし、盛大なため息をつくロイ。

「私なんかと友達なんて、嫌だった？」

「そうじゃないよ、僕はユーリが人として好きだし、尊敬もしてる。

嫌だなんて思ったこと、一度もないよ」

何の迷いもなく投げかけられた言葉に、ユーリは頬に熱が集まるのを感じる。

こんなふうになっすぐで、自分の思いを言葉にできるロイを尊敬し、羨ましく思う。

それと同時に、あまりにもなっすぐな言葉に、どうしても恥ずかしくなってしまう。

「うん、私もロイのこと、とても尊敬してるよ。
友達になれて良かった」

「…まあ今は、それでもいいけどさ」

少し複雑そうな表情のまま、ロイは呟いたのだった。

教室にたどりつけば、普段通りの光景がそこにある。

ロイが一国の王の息子・皇太子であるということを、クラスメイト達は当たり前のように知り得ていた。

そんな高貴な身分であるロイと、学校位置の異端児であると陰でさ

さやかれているユーリが連れ立って教室に現れれば、誰だって不思議に思うに決まっている。

クラスメイトから投げられる視線をユーリは仕方のないことだと思っただし、当たり前のことだとも思っていた。

「ごきげんよう、ロイヴィア様」

絹糸のような滑らかな金髪をふわりとなびかせながら、一人の少女が近づいてくる。

ユーリやロイと同じクラスに在籍する生徒で、フエナ・カメラアという名の、とても美しい少女だった。

「あら、ロゼル様もいらっしゃったのね」

いかにもわざとらしく付け足された言葉に、彼女の周りからクスクスという忍び笑いが漏れた。

彼女を取り巻いているのはクラスにいる大半の女子生徒たちで、彼女がこのクラスにおいてどのような立場の人間なのかを如実^{ニョジツ}に表していた。

「あはよう、カメラアさん」

にっこりと微笑みながら挨拶を返すロイは、その育ちの良さと優れた人柄が見て取れた。

いつもは見せない大人びた表情に、整った容姿も加わって、まるで物語に出てくる王子様のようにだとユーリは思った。

実際のところ彼は真正正銘の王子様であるわけで、そんなふうに考えてしまったユーリは、ロイが王子様であるという事実に対する認識の薄さに自分自身あきれ返ってしまった。

日々ユーリがロイに対してとっている態度を、もし他の人々が見た

としたならば、ユーリのあまりの不敬さに、彼らは間違いなく卒倒するだろう。

そんなくだらないことを考えて、ユーリは心中でため息をついた。

予鈴のベルが鳴り、クラスメイト達はそれぞれの席について授業の準備を始める。

ユーリもまた席について、他の生徒たちと同じように授業の準備する。

机の上に必要な教科書とペンをとりだしながら、ユーリは先ほどの出来事を反芻していた。

半年前、ロイのおかげで普通の生活に戻れるようになったユーリは、フォードさんに勧められるがままに国家学校へと編入した。

半年間のブランクがあったものの、学校を終えて帰宅してからフォードさんが雇ってくれた家庭教師に付きっきりで勉強を教わったおかげで、遅れていた勉強もクラスメイト達に追いつくことができた。与えられた課題は真面目にこなし、特に目立った行動もせず。

ひっそりと過ごしているつもりユーリであったが、ある日違和感に気付く。

クラスメイト達が、ユーリに対して好奇の目を向けているのだ。

「途中編入なんて、過去に例が無いのよ。あなた、一体何者？」

その言葉で、ユーリはクラスメイト達の視線の理由がわかったのだ。

ユーリのうわさはクラス内だけに留まらなかったようで、校内を歩けばあらゆる場所で注目の的となった。

ユーリの生まれ師だった国ではごく一般的だったはずの薄い茶の髪は、都市においては異国の色であると物珍しい目で見られた。

以前にこの髪のせいでひどい目にあったこともあったせいか、こういった人々の反応にはどこか納得してしまった自分がいた。

そんな、生徒たちの好奇の対象だったユーリにはじめて声をかけてきた少女が、フェナ・カメリアだった。

遠巻きに好奇のまなざしを向けてくる人間がほとんどだった中で、直接ユーリに疑問を投げかけてきたのは彼女ただ一人だった。

美しく洗練された立ち振る舞いとその容姿、物怖じしない凜とした姿に、ユーリは彼女に少なからず尊敬の念を抱いたほどだった。

ロイが飛び級し、さらにユーリと同じクラスに編入したことから、ユーリとロイの関係が多くの生徒たちに知れ渡り始めた。

ユーリを見る人々の視線が、好奇の眼差しからどこか羨望を含んだ眼差しに変わり始めていることも、ユーリは気づいていた。

同時にカメリアのように、ユーリのような異端児が皇太子のような好奇心の方と親しくすることを、快く思っていない人間がいるということも理解していた。

それによって何かしらの行動が起こされるであろうことも、ユーリは心のどこかで覚悟していたのだった。

Hero who is fascinated by the dark.

+

「さあ、遠慮なさらなくて。あなたのためのお茶会だもの。
楽しんでいただかなくては困るわ」

目の前に広がる光景に、ユーリは困惑していた。
ユーリを含めた6人も女生徒たちが、丸く大きなテーブルを囲む
ようにして腰掛けている。

彼女たちの前にはそれぞれいれたての紅茶が湯気を立てていて、香
ばしい香りが辺りを包み込んでいた。

何故こんなことになってしまったのか、ユーリでさえもわからな
かった。

二日間の週末休暇を挟んだ翌週、週の始めの日。

ユーリはこの日、仕事の都合で学校を休むというロイの伝言を受け、
新学期が始まって以来初めて一人きりで教室へと向かっていた。

長期休暇前であたり前であったことだが、ロイの元気な姿がな
いことに気分が落ち込んでしまっている自分に気づく。

ユーリはそんな自分を叱咤し、なんとか気を持ち直し、教室へと向
かった。

「ごきげんよう、ロゼル様」

「…カメラリ様、おはようございます」

予想していなかった声にユーリは内心驚きつつも、感情を表には出すことなく挨拶を返した。

ロイという存在がすぐ近くにいないときのユーリは、人々の注目を集めることはあれど、誰かに声をかけられることなど今まで殆どなかった。

声をかけてきた人物というのがカメラリアであったため、ユーリは心の中に渦巻く不安を払しょくすることができなかった。

薄々感じてはいたが、彼女のユーリに対する認識は今、ただの異国から来た異端児、というものではなくなっているのだろう。

隠そうともしていないのか、カメラリアの表情や態度からは、ユーリに対する嫌悪や侮蔑の感情というものがあからさまに表れていた。

そんな彼女からの誘いを受け、ユーリは中庭の一角にあるティー・テラスにて、カメラリアとその取り巻きたちと共に、決して穏やかとは言い難いお茶会に参加しているのであった。

「ロゼル様は、紅茶がお好きではなくって？」

「いえ、そんなことはありません」

「そう、それならば遠慮なさらず、お召し上がりになって。」

ロゼル様は、私がお招きしたお客様ですもの」

「…はい」

勧められるがままに、ユーリは紅茶を一口飲んだ。

アールグレイの紅茶なのだろうが、アレグラさんの淹れる紅茶とは全く違ったもののように思えて、ユーリはすぐにカップを置いた。味の良しあしよりも、紅茶を飲み下すユーリの一気一動を見逃すまいとしているような、取り巻きたちの視線がいたたまれなかった。

「今日は、あなたとお話がしたくってお招きしたのよ」

「私と、ですか？」

「ええ」

疑問の色を浮かべるユーリをからかうように、取り巻きの女生徒のうちの一人から声があがる。

「一体どんな手を使って、この学校に不法入学したのか、とか」

その言葉に、クスクスと忍び笑いが漏れる。

カメリアもまた小さく笑い、しかしたしなめるように言った。

「おやめなさいな。そのような下品な物言いは、私たちにはふさわしくはなくてよ」

「ごめんなさい、カメリア様」

「それに、そんなことはどうでもよろしいの。」

私が知りたいのは、一体あなたがどのような汚い手を使って、ロイヴィア様に取り入ったのか、ということですわ」

彼女のピンク色の唇が、ゆったりと弧を描く。

負の感情に包まれていてもなお、カメリアの美しさは変わらない。彼女も自身の美貌を十分に理解しているのだろう、その姿はいつだって自信に満ち溢れ、まばゆいほどの光をまとっていたように思う。しかし今は暗い感情に支配され、まとうオーラも真っ黒な闇そのものだ。

彼女に対して、恐怖は感じない。

唯一つ、「ああ、またか」という言葉だけがユーリの脳裏に浮かんで、すぐに消え失せた。

「取り入ったつもりありませんし、汚い手など使った覚えもありません。」

私とロイは友人です。それ以上でも、以下でもありません」

ユーリの言葉に、取り巻きのうちの何人かが表情をひきつらせた。その理由が分からず彼女たちを眺めていると、カメラアが苦々しげに言い捨てる。

「ロイヴィア様の愛称を……そうね、お可哀そうなロイヴィア殿下は、

この悪魔のような女にたぶらかされているのだわ」

「信じられませんか、異国人のくせに」

「本当に、けがらわしい髪の色なこと」

口々に悪態をつく彼女たちの表情は、育ちの良さを覆い隠してしまふほどの醜さだった。

高い身分で教養のある人間でさえも、妬^{ネタ}みや蔑^{サゲス}みなどの負の感情に吞まれてしまえば、たちまちその醜悪な人間の姿をさらけ出すのだ。

孤児院にいた頃にユーリにひどく当たっていた少女たちは、孤児という自分たちの身のうちから性格が歪み、似たようなものたちを陥れることで自分自身の心の平穏を保っていたのだ。

だからこそユーリは少しの嫌がらせや悪口ならば耐えることはできたし、彼女たちを恨むこともなく、仕方のないことであると思っていた。

「確かにこの髪は、あなた方にとって珍しいものかもしれませんが、けれど、けがらわしくなんかない。私の国の、髪の色なのだから」

私を産んでくれたお母さんの、髪の色。

私を育ててくれた、お父さんの生まれた国。

孤児院でのたった一人の友人であり家族だった、マリと同じ髪の色。

「あなたたちにこの髪の色が、わかるわけない」

声音こそ静かなものだったが、ユーリの心は怒りと悲しみに震えていた。

家族も富も地位も、すべての人々がうらやむもの全てを持ち合わせた人々であるというのに。

目の前の彼女たちの発する言葉は、鋭利な刃物へと姿を変えてユーリの心を、大切な人々を傷つけたのだ。

「何て失礼な人なの！ 礼儀もわきまえないで…」

怒りに我を忘れ、椅子を立ちあがって抗議の声を上げる彼女たち。

「無礼をお詫びなさい、カメラリア様に。さあ！」

「お待ちなさい、あなたたち」

顔を真っ赤にして怒りに震える取り巻きたちに、カメラリアはゆったりと静止の声をかけた。

「無礼なのはあなたたちも同じではなくて？
椅子から立ち上がって、そのうえ大きな声を上げるなんて、はしたない」

荒い声をあげていた取り巻きたちが、真っ青になって口をつぐむ。
カメリアの言葉にすっかり委縮した彼女たちは、そのまま静かに椅子に腰かけた。

「それに、そんなふうにはお可哀そうよ。
だってこの方は、ご両親がいらっしゃらないのだもの」

カメリアの言葉に、その場の空気が止まった。

「幼いころから、孤児院にいらっしゃったのだとか。」

そこで伯爵さまの目に留まって、養子縁組をされたのだそうよ」

同情を含んだ、というよりは、蔑み嘲笑うような声音で彼女は言った。

ざわざわと揺らめく空気。

「そうでしたの」だとか「お可哀そうに」と言った言葉が感情もなく飛び交う。

彼女たちの言葉だけではなく、この場に存在するすべてのものが、まるでユーリを嘲笑っているかのようにだった。

「伯爵さまも、本当に心のお優しい方。」

このような惨めで不幸なロゼル様にも、救いの手を差し伸べてくださるなんて」

救いの手と、カメリアは言った。

……本当に？と、誰かが問う。

ほんとうに、わたしをひとりぼっちにしたのは――。

「……た」

「…ロゼル様？何かおっしゃって？」

「殺したの」

高貴な方々の集まってるこの場所において、不釣り合いな言葉。小さな声で、しかしはつきりと発せられたユーリの言葉に、その場にいたすべての者が息をのんだ。

「私を救ってなんかない。」

何もかもを奪ったの、彼が私から奪った。

私の生活も私の名前も、大好きだったパパも…！」

溢れ出す涙も声も感情も、ユーリは止められなかった。

「なっ…何をおっしゃっているの？」

気が触れてしまったのではなくって？」

「気が触れているのは、この国そのものでしょう？
なんで私が孤児になってしまったか、あなたたちは知っている？
全部、馬鹿げたこの国のせいじゃない！！」

私からパパを奪ったのは、アレン・フォードとプロジェクト関係者たち。

そして彼もまた、プロジェクトに囚われ身をささげている。

自分自身の身体のことなど省みず、国家機密を最優先に考え、何も明かさない。

彼の胸に広がっていた毒々しい紫色の痣を思い出すたびに、ユーリは恐怖に身がすくんだ。

「何て子なの…私たちを——いえ、この国を侮辱するということは、ロイヴィア様も同様に侮辱しているということなのよ！
あなた、それをわかってものを言っているの！」

「国なんて、私にはどうでもいい。
ただ大好きな人たちと一緒に暮らせれば、それだけで幸せだったのに。」

この国は、それをすべて奪ったの！」

今も、まだ。

ユーリはそのしがらみから抜けられない。

「いい加減になさい！」

無礼者の恩知らず、身の程を知りなさい！

あんたみたいな人間のクズ、父親共々死んでしまえばよかったのよ
！！」

逆上して真っ赤な顔をしたカメラアが、細く華奢な腕を空高く振り上げた。

それは迷うことなくユーリの顔めがけて振り下ろされ、ユーリは避けることはせず目を閉じる。

パシン、という軽い音が響き、すぐに静寂に包まれた。

痛みが無いことに疑問を抱いて、ユーリはゆっくりと目を開く。
振り上げられたカメラアの手は、ユーリの背後から伸ばされた第
三者の手によってその動きを封じられていた。

「何してるの？あなたたち」

聞き覚えのない穏やかな声。その声にのせられた、明らかな怒り
の感情。

振り向けばそこには、ユーリと同じ髪の色をした異国の少年が笑み
をたたえて立っていた。

優しい笑みとは裏腹に、瞳の奥に凍りつくほどの冷たい感情を宿
している。

そのただならない雰囲気を感じ取ったのか、カメラアは真っ青にな
って、少年の手を振り払おうとした。

「往生際が悪いね、あなたは」

吐き捨てるような物言いに、ユーリは内心でドキリとした。

物腰は柔らかく紳士的であるのに、周囲に放つ空気はあまりにも攻
撃的だった。

「やっ…放して…！」

カメラアは力の限りに少年の手を振り払い、かばうように自らの
手首を引き寄せた。

鋭く睨みつけるカメラアに、少年は全くひるんだ様子を見せない。
表情は変わらず、穏やかな笑みを浮かべたままだった。

「…私にこんなことをして、ただで済むと思って？」

「さあ？ わからないな。

君がどこのだれなのか、僕は全く興味が無いから」

カメラリアは言葉に詰まったように、口をつぐんだ。

やがて悔しそうに顔を歪め、震える手のひらをきつく握りしめた。

「覚えていらっしやい。きっと後悔するわ」

捨て台詞を残して、カメラリアは取り巻きたちを連れてその場を去って行った。

彼女たちの後ろ姿を、どこか夢を見ているような心地で眺めていたユーリだったが、少年が何やら話しかけてきたのに気づいて意識を戻した。

「大丈夫？ ぼうっとしてるみたいだけど。

怪我はしていない？」

ハンカチを渡されて、戸惑いつつも有り難く受け取る。頬にのこる涙の跡を、そっと拭き取った。

にっこりと微笑みながら問いかけてくる少年の瞳には怒りはなく、とても穏やかなものだった。

少年の変わり様にユーリは心中で驚きつつ、ユーリは彼に向かって頭を下げる。

「助けてくださって、ありがとうございました。
もう大丈夫です」

「そっか、よかった」

助けてくれたこと、そして気遣いを見せてくれたことに、感謝の気持ちがあることは変わらない。

しかし一体何のためにユーリのことをかばってくれたのか、全く分からなかった。

もしかしたらと、ユーリは考える。

彼とユーリの髪の色は同じ、この国では珍しい茶色である。

この髪のことと言い争っているのが聞こえて、彼はユーリをかばってくれたのかもしれない。

だとしたら、ユーリはとんでもないことに彼を巻き込んでしまった、ということになる。

「あの…ごめんなさい。

こんなことに巻き込んでしまつて」

カメラアはもちろん、言葉にこそしないがユーリや彼のような髪の色を、蔑んだ目で見ている人はたくさんいる。

先ほどの出来事がきっかけで、彼はもしかしたら、カメラアやその取り巻きたちによって嫌がらせを受けるかもしれないのだ。

「もしかして、君のせいで僕までが嫌がらせをされるかも、って思ってる？」

「……」

「凶星みたいだね」

心の中をのぞきこまれてしまったのかと錯覚してしまうくらいに、彼はユーリの心中を的確に言い当ててしまった。

何も言えなくなって押し黙ったユーリを見て、少年は楽しそうに笑

う。

「君がこれまでどんな思いをしてきたのか、今のでなんとなくわかったよ。」

でも大丈夫、もうそんな思いはさせないから」

彼はとても優しい手つきで、ユーリの肩に手を置いた。

どこまでもユーリのことを気遣ってくれる彼に、ユーリはどうしていいのかわからず瞬きをする。

彼はやはりユーリの思考を先読みしたように、大丈夫だよ、と言って笑った。

「僕は全然平気だよ？」

むしろ、これからが楽しみなっちゃったくらい」

にっこりと微笑んだまま、彼はユーリの手になんと触れる。

触れられてピクリと動いたユーリの手を包み込むように握りしめる彼は、とても優しいまなざしをユーリに向けていた。

「この学校に編入してきた甲斐があったよ。」

君に会えたのだから」

柔らかな物腰と、穏やかな声。

ごく自然に、手の甲に落とされたキス。

その言葉と行為は、ユーリの思考回路を麻痺させるには充分すぎるほどだった。

「僕と同じ、極東生キョクトウまれの君に」

.

+

「ルカ・ナトリです。よろしくおねがいします」

茶色の髪をサラサラとなびかせながら、彼はゆったりとお辞儀をする。

顔を上げた彼の瞳と、ユーリの瞳とがぱちりとぶつかってしまう。彼は一抹の動揺も見せず、それどころかさらに深い笑みを浮かべてユーリを見つめた。

「君も、このクラスだったんだね」

その言葉にクラスメイトはもちろん、ユーリ自身も同様の色を隠せなかった。

昨日、カメリアたちのお茶会の一件でユーリを助けてくれた、異国の少年。

まさか彼が、ユーリと同じ学年で、ユーリと同じクラスの生徒であったとは、全く予想だにしていなかった。

「ユーリ、知り合い？」

隣の席に座るロイが、怪訝そうな顔をして尋ねてきた。ユーリはその問いかけに、曖昧に頷くことしかできなかった。

知り合い、とはいってもつい先日、ほんの数分会話をしただけの間柄である。

知り合いと言い切ってしまったていいものなのか、いまいちわからなかった。

しかし対する彼は、不思議なくらいに親しみをこめた目でユーリを見ているような気がする。

顔見知り、と切り捨ててしまうのも、失礼すぎる気がしてならなかった。

「まさか同じクラスだなんて、こんな嬉しいことはないよ。
改めて、どうぞよろしく」

いつのまにかユーリとロイのすぐ近くに彼がいて、ユーリの顔を見るなりにっこりとほほ笑んだ。
差し出された手を握り返し、ユーリは戸惑い一つも何とか笑みを返した。

ユーリとの握手を交わし満足げに笑った彼は、今度はロイに向き直って深々と頭を下げた。

「はじめまして、ロイヴィア皇太子殿下。
ルカ・ナトリと申します。以後、お見知りおきを」

身分の違いから失礼にあたるのか、彼はロイに対して握手を求め
ることはしなかった。

ロイはこちらこそと微笑んで、彼の目の前に手を差し出す。

彼は少し戸惑ったように躊躇したが、やがてロイの手のひらを握り返した。

「ここは学校です、身分など関係なく、互いに友人として良い関係を築ければと思っています、ルカ・ナトリさん」

「ありがとうございます、殿下。」

僕のことは、ルカと呼んでくださってかまいません。
もちろん、君もね。

：そういうばまだ、名前を聞いていなかったね？」

彼の言葉に、それまで彼と殿下に向けられていた教室中の視線が、ユーリに集まってくるのが分かった。

居心地の悪さに肩をすぼめるが、いた仕方ないことなのだろう。

向けられた視線の中にはもちろんカメラアたちの目もあるわけで、ユーリはますますいたたまれなくなった。

「：ユーリ・ロゼルです」

蚊の鳴くような小さな声であったにもかかわらず、彼はなんとか聞きとってくれたらしい。

彼はとても嬉しそうに顔をほころばせた。

「ユーリちゃんか、よろしくね。」

隣に座ってもかまわないかな？」

「ええ、もちろん」

ユーリと同じ異国の髪を持ちながらもなお、怯えることも気後れすることもなく、終始柔らかな笑みを浮かべている彼。

ユーリは彼の持つ独特な存在感に、すっかり圧倒されてしまったのであった。

放課後になり、生徒たちは他愛ない会話を交わしながら校外へと消えていく。

ロイが先生から呼び出しを受けたため、ユーリはロイが戻ってくるまで教室で待っているという約束をしていた。

ユーリは帰宅していく生徒たちの流れをぼうつと見つめながら、誰もいなくなった教室で一人、ため息をついた。

ユーリは時々、この国家学校が全寮制であるという事実を忘れてしまいそうになる。

何故だかユーリは国家学校へ編入してきてから、他の生徒たちと同じように寮に入ることがなかった。

それがフォードさんの意図なのか、はたまた他の理由からなのか。ユーリには分からなかったが、このような措置が取られた生徒はユーリ以外に、たった一人しかいなかった。

——それは皇太子であり、第二王位継承者であるロイその人だった。ロイの素性を知るまでは、寮に入らない生徒というものがそれほどまでに稀であるという事実、ずっと気付かずになっていたのである。そんなことを考える余裕すらなくらいに、ユーリは、ユーリ・ロゼルという人間になるまでに多くの苦難を乗り越え、人々からの偏見に耐えなければならなかった。

ルカ・ナトリ——名取瑠加。

ユーリと同じ髪の色、同じ国の言葉の名前をもった少年。とても不思議な人だと、ユーリは思った。

今日一日、殆どの時間を彼と一緒に過ごしていた。クラスメイトなのだから当たり前と言ってしまうばそうなのだが、授業間の休み時間や昼休みも一緒に過ごし、色々な話をした。彼はいつでも、笑顔以外の表情は見せなかった。

異国人だと蔑まれていることに気づいていないわけではない。知りもしない生徒から、聞こえるくらいの声で悪態をつかれたりも

したのだ。

気づかないほうがおかしいというくらいに、彼もまたユーリと同様にたくさんの嫌がらせを受けていた。

けれど彼は、笑顔を崩さなかった。

「……不思議な人」

そうひとり呟いて、ユーリは机の上に突っ伏した。

「ユーリちゃん？」

音のなかった教室に、澄んだ声が響く。

ユーリは驚いて肩を震わせ、声のしたほうを振り向いた。

「……！……ルカ、君」

見知った人物であったことに安堵し、ユーリは大げさなくらいに反応してしまった自分自身を恥ずかしく思った。

「はは、ルカで良いって言ってるのに」

おかしそうに笑って、彼はユーリの隣に腰掛ける。

何をするでもなく、彼はユーリの顔をじっと見つめていた。

「……あの」

「うん？」

「私の顔に、何か付いてる？」

あまりにもずっと見つめられていたため不安になったユーリは、ルカに向かつて思わず問いかけていた。

ルカはというと一瞬キョトンと目を丸くしたあと、勢い良く吹きだした。

「ぷっははは！おもしろいね、ユーリちゃんって」

何かがはじけたように笑うルカに、今度はユーリが目を丸くする番だった。

ツボにハマってしまったらしく、目じりに涙すら浮かべて笑う彼に、ユーリは次第に腹立たしくなってくる。

「そんなに笑うところかな、ただ気になっただけなんだけど…」

「ふっはは、ごめん。」

でも、そうじゃないんだ」

「そうじゃないって？」

「顔に何か付いてるとか、そんなんじゃないくてさ」

大笑いしたせいなのか、彼の頬は上気してほんのりと赤く染まっ
ていて。

そんな彼の顔が、ユーリの目と鼻の先にある。

涙に濡れたルカの瞳が、至近距離でユーリを映していた。

「とっても可愛らしいなって、そう思ったんだ」

そう言って伸ばされた彼の手を、ユーリは拒むことができなかった。

彼の指先は迷うことなくユーリの髪に触れる。サラサラと彼の指の間を通り抜けていく、ユーリの髪。

「…この髪のせいで、君はきつと、辛い目にあってきたんだろうね」

ユーリの瞳には、彼の緑色の瞳しか映っていない。

彼はユーリの瞳を自身の瞳で捕えたまま、放さない。

「それでも君は、この髪の色が大好きで、誇りに思ってる」

ルカはユーリの髪のひと房を掬いあげると、その髪の毛に口付けた。

まるで愛しむようなその行為に、ユーリの思考は次第に麻痺していった。身体を自由を奪われ、心をも翻弄されていく。

「どうしようもなく、君に惹かれる」

顎をすくわれ、近づく互いの唇。

「僕だけのものにしてしまいたいくらいに」

唇からほんの少しずれたところに、温かく柔らかな何かが当たった。

「……ユーリ」

ユーリでも、ルカでもない誰かの声がユーリの名を呼ぶ。

我に返ったユーリは、たった今起こった出来事を整理しきれずにいた。

ただ漠然と分かっていたのは、鼻先が触れてしまうくらいに近くにある、ルカの顔。

「……っ」

頭の中が真っ白になる。

椅子を蹴るようにして立ち上がり、ルカとの距離をとった。

足がぐぐくと震え、まるで自分のものではないように思えた。走り出そうとしても、足は床に固定されてしまったかのように動かない。

「ユーリ…?」

このときによく、教室に現れた人物がロイであったということに気がついた。

いつもならば、考える必要もなく気づいていたはずだった。

今この学校には、ユーリの名前を親しげに呼んでくれる友人なんて、たった一人しかないのだ。

そんな事実さえも忘れてしまうくらいに、ユーリは動揺していた。

一体、何が起こっている？

自分が何をしているのかも分からなくなって、弾かれたように走り出した。

「ユーリ…っ!」

背に向かって叫ぶロイの声は、どこか悲しげに、ヒトケ人気のない廊下

に響いていた。

+

「……申し訳ありません、ロイヴィア様」

「それは、何に對して？」

ロイの口からこぼれた声は、今までにないほど低く、暗い感情を宿したものだった。

困ったように笑う目の前の男・ルカに、ロイの心はこれまでにないほど黒く渦を巻き、ふつつつと沸き上がる怒りを抑えることもできなくなっていた。

「ユーリに何をしたのか、君は分かっているのか？」

「ええ、もちろん。嘘偽りのない僕の気持ちをも、彼女に伝えたまでです」

何か問題でも？と首をかしげて見せる彼に、ロイは今にもその胸倉をつかんでしまいそうになる。

もはや怒りを隠そうともせず、ロイはルカを睨みつけていた。

「それが一体、どれだけ彼女の心を傷つける行動だったのか、よく考えるべきだ」

吐き捨てるように言い、ロイはユーリの鞆と自分自身の鞆を抱え、ユーリの後を追おうと教室を出る。

「ロイヴィア様」

背中に掛けられた声に、ロイは足を止めた。まだ何か言うつもりなのかと、ロイはあからさまに嫌悪の色を乗せた瞳で彼を振り返る。夕暮れの太陽を背に浴びたルカの表情は、ロイからは窺い知ることが出来なかった。

「…可愛らしいね、まるで幼子のようにだ」

「……何？」

今までとはまるで別人のような声音と口調に、ロイは眉をひそめる。

小馬鹿にするように嘲笑う彼は、ひどく冷たいオーラを纏っていた。

「大切なものをとられるのは嫌？怖い？小さくて、無力な子羊ちゃん」

「……君は、一体何者だ？何の目的で、ユーリに近づく？」

「何者かと言われましても、ね。この学校の一生徒にすぎませんよ、殿下。」

目的は……いくら殿下といえど教える筋合はありませんね。ただ一つお伝えできることといえば、そうですね。あの子のことは、とても気に入りましたよ？」

瞬間、ロイは背に冷たい汗が流れおちるのを感じる。それが誰のことなのか、聞くまでもなく分っていた。

「…これ以上、君をユーリに近づかせるわけにはいかない」

「ははっ！大層なセリフですね。まるで姫を守る騎士ナイトのようだ。

まあ、あなたの場合は、姫を見守ることしかできない王子様、ですね」

「何とでも言えればいい。誰が何と言おうと、僕はユーリを守る。ユーリだけは、絶対に傷つけさせない」

あの日——ユーリと初めて出会ったあの日、あの時。

空虚の色のみをその瞳に浮かべていた彼女の姿を見たとき、まるで羽根を落とされてしまった哀れな天使のようだと、そう感じたことを今でも覚えている。

それほどまでに、彼女は打ちひしがれていて、ひどく傷ついていたのだ。

これ以上、そんな姿を見たくはなかった。

やっと取り戻してくれた笑みを、失わせるわけにはいかなかった。

——彼女のすべてを、自分自身が守ると決めたのだから。

「今後一切、ユーリに関わるな」

ありったけの敵意をこめてルカを睨みつけ、教室を後にする。誰もいなくなった廊下は、闇に侵食され始めたように薄暗く、肌寒かった。

ユーリは今、一体どんな気持ちでいるのだろうか。

考えれば考えるほど胸は締め付けられる一方で、一刻も早くユーリのもとへ駆けつけなければと強く思う。

——どうか、彼女を。彼女を守るために、そばに居ることを許してください。

神などという存在を信じたことなど、一度もなかった。
ただ、もし本当に居るとするならば。

自分自身のすべてを捧げてもいいと、そう思った。

H e r o w h o i s f a s c i n a t e d b y t h e
d a r k . . . E N D

**H
e
r
o

w
h
o

i
s

f
a
s
c
i
n
a
t
e
d

b
y

t
h
e

d
a
r
k.**

〈訳〉闇に囚われし英雄

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4087e/>

死神に愛された少年

2011年10月3日05時48分発行